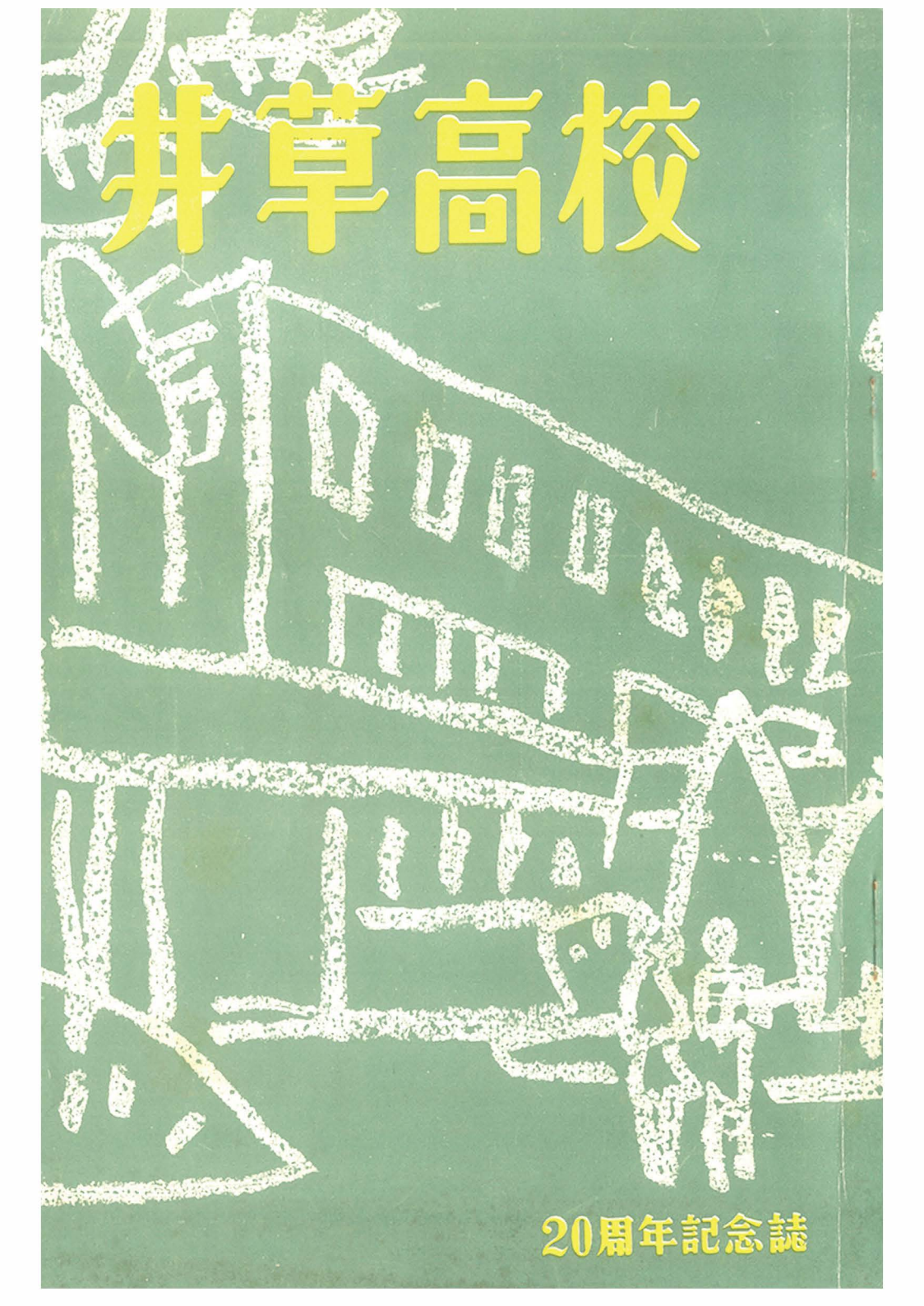
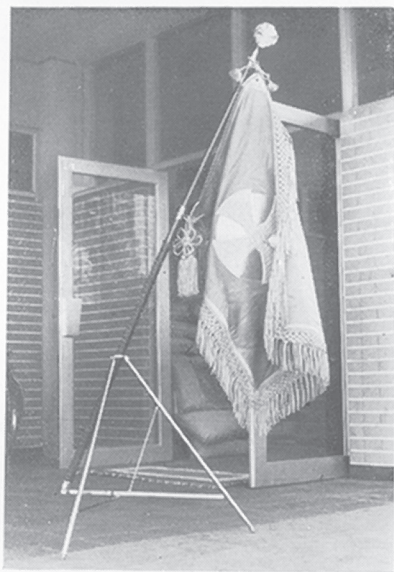


井草高校

The background of the cover is a solid green color. Overlaid on this are white, chalk-like drawings. At the top, the title '井草高校' is written in large, bold, yellow characters. Below the title, there are several white line drawings. One prominent drawing shows a school building with a series of arches or windows, possibly a library or a main hall. To the right of the building, there are several small, stylized figures of people, some standing and some sitting, suggesting a group of students or staff. The overall style is simple and artistic, reminiscent of a school yearbook or a commemorative publication.

20周年記念誌



二十周年記念・本校々旗（正面玄関にて）

校旗・歴代校長・現職員

広瀬初代校長



杉山第二代校長



高柳第三代校長



近藤・松島・山根
保谷 三上
寺田・天野・石川・福島
山本・戸村・水野・林
古屋・斎藤・大沢・尾崎
世間瀬・大隅・生野
山口・岡垣・岩淵・真田
佐渡・藤波・谷・大野
玉置・若林・西野・小田島
小島・小倉・毛利・鈴木
青山・工藤・山本

現職員



校高草甘



20周年記念誌



井草高校二十周年記念誌・目次

表紙裏表紙……校舍と前庭。写真版……校長、校旗、校歌。
目次カット……学校の全景。とびら……正面から見た校門。

創立二十周年を迎えて……………真田幸男……………(四)
二十周年に寄せて……………大村仁道……………(六)

特別
寄稿

井草のしおり

……………(七)

あれから十年……………杉山文雄……………(七)
ある一つの断面……………高柳一二……………(八)

創立二十周年に当って……………松本勝太郎……………(一〇)
私の見た井草高等学校の十年

回想十年……………多湖実輝……………(一二)
……………佐藤俊雄……………(一三)

終戦前後……………石川悌二……………(一三)
井草今昔……………梅木清人……………(一四)

井草高
沿革史

井草二十年のあゆみ

……………大野英雄……………(一六)

◆定時制課程の沿革……………堀部光夫……………(一七)
◆新旧両校舎平面図……………(一八)



特 集 懷旧座談会

旧職員・卒業生の語る古き
懐しき井草の思い出と歴史

司会 大野先生

(一四)

古いアルバム

卒業生回顧録

空襲警報下の卒業式	細井もと	(三)
井草への道	友光 尙子	(九)
演劇部揺籃期のこと	小篠ひさ子	(四)
思い出すまま	清水麗	(四)
高校生活を顧みて	仲田節子	(四)
試験	森岡和子	(四)
井草高校の思い出	喜多村 尙	(五)

文芸部
理化部
生物部

気まぐれ
螢光体
天竺鼠

北川典子 (四六)
新井明友 (四八)
鈴木タイ子 (五〇)

生徒会活動・ハイライト

〔寄稿〕井草生徒会創立前後
敢えて自己批判を
生徒会活動の印象

鈴木貞三 (五二)
五島真介 (五四)
江崎公雄 (五五)

◆ クラブ活動の回顧と展望

学芸部での活動―実のり多かった理化部

○筆のしづく……………(三毛) ○明るい井草の象徴

石井坦 (七七)
近藤ちか子 (八〇)



創立二十年を迎えて

真田 幸男

(本校々長)

昭和十六年に、いわば戦争の落し子として生まれ落ちて、けわしい戦局の推移の中に幼児期を送り、物ごころのついたのが終戦直後の混乱期、そこへ学制改革の大あらしが吹きまくって、あっちへこずかれ、こっちへ押し流されながらそれでも大地にしがみつこうようにしてがんばっているうちに、どうやら周囲もおちついて来、経済的にもいくらかの余裕ができて来て、ほっと一息ついて見たら、いつの間にか齢も二十才を数えていたというのが、わが井草のいつわらざる姿であろう。創立二十年にして、はじめて校舎の玄関入口ができたというようなところに、そういうはげしい歴史がもっともよく象徴されている。

年数を五年きざみ、十年きざみにして、創立十五周年とか二十周年とかいって祝うことに、何ほどの意味があるかと聞き直って問われれば、答えるにすべが無いが、井草二十年の歩みを手細に検討してみると、不思議に、大体五年きざみぐらゐにエポックがあるのは、われながら妙である。すなわち、最初の五年目——昭和二十年は、戦争の終結という、大きな境い目をなす年に当るし、十年目の二十五年には、女学校であった井草が新制の高等学校に生まれ変わって、片ちんばではあるが、男女共学の最初の入学式が行われている。十五年目の昭和三十年は、その片ちんば共学に終止符を打って、男女同数の完全共学に踏み切った年で、これは、井草という学校の性格を根本から変える大エポックであった。さて、本年——三十五年は、創立二十年目を迎えたのであるが、待望の本館校舎が竣工し、管理室や特別教室などの物的施設の面での学校づくりが一段落したことで、やはり一つのエポックを画した年と称してよからう。こう考えると、学校の歴史に五年ぐらゐの区切り目をつけて、過去を顧み、将来を案ずる周年行事というものも、案外味なものだと思ふ。そういえば、かくいう私も、この十月で、井草に五年の歳月を過ぎた勘定になる。

ここまで井草が育って来たのには、月並の言いながら、幾多先人の恩恵があることを思うべきであろう。終戦前後

の陰惡を極めた時期に学校のいしずえを固められた広瀬政次初代校長、戦後の混乱期、特に学制改革のあらしの中で学校の進路を確定された二代杉山文雄校長、体育館の建設に文字どおり惡戰苦闘された三代高柳一二校長を初めとして、歴代の教職員各位が、幼少年期の学校をもち立てるために心血を注がれた姿には、まことに頭の下るものがある。それとPTA各位の側面からの援護射撃だ。特に昭和二十八、九年、井草が体育館建設のつまづきで難航した時には、PTA数々の人材を輩出した。当時、これらPTAの方々が学校の矢面に立って奮闘された物語は、今日ではもう伝説化してAはしまったが、学校史の好話柄として長く記録にとどめらるべきであらう。まことに、国乱れて何とやらのことわざどおりである。それと、その後の、校舎建築のために、関係当局への陳情その他に奔走された役員の方々、外部からその促進がたに骨折って下さった地元有力者の方々のお骨折も、特筆大書しておかなければならないと思う。

ところで、過去の足跡を顧み、先人の労苦に謝することと同時に、われわれはまた井草の現在を直視して、将来のあるべき姿を考えることも怠ってはならない。回想は、それが未来を形づくるよすがとなる限りにおいて意味をもつのである。二十年——人間でいえば、ようやく成年に達したばかりの、若い学校である。この若さ、あるいは青っぱさは、現在の井草を荷なうわれわれが、少しく自己反省すれば、だれしも身に覚えのある実感であらう。一面において元氣横溢、はち切れるような突進の意欲をみなぎらせている反面、血氣いまだ定まらず、動揺と逸脱の傾向を脱し得ないでいるのが、われわれの偽らざる姿である。端的にいうと、それは一個の青年の姿にほかならぬ。校是とする完全共学も、形の上では、意外に簡単に同数同質の編成が実現して、それがすでに軌道に乗って来た。そこから出て来るのびのびとした明るさ、楽しさは、われわれが毎日身体でじかに感じている事実である。ただそれにも拘らず、何となく難然として落ちつきが無い。四十年、五十年という長い伝統を持つ学校に比べて、しっとりとした雰囲気欠けである。この難ばくさは、一つには今までの施設や設備の貧しさからも来ていると思われる。それは今度の本館の竣工、およびそれに伴う環境整備の一段落によって、だいぶ薄らいで来たように思う。しかし根本は、やはり学校の若さだ。男女の均衡も、まだほんとうの意味で両者が対等の関係に立って信頼しあい、長短相補うような妙味を発揮するまでに至っていない。すべては、これからだと思う。

だが、そこにまた井草の楽しみがある。人間の青年期に狂瀾怒濤がつきものであるように、井草という学校も今、その避け得ない狂瀾怒濤の中をくぐり抜けているのだ。今の動揺や不安定は、それを通過して、やがてより高次の均衡に達するための踏み石であらう。二十の若者に、いたずらに大人の分別臭さを求めても、無意味である。若者の未完成、不安定の中にこそ、無限の発展の可能性がひそんでいるのだ。そういう意味で、私は青年井草の実り多き将来を見守ってゆきたいと思う。



二十周年に寄せて

大村 仁 道

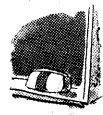
(都會議員)

今回本校の創立二十周年を迎えるに当り、祝辞を申述べる機会を与えられました事を光榮に存じます。二十年をけみして本校が種々の面で今日の發展をされた事は真に結構な事と關係諸氏の御勞苦に對し心から敬意を表すると共に、向後も青少年教育の爲に御尽力を希望致す次第であります。

我国が義務教育の普及という点では諸外国に劣らないという事は既に周知の事ですが、近年は殊に一般の進學率の高まって行く傾向は一応喜ぶべき事柄であります。或る高校生、試験勉強の爲目室に籠り部屋と台所の間に呼鈴を裝置して母親を呼びつけては飲食物を持って来させ、母親も咎めずに用を足してやって居るという例、これは某新聞での所見であります。次々と上級学校へ進學するのは立派な教養を身に附ける爲の手段である筈なのに、何時の間にか主客顛倒して目的がわからなくなってしまうのであります。

米は今年も三年連続の豊作と云いますがこれは決して偶然ではなく科学的研究の推續の結果であり、此頃は青果物も季節感が途惑う位年間を通して四季の品々に事欠かない様です。その外生活全般に及んで科学の發達による恩恵は実に豊富に我々を楽しませてくれます。かくも限りなく人類の幸福と向上を約束する科学を茫莫たる宇宙から探求した賢い人間が、何故人類の不幸と滅亡を予測する道具にこの尊い宝物を使用しなければならぬのでしょうか。現在私共は祖先の想像も及ばない文化の恩恵を満喫して居るが犯罪其他による社会不安は何千年の昔から其儘受ついで確保して居る。色々の物の品質を改良した人間自身の品質を改良する事を怠って居る。そこで当初の目的に反した飛んだ副作用が生じる。名剣も持手の心が未熟なれば氣違ひに刃物で危険な兇器となってしまう。科学振興は結構乍らこれを駆使するに充分な資格を持たねば自分の作った怪物に振廻される結果になる。実りの秋である。実る程頭を垂るゝ稻穂と云うが我々は今一度謙虚な心になって教養を高め人類社会に応分の貢獻をすべく努め度いと思う。

二十周年に當り本校の御發展を祈り一言所感を述べて祝辞に代えます。



井草のしおり

特別寄稿

あれから十年

杉山文雄

(第二代校長) ……

先達久しぶりに井草高校を訪れて、先ず目についたのは立派な鉄筋校舎であった。実に豪華な校舎である。内部の設備も、図書館といい、視聴覚教室といい、他に余り見られないほど整備されている。ここで、いま勉学を

続ける生徒諸君のことを考えると、誠に心温る思いがした。同時に私は十年の昔、中庭であげた記念式典の頃を思い出さずにはいられなかった。

昭和二十五年は、新学制の実施に伴い井草

でもはじめて男女共学を実施した年で、昭和十六年四月五日に開校してから十年目であった。当世流に数えると少し月数が足らなかったが、あえて記念式典をあげたのは、男子がはじめて井草に入学したのを祝福する意味も多分に含まれていたと思っている。いま武蔵丘高校のある鷺宮の仮校舎に二年近くを過して、昭和十八年二月に今の場所へ移り、ここで十年を迎えたのである。十年近くも経っているのに、創立の年に口火が切られた太平洋戦争で国内のすべては戦争に動員され、また終戦後も戦時中によさる物資の欠乏で建設は進まず、記念すべき十周年の式典さえも、中庭であげる外はなかったのである。ほんと

に、在任中は校舎の不足や設備を整えるのに苦しめられ通してあったといつてよかった。

かように外形的には誠に貧弱に見えた井草高校も、その中味ともいふべき生徒諸君は、女学生として、また高校生として、笑ったり、泣いたり、悩んだりしながらもよく真理の探究にはげんでいた。また敬愛の念を深めて、正しい言葉に耳を傾け、互に協同の生活を楽しく明るくすることに努力しあっていたものである。思うにこれは、初代校長広瀬先生の人となりが大きく働らいていたものであ

ろう。

こうした立派な校風とか、伝統とかいわれるものは長く尊重されなければなるまい。しかし、校風伝統の尊重とは、ただ過去に執着することではなくて、その精神を汲みとり、時代に即応してそれを生かすことである。今や科学の進歩が先行して、精神がそれに追いつけないといわれる時代である。これからの井草はどうあつたらよいか。これは生徒諸君がつくって行くものである。

井草高校の今後の発展を祈ってやまない。

或る一つの断面



高柳 一二

(第三代校長)

その頃の井草は北側に直線の二階建校舎があり、それに平行して平屋建ブラック校舎が南側にあった。両校舎の間はコンクリートの中庭で、生徒の集まる所はいつもこゝだつた。私の新任式もそこで行なわれた。

そして新任式の挨拶にまずその事をいって井草の第一印象をのべ、それから話を進めて行ったように思う。健康で明るかった。この第一印象はいつまでも変らなかつた。

一月余り過ぎた十一月十二日、その日朝は晴れていたが夕刻近くはげしいにわか雨になった。三年生上妻紀子が上井草駅構内で電車にふれ、荻窪病院に入院したが重態というしらせを受けたのはその夜だった。すぐかけつけたがどうすることもできなかった。かすかな望みも空しく翌朝ついになくなってしまった。何とも卑しかった。四十年近い教員生活の中で、こんな悲しみに遇ったことがない。再びこういうことがないようにと、登校途中の踏切に警報機をつけるよう何度も西武電鉄に申し入れたが実現しなかった。

体育館が欲しい、講堂が欲しいという声は赴任早々に聞いた。講堂ができないなら中庭に屋根をつくってと、生徒は訴えて来た。

最初の職員会議で、体育館建設の意志があるかどうかをたゞされた。PTAの役員からもそういう話があった。教育庁の意向は、教室さえまだ手がまわらないのに体育館などともという時だった。都費でできないならPTAの力にたよる他ない。

年が改たまってからこの空氣は急速にもり上って、二十八年六月全日制定時制PTAを中心と同窓会同窓生父兄を結集して体育館兼講堂建設協力が結成され、多湖実輝氏を会長に推し十月五日起工式を挙げた。このまゝ順調に工事が進めば何のこともなかったのだが、請負者小崎組の財政破たんから工事は中断、予定の竣工期の二月になっても屋根も葺けず骨組が雨ざらしになっている有様だった。三年生の卒業式は新しい講堂という希望は全たく断たれてしまった。この時程申しわけなくなさげなく苦しかったことは今迄の私の生涯にたえてなかった。暗然とした日がつゞいた。

工事は始められてはまた止まった。小崎が下請に金を払わないので、材木屋瓦屋高職大工が学校で何とかしてくれと押しかけて来る。それる適当にさばいて帰らせる。小崎組は小崎組で何度も会社名をかえたり人をかえたりして、あの手この手で工事費の先払いや予算の増額を申し入れて来る。こちらはあくまで契約条項の完全実施を求めてわたり合つた。

それでも工事は少しづつ進んで、夏休み前には完成しないながらも一応使い初め式をす

るまでになった。ところが夏休中のある夜小崎組はひそかに人夫を入れて建物を占拠してしまつた。かうして金を先借しようという計画なのだ。止むなく裁判所に申請して建物占有の仮処分を執行するという一幕もあった。残っていたのは塗装工事だけだったので、話し合いの上小崎組と手を切り、残工事は別途に方法を講じ、さしも難行を極めた工事も、一年五ヶ月という長い工期の末三十年三月十日完成を見るに至つた。初めの予算内で、予定通りの建物ができたのがせめてもの慰めだった。こういう困難な情況の下にあつても全

協力会員は終始理解ある協力を惜しまず、役員の方々は我を忘れて事に当られた。殊に副会長佐藤俊雄氏、高橋祐準氏のお骨折は言語に絶するものがあつた。また弁護士笈川義雄氏の適切な助言と指導とはこの事業完遂に絶大な力となつたことも忘れられない。

三十年二月には学校を憤慨させた「平凡事件」があつた。それは雑誌平凡三月号に、鷺宮に住む常安女医が書いたフィクションの中に井草高校という固有名詞を使ったことである。早速嚴重抗議して取り消させ、また朝日新聞の記事にでもらつて事情を明にした。

井草はもと高等女学校であつた關係上、男

女共学になつても男子は女子の半数にも足りなかつた。また毎年男子定員は自校志願者で充たすことができず、他の男子校合格者の中から心ならずも来るものが多かつた。この二つの事から、男子は兎角不適応状態になりがちだった。これが学校生活にいろいろの好ましからざる形で現われて来た。これは何とかしなければならぬ問題だった。体育館もできた。今度は校舎の増改築だ。それには先ず学級増をと考えて申請した。それが認められたのを機会に三十年度の一年生から男女同数募集することにした。そして校舎の増築にも同時に手をうちはじめた。

こうして三年はまたぐ間に過ぎた。かえり見ると「苦しきことのみ多かりき」の感がないでもない。しかしその反面、PTAの好意ある協力援助と教員室の明るい雰囲気はいつも元氣に問題に取り組ませ、そして前向の明るい解決に導く原動力となつた。幸といわねばならぬ。井草の健康で明るい所以である。

今こゝに二十周年を迎えて校運愈々隆昌、校舎も一応整のい、今後の発展期に待つべしである。

創立二十周年に當つて



松 本 勝 太 郎

(PTA会長)

本校の創立20周年記念のよき年にPTAの会長としてその記念号に執筆させて戴くことは私の最もうれしいことであります。が、記念号の都合により、そのスペースに限りがありますので極く簡単に祝辞を述べさせて戴きます。

校長先生のお話によりますと、本校も完全に高等学校となったのは昭和25年でありまして未だ日は浅いのであります。がその前身は府立第18高等女学校として創立されたので、創立以来20年になるわけであります。東京府は都となり、女学校が共学の高等学校となりましてその歴史と伝統との流れは今も絶えぬものであります。この学園を培っておりま

す。即ち過去の女学校の伝統というものは長い年月と幾多先人の苦心の結晶として築いたもので、一朝一夕になったものではありません。

ん。それに引替え、今の新学制は敗戦の混乱と占領下の厳しい状況のうちに生み出されただけ充分な年月も経ていないのであります。無論当局の乏しい財政下に於ける苦心と努力との結果によるのであります。が、この間に於ける職員生徒の団結の力とPTAや卒業生の方々の協力とは、誠に涙ぐましいものがありました。「ローマは一日にして成らず」という言葉の通り、文化国家建設の大理想を目的として、民主的教育を確立することは誠に容易なことではありません。

併し、民主的教育のあり方は、この学校に關係あるすべての人が、各自最善を尽して協力し、真によい学校社会をつくることに奉仕するにあると信じます。本校の生徒は皆既に義務教育を修め、自ら進んで本校を選んで来られた方々でありますから、新しい校風を

つくる土台を、自分の手で固めようになれることは当然であると、期待しております。先輩がなされた如く、皆さんが若さと熱意に燃えてふるい立たれると同時に私共も氣を新たにして出来る丈お力添えをするつもりで居ります。

昔から10年一昔と申しまして、一つの転機を劃するに10年を以てしているようであり従って本校におきましても昭和25年10月17日に創立10周年記念式典を行い、それから10年経った今年に創立20周年記念式典を行うのであります。勿論この二つの転機を潮に各々記念事業を致し、殊に本年は本館を建設したのであります。これが建設には都御当局の絶大なる御厚志は勿論、現校長を始め、前々、前PTA会長並びにこれに關係する先生方やPTA幹部の方々全生徒、全父兄が打って一丸となり一致協力した賜物であると信じます。

本日、このうれしい10周年記念式典を前にして、私は立派な鉄筋コンクリート造三階建をこの武蔵野の一角に仰ぎ、生徒達が誠に健康で毎日々々を楽しみ、勉学に運動に喜々とし、いそしむ姿を見てこれほどうれしいことはありません。私は暇さえあれば本校を訪れて、校長先生と色々と生徒の幸福の爲にな

るようなことを中心議題として話合っており
ます。

最後に、私はPTAの会長として生徒の皆
さんに申上げたいことは、折角出来たこの立
派な図書館を大いに利用されて、日進月歩の
世の中に遅れないよう、自重と自治の精神を

忘れないよう生徒として立派な行動をして戴
きたいことであります。次の吉田元首相の言
葉をよく味って下さい。

Everything is something.

Something is everything.

IGUSA KOKO 10 YEARS

IGUSA KOKO 10 YEARS

KOKO 10 YEARS
私
の
見
た
井
草
高
校
の
十
年
多
湖
実
輝
(前PTA会長)
IGUSA KOKO 10 YEARS
KOKO 10 YEARS

今回ここに井草高等学校創立二十周年記念
式を挙行されるに当り拙文を寄せることは私
のよろこびとするところでです。

私は学校の近くに住んでいますので、まず
学校敷地の事から書いてみましょう。ここは昔
北豊島郡石神井村で俗称観音山といい、前に
ある道路は朝賀大泉方面から荻窪に抜ける要
路に当たっていた所で、土地は高燥開闊、大気
清浄、其上に駅に近く、環境としては最適の
場所です。昭和十七年この畑地の所有者五・
六名から坪十六円で買収されました、私は学

校の設立を喜んだ一人です。

越えて二五年本校が男女共学制の都立井草
高等学校となった時、娘の入学によりPTA
会員として一宮保之会長の下に働かせていた
できました。当時の校舎は二階建の本館とパ
ラック七教室とで、ことに一年生はあのバラ
ックで授業を受けて居りました。同年十月に
は創立十周年の記念式があり式場は両校舎の
間に記念事業として新に作ったコンクリート
の上で執行されました、来賓に来られた前校
長の広瀬先生から十周年を記念するのに末だ

講堂も建っていないのかとの苦言をいただきました。
二十七年十月に私がPTA会長を命
ぜられ、校長も高柳一二先生にかわられた頃
から広瀬先生の苦言がきいたのでせうか体育
館兼講堂建設の話が本格化し翌年には其会長
になり、専心これに従事しましたが、病弱と無
能の為と請負者小崎組の経済的破たんて工事
中止となり散々の目に会いました後任の佐藤
俊雄会長に多大の御迷惑を掛けました。高柳
校長、隈校務主任や諸先生協力会の方々の御
尽力と都の理解ある御助力とで三十年によろ
やく落成しました。体育館が出来たため運動
部の活躍、文化祭等の行事など生徒諸君の利
用も多くなったので建設の価値もあったかと思
います、其後真田現校長の御就任と共に男
女生徒が同数となり校運一層盛大になりました、
今やなつかしいバラックから鉄筋三階建
の新校舎の立派なものになりました。

本校が創立されてから僅かに二十年ですが
我が日本の復興を文運の発達とから校運の発
展とを回想すると実に隔世の感があります、
私が関係したのは後半の十年ほどですが、歴
代の校長職員の諸先生と其の人を得て常に内
容の充実改善に努められ、よき校風は日に張
り月に興り充実した健全な学風を醸成した事

は何よりと存じます、祝福と歓喜とに漲る二十周年記念に際し拙文を稿して祝辞といたします。

ます。

回想十年

佐藤 俊雄

(前PTA会長)



創立二十年を迎えた井草高校は、近代設備と充実した内容を誇る立派な学校になった。

周辺地区の住宅地化、交通機関の発達など、母校を訪れる古い卒業生は、草深い武蔵野の一角だった創立当時を思い浮べて、変りゆく姿に二十年の歳月の移りを痛感することであろう。

戦争のはげしかった頃、勤労動員にかりだされたり、敵機におびえたりしながら勉学を続けた人たち。戦後混乱のさなか、食糧にも事欠きながら「苦しくとも学問だけは」とがんばり抜いた親たち子たち。学校をめぐる思い出はそれからそれへと尽きない。

敗戦の結果を收拾するだいたいな仕事、それもおもて立たないかげの仕事が先生方の双肩にかけられていた。そして十五年たった。

「自己の生命と個性の正しい生かし方」を真剣に探究する青年学徒が、いまこの学校にこのように育っているその背後には、補助者であり助言者である先生方の長いたゆまない努力があったのである。

副都心の新宿と池袋との西方にのびた住宅地を共通の生活環境として、同じこの学校に子女を託した沢山の父母たちは、いつも学校に関する共通の問題で心をつ結びあわせてきた。二十周年を記念して、今回のような大事

業が美事に完成したことは、いざという時に心の結びつきが並々ならぬ強さになる井草PTAの伝統によるものであろう。

PTAの昔語りではあるが、父母の心の結びつきが、特に強く現われて事を成した実例を挙げてみる。十周年の記念事業は中庭の舗装工事、これが当時の精一杯の仕事があった事は、時代のへだたりを語る一つ話となっている。続いての仕事が講堂兼体育館の建設だったが「公立学校の施設は公費で賄うべし」という反対意見が強い。これが正論であるが故に私たちは都への要請を強くかけたのがある。が、都は次第に増加する学童対策のまっ最中で、高校の講堂どころではない。

しかし井草の子供は泥んこの校庭に冬期間の体育を封じられている。結局は正論も引っこみ、父兄の負担またやむなし、と衆議一決して建設に踏み切ったのであった。資金面はともかく、工事に意外な障害が生じたが、全会員の強い結束と不屈の精神力でこの難関を乗り越えて、遂に完成を見たのである。この苦渋にみちた経過がよい踏み石となって、学校施設に対する常時協力制度ができたことは、講堂建設の難産が却ってしあわせをもたらしたものだといつてよい。



終戦前後

石川 悌二

(旧職員)

井草高女の歴史には驚宮の仮校舎時代があるが、私はそれを知らない。私が勤めたのは昭和十九年の一月で、当時の生徒数を三年を最上級生として五六百人、教員も二十人ばかりのささやかなものだ。戦争中のこととて物資不足に束縛されたが、校舎もそんなわけで予定の半ばしか建たなかったようだ。勿論講堂などはなく、寒い朝でも朝礼を校庭で行うほかなかった。雨の日はせまい廊下に集合するので、後の方は顔が見えず、まことに不便であった。

朝礼といえはいつもそのあとで上級生は薙刀を勇ましく振り、下級生は石神井の八幡様まで往復マラソンをしていた。初代校長の広瀬政次氏は七十近い老体であったが、マラソンの先達になってはのめるような勢いで走っ

おられた。その姿が先生亡き今、頑固なまでに誠実を貫かれた人柄といっしよに、そぞろなつかしく想い返されてくる。

昭和十九年、二十年といえは戦争の最も深化な時期であり、学生も学業に専心することができず、防空訓練をうけたり、校庭を耕してイモや南瓜を植えたりしていたが、それでも学校で生活できたのは仕合せであって、まもなく女子生徒にも勤労働員令が下って、三年生以上は軍需工場で働くようになった。井草の学徒隊は田無の中島飛行機と、少しおくられて八木沢の朝日奈工場に入所したが、どちらも男にまじっての重労働の上に、敵機の爆弾は落ちてくる。機銃掃射は繰り返されるで、しかし遂に八月十五日の敗戦の日が訪れて、こわれた工場で天皇の詔勅の放送に涙を流

し、炎天の道をとぼとぼと母校へ引あげてゆくわれわれに、工場から陰置物資を満載して逃げるトラックが濠々たる埃を浴せて行くのをみて、痛憤を感じたものである。

戦争終結となると、広瀬校長は、直ちに授業の再開を宣言した。国民全体が敗戦のショックで虚脱状態にある最中、学生も学問へ還れと叱咤した先生の信念は立派なものである。しかし今にして思うと、戦争中は苦しかったけれど、敗戦後の社会的混乱期はある意味でそれ以上に苦しかった気がする。何しろ私たちは腹がへって困った。ある日職員会議で生徒の弁当箱を調べることになり、自分の受持クラスをこっそり検査してみたら、ひどいのはふかし芋がたった一本という生徒があつて、いじらしさに胸がつかえた記憶がある。とにかく私の知っている井草の生徒はいずれも苦しみの多い女学生々活をした人々で、全く気の毒だと思ふが、半面、苦難を生きぬいてきたことは必ずしも人間としてマインスばかりではなかったと信じる。

井草高女を私が辞めたのは二十一年の暮であるから、顧ると茫々と十余年の歳月が過ぎってしまった。共草高校となり、学校も変わったろうが、あの附近も大分変わったようだ。しか

しまだ静かな田園の風景は残存しており、訪れる私を懐かしませてくれるにちがいない。

私の作品には、あの頃の井草風景を次のように書いてある。

「孤独な気分の夕ぐれ、彼は柵を通す冷え冷えた風の中をあてどなく散歩した。野は蕭条と枯草の色になり、落ちかかる赤い陽が簾のやうな樺の高い梢をそめて、野良に大根を抜く百姓の影が長い尾を曳いてゐる夕ぐれであった。家から南向きに野菜畠の中を抜けて勾配の道をだらだら下りに下ってゆくと、坂の底になった場所に枯れ草の茂った小川が流れてゐた。えび蟹を下げた子供らがたま網を担いて岸辺を帰ってゆくほかには人影がなく、川水は浅いが澄んで、茜色の夕陽の光の下に遠い野づらを光ったりうねったりしてゐた。彼は何となくその岸辺を川下の方へとたどって行ったが、土橋の掛ってゐる淀みのところまでゆくと、跼んで水中を覗きこんでみた。すると思いがけなくもその水底できらりと閃めく魚の影を認めた。夕ぐれの弱い陽差はもう充分に底までは届かなかったけれど、その魚鱗の光はいかにも生々とした鋭さで子供のように彼の胸をときめかせた。敏捷な動きは鯉のやうだがあるいは鮒かも知れない。

ともかく魚たちは一群になって枯れ葦の間や水の淀みを活発に巡り廻った。それは人間を知らぬげな自然で豁達な魚たちの営みだった。彼はあたりが暗くなるまで時間を忘れて眺めてゐた」

「春になった。野づらには麦がもう五六、寸に伸びてゐた。昨日の風を忘れたやうな暖い穏やかな昼下りだった。青い空から統を漉すやに軟らかな光が降り濺いできて、樺若葉の高い梢を明るく浮き立たせてゐた。白い綿雲はふかりと梢の上に浮んで、どこやら雲雀の声がしきりに囀ってゐた。彼は眩しい眼つ

きをしてゆらめく遠い野末を眺めて歩いた。この間までは寒々とうす暗く翳ってゐた野であつたが、木枯の中に丸くなって麦を踏んでゐた農夫も、今日のはどかな陽炎に鉄を閃めかせてゐる。麦の青芽は風雪が幾度かいたぶり、人はその上をしたたか踏んづけてきた。そして麦は踏まれることによつてさらに勁の背丈を伸ばし続けてきた。人のいのちもまたそのやうなものではなからうか。そんなことを何となく想ひながら、彼は明るんでゆく気持を口笛にして吹き鳴らした」

井草今昔



梅木清人

旧職員生物担当
現豊島高校教諭

其の一 「校庭で盛んに蛙が鳴いていたとい

う話」

鉄筋のモダンな校舎も出来て、井草も急速に近代化して来ましたが、その昔、丁度現在

の体育館中央あたりに、農家で使っていたと思われるコンクリートの池が有りました。初夏ともなれば、大蛙、小蛙どもが「ケロケロコロコロ」と可愛い合唱会を開き、運動場に

は、生徒諸嬢の汗で育った小麦が緑の波を打って全くのどかなものでした。今となつては、生物の時間の教室に校庭産の蛙達が登場することもありません。その昔、大哲人が「此の宇宙にあって絶対性を有するものは、唯に物の滅びゆく事のみである」と申しましたとか。井草の蛙といい、近くの三宝寺池の貴重な植物であった「たぬきも」といい、愛すべき生物達が年と共に、私達のまわりから姿を消してゆくのも、止めることの出来ぬ運命とは知り乍ら、発展の喜びの陰にひそむ一抹のさびしさを、しみじみと感ぜさせられるものです。

其の二 「出ると負けるバレエ部があった話」

何と申しましてその頃のバレエ部は、テクニクなどは勿論のこと、ルールさえあやしげな連中が集って、下手の何とやらの諺どおり、たゞもう夢中で賑やかに楽しんだり苦しんだりしていたと云うわけです。

試合に行つて肝心の選手九人が果して会場へ現れるかしらと、時計を見ながら気をもむ始末。戦いぶりも、これといったきめ手もないので専ら防戦一方。力及ばず敗けた時など、試合中に何度も出て来る敵軍のコーチの顔が気に入らないと言つた迷論までとび出す

次第。しかしこのバレエ部が歴代部員のたゆまぬ努力のおかげで、ぐんぐん発展し、遂にはリーグ戦で優勝カップを獲得する母体ともなつたわけですから、この頃の涙ぐましい苦勞も甲斐あつたと申すべきでしょう。男子部も出来て、ます／＼有望なこの部に、大いに声援を送りたいと思います。過日、OGの有志が集り一刻を過しましたが、可愛い坊やの手をひいて出席された人も交えて、思出話がつきませんでした。

其の三 「男子の存在が貴重であつた話」

賢明なる女生徒が大勢いたからというわけでもないでしょうが、演劇部が取組んだのがモリエール作「女学者の群れ」でした。登場人物十二人のうち七人が男役ですが、我が演劇部にはその頃残念ながら男子諸君が少く、全員参加してもなお足りないという有様。あわれ、人がよくつておとなしい先生達が部員諸嬢の御指命をうけて出演せざるを得ない破目とはなりました。演劇の素養に至っては皆無に等しい上に、本番の舞台は大隈講堂と云うんですから、手馴れた教壇の上に立つたようなわけには行きません。たゞたゞ部員諸君の仰せの通りうろ／＼するばかりでした。井草の演劇部では、少くとも頭かずの上からだ

けは我々男子の存在が貴重であつた筈なのに、お芝居の上での男役といったら、奥方をはじめ大勢の女学者達の吐く高遠な学理の毒氣にあてられ、憤懣やるかたない老商人……。やっているうちには「女つていうものは、ズボンと上衣の見さかいがつけばそれで結構だ」とやり返す下女の言葉に拍手したいような不心得な気分にもなろうと云うものです。勿論、三世紀も前にモリエールの諷刺した様な女学者達が井草に居たわけでは有りませんが、恐らく今もそうであろうと想像しておりますが、いかがですか。

其の四 「円遊会につかれ出た七匹の狸の話」

十周年記念の円遊会の写真をお持ちの方々の中には、或いはこの、おなかにぼろをつめ、竹籠で作つた張子のお面を被り、草帯の尻尾を生やした狸どもの珍妙な踊りを写したのが見当る方もあるかもしれません。この狸、本当は七人の先生方なのですが、平生から誠にもって変幻自在、各教科の指導は勿論のこと、或いは運動競技の選手となり、或いは学芸会の迷優歌手となり、或いは作家、或いは機械技師電気工夫、全く数えるときりがありません。

この若い先生方が、生徒諸君と共に良く学

び、良く遊ぼうというので智慧を絞った催し
がこの仮装となったわけです。その昔、茶目
気一杯であった方々を含めて、今、二十周年
を迎える井草には、或いは老練、或いは新

進、実に活動的な先生方に恵まれています。
更に心身の健康という面からも都内としては
地の利を得ていると申すべきでしょう。どう
ぞ之等諸先生の御指導を充分に生かして、学

業に、クラブ活動に、若さあふれる学生生活
を送られて、新しい歴史を作り上げて下さ
い。



井草高 沿革史

二十年の歩み

大野英雄 記

本校は、昭和十六年一月二十七日、「東京
府立等十八高等女学校」として設立が認可さ
れ、二月四日、初代校長として広瀬政次先生
が補せられたことを以て生誕とする。五年
制、定員一二五〇名の高等女学校で、即日、
仮事務所を東京府立高等家政学校内に設けて
開校準備の事務がとられた。教頭に松山文雄
先生、教諭兼書記に田中正先生が内定し設立
事務万端が準備され、執行された。三月十
八日、中野区鷺宮五丁目五八三番地の仮校舎
に移転。校地二六〇〇坪の中に七教室、二七
九・九坪の校舎が暫定的に当てられたわけ
である。当時、同地域には二十中（後の大泉高
校）、二十一中（後の武蔵丘高校）と五商が
同居し、後の発展が約束された。かくて、四

月五日、いよいよ教職員校長以下九名が着任
し、第一学年生徒二五二名が入学許可されて
開校のはこびに至った。思えば当時わが国は
満洲事変、支那事変、三国防共協定の成立
と、アジアにおける全体主義陣営の一翼とし
ての国家行動を強化し、昭和十二年は国家総
動員法が発令、以後、国民の政治的自由な発
言は極度に制限されつつあった時代である。
教育は政治目的の具に供せられつつあつ
た。開校事務の進捗も幾多の障害につき当り
ながら、五月には十四軒行軍が、「修練」の
名のもとに実施されたのも時の流れである。
「今夏教職員及び生徒児童の旅行抑制に関す
る件」の通牒のもとに、夏季行事一切が中止
され、女生徒の夢も葬られてしまった。九月

には学校報国隊が結成され、戦時即応の体制
が学校にも、もち込まれてきたが、放課後と
もなると、校長以下十名たらずの先生と、可
愛いオカッパ姿の一年生が、バレーに、バス
ケットに嬉々として遊樂し、ともすると引込
思案になりがちな新設校生徒の心情を明る
く、のびやかに引上げる為の配慮がなされて
いる点は、創設教師のこまかな気づかいであ
る。
十月一日、現校舎のある、上石神井一丁目
四十番地に校地、「六九八九坪」が決定、十二
月には地鎮祭が執行された。しかし、戦運い
やましに急で、わが国は十二月八日、大東亜
戦争を開始した。校務日誌の一節に「零時半
のニュースによれば、米英に対しての宣戦布

告及び政府声明発表ありたるにつき、直ちに
全生徒を校庭に集め、政府声明の繰返し発表
を聞かせたる後、校長より時局処置の訓話あ
り」とある。以後五ヶ年、わが国の教育は、
全く戦争のために、本来的目的を破壊されて
しまった。

昭和十七年

一月三十一日 校名を東京府立井草高等女
学校と改称

三月十日

新入生二五七名入学内定

四月十八日

日誌「米機本土初空襲、本
校上空に飛来。依って遅組
(一年)は授業中止、帰宅」
と。

五月二十三日

「新校地に甘藷の挿植及び
陸稻播種のための整地開
始」

六月十六日

生徒用机、七十脚搬入、六
組編成の準備完了

七月二十五日

新校舎上棟式

十月二十七日

新校地農園で全員芋掘作業

昭和十八年

一月二十日

本校舎総坪数二二八三坪三
二五の中、第一期工事とし
て六三一坪四四七竣工。

二月二日

練馬区上石神井一丁目四十
番地の本校舎に移転。

こゝに、いよいよ待望の仮校舎と別れて本校
舎での授業が開始されたわけである。当時、
漸く交通輸送の、事情困難から、一年の女生
徒が机は二人で、椅子やそれぞれの校具、用
具の一切を仮校舎の驚宮から徒歩で運搬した
ことは、語り草であると共に容易ならざる引
越作業であった。かくて二ヶ月後の四月二日
には、新入生二五三名が入学し、一二三学
年が顔を揃えるに至って、校庭も賑々しくな
った。七月一日には都制実施に伴い、校名を
「都立井草高等女学校」と改称した。

元来、井草という名称地区は、練馬区ではな
くて、杉並区である。従って十八高女から、
地域名を校名にという都の指示により、原案
は「石神井高等女学校」であったが、校内の
何人かの教師から、女子の学校なのに、「シ
ャクジイ」の「ジイ」は相応しくないとの縁
起ばなしや、「石神井」のよびなが、一般的
に困難を感じるなどの諸事情から、練馬区内
であるにかかわらず、あえて「井草」の名を
校名としたことである。尤も現在の石
神井高校、当時の石神井中学校と混同し、ま
ぎらわしさを回避する気持も十分あったので

ある。

歳あらたまって十九年の正月を迎える頃か
ら戦況の不利は国民生活の全分野に及んで、
生活することの苦しみ、その日その日に、
刻感を増した。鈴木貞三教諭に本校最初の徴
用令書が到来し、引つづいて何人かの応召者
が先生の中にみえはじめた。四月には二四七
名の入学者が許可されて、四箇学年が顔を揃
えたのも束の間、四月十四日には「学徒勤労
動員の件」につき学校長が召集され、六月一
日には四年生、九十五名は保谷の朝比鉄工所
へ、同じく、一〇五名は田無の中島航空金属
製作所へ動員。一ヶ月を置いて三年生も夫
々、一一三名が中島へ、一一一名が朝比奈へ
後を追って動員に服し、正常な教育形態は崩
壊した。会社、工場での入所式に際し、故広
瀬校長が、社長はじめ、なみいる幹部諸氏の
前で、「みなさんが、学業を一時抛棄して、
工場で兵器製造に動員され、額に汗するのは、
国家の危急を救う為である。決して資本
家の利益を助長するものではない。云々」と
熱涙込めた訓話は生徒一同に、腹の底からこ
みあげる感銘を興えと共に、先生の教育愛
に一徹な姿が今に髪髻として、面目躍如たる
ものがあつた。

二十周年を迎え、改めてここに、先生の御冥福を祈念する次第である。

教職員も創立当初十名足らずのさくやかな数から、生徒数の増加に伴い、昭和十九年末には校長以下三十名を数え、一応の体制は整った。とはいえ全校生徒の半数が動員され、その監督指導に、常時短期長期の教員が約半数不在で、学校そのものの空白感は覆うべくもなかった。しかし週一回動員生徒の出校日ともなると、生徒増に伴う校舎の狭あい、教室の不足が正常運営を阻害した。十二月十五日、「学級編成の方針」に関する都への報告は、日誌に「本校は昭和十六年の創立にして、校舍建築は時局柄進捗せず、教室不足のため、今年度は各学年五学級のところ、三学級に編成し三四年は、その内二学級をして外国語を履修せしめ、他の一学級をして家庭科被服を選択履修せしむ」とある。教室数の不足が痛感されてきたわけである。

昭和二十年。波らんに満ちた歳であるが、二月四日の創立記念日を期して、かねて依頼中の校歌ができあがったので校歌制定式を挙行し、全校教職員生徒、土岐善麿、作詩、山田耕作、作曲の校歌がよろこびの裡に斉唱されたことは感激また一入であった。四年制と

はいえ、第一回卒業式が三月二十八日あげられ、螢の光とともに校歌に送り出されたことは云うまでもない。あらゆる意味で記念すべき第一回の卒業生であった。

新学期を迎え、一九二名の入学生徒を迎える反面、在校生の転学者があとをつぎ、空襲規模も日増しに大きく、戦運、底をつく感、深刻の度を増した。四月十四、日誌「昨夜B29一七〇機空襲のため山手線、西武線、中央線、武蔵野線その他の交通機関、事故多く不通。生徒の登校少く、罹災者も相当ある見込。臨時休校とす。学校長も登校されず」と悲痛に記されている。かくて八月十五日の敗戦の日を迎え、国家の変革は、井草高女を大きく変転させるに至った。

われわれは「井草二十年の歩み」をふりかえってみた時、思えば、昭和十六年の開校以来、昭和二十年の五ヶ年間は、いわゆる「創業期井草」、「戦争に打ちひしがれた井草」、破壊と窮乏と、教育の崩壊の中に、からくもあえていた井草の窮状を偲ばないではない。学校づくりという問題に迫られながら、戦争の故に理想は次々と消滅し、教師も生徒も学校も聖戦の名のもとに極度に歪められた姿で変貌していたのであった。

戦後 それから十五年

敗戦の翌年、昭和二十一年から本年二十周年を迎える間の十五年の井草高校の歩みは、戦後の十ヶ年と、昭和三十年からの五ヶ年の二期に分けてその発展をあとづけられよう。いまその十五ヶ年の動向を一括して年表的に点描すると。

昭和、二二、三、三〇、杉山文雄先生学校長に補せらる。

二二、三、二五、七教室増築（二二・三・七坪）

二二、四、一、六三制実施に伴い、二三学年は新制中学となる。

二三、三、三一、都立井草新制高等学校となる。

二四、三、二一、全日制、定日設置

高等学校第一回卒業式が挙

行された。高等女学校第五

回、併設中学校二回目の卒業式も同時に行われたの

で、高等女学校併設中学はここに消滅。

二四、八、二六、PTA組織成立。

二五、一、二八、校名を東京都立井草高等学校と改称。

二五、四、一、生徒会組織成立。

二五、四、一、男女学共入学式。

二五、一〇、一七、創立十周年記念式典挙

行。杉山校長は都立忍岡高校校長に転補、都立城北高校校長高柳一二先生校長に補せらる。

二九、二、一八、坪

三〇、一〇、一、多摩先生退職のあと、都立

高柳先生退職のあと、都立多摩高校長、真田幸男先生

三一、七、二五、西校舎竣工（一六八坪）
 三三、四、二、南校舎竣工（二一六坪）
 三五、五、二二、本館、図書館を含む校舎
 五〇〇竣工

概要右の通りである。敗戦を契機に米軍が進駐、その占領政策によって、従来の国民教育も新しい民主教育に転換した。二十年も末の暮、職員一同が何度も会合し協議の結果、学校長と学校経営や運営のあり方の改革を陳情し、交渉し、時には険しい空気が流れたことも一再ではなかった。その結果、とかく伝達や報告にながれ勝ちな職員会議が民主化され、職員の発言が活潑となって職場の明朗化促進の契機を打出した。翌二十一年三月には広瀬初代校長は、考齢のため退職され、創立以来教頭職であった杉山文雄先生が校長として迎えられた。万事に慎重で、几帳面な先生在任中の七年は、六三制実施に伴う諸問題の解決と、戦後の経済苦境に悩まされた時代である。戦後物資の不足は国民生活をどん底につき落したが、反面学校を通じての配給事務も当時にすれば嬉しい忙しさで、ノートや布靴、石鹼はもとより、三五〇俵のタドンが配給されるという状態であった。戦災による物資の欠乏、食糧難は人心を極度に荒廃させたが、人々の流動も漸く元にもどり疎開地から

学 年	合 計	%	1	2	3	4	5
転 入 学 者 数	280	34	4	86	82	81	27
内 職 員							
疎開復帰者数	147	18	0	26	50	48	23
純転入学者数	133	16	4	60	32	33	4
海外引揚者数	0		4	1	0	1	0
戦 災 者 数	191	23	64	43	27	43	14
在 籍	828		242	196	159	162	69

生徒入学者調（昭和二十一年度）

改称され、現在の練馬区立中村中学の一年生が暫定的に寄留するという変形もとられた。

また本館校舎の敷地には、後にボロ校舎の悪名を負ったとはいえ、当時の悪条件下でPTAや杉山校長の絶大な努力、働きかけによって、とにかく七教室二三六・七坪の平屋建校舎を増築した。スレート屋根、テックスの壁とはいえ当時としては誠に容易なことではなかったのである。翌二十三年には「都立井草新

の復帰、生徒の数も上図の通り、顕著なものがあった。

昭和二十二年。わが国教育史上画期的な教育基本法および学校教育法の施行に伴い、六三制が実施された。在学の二三年生は併設の新制中学と

制高校」と改称。従って昭和二十四年三月の卒業式には学制改革に伴う過渡期の様相をそのまゝに、卒業証書は高等学校第一回、高等女学校第五回、同校併設中学校第二回卒業という三種別の証書授与式が挙行された。かくて昭和二十四年度からは旧制および併設中学という過渡的体制が断絶した時期を画したことから、学校内部の組織改革が著手され、該年度内に、保護者会はPTAに、生徒自治会は生徒会に、校友会は新しい同窓会に脱皮すると共に、職員組織も職員会を中心に、教育部、指導部、図書部、保健部および厚生部の五部制となり、学校運営が新しい時代に適応するように組織された。外見はとにかくとして杉山校長在任中の七ヶ年というのは内部組織の改組、運営の改善に学校全体の努力が集中された時代といって過言ではなからう。

その結果が一応開花したのとして、翌昭和二十五年本校創立以来十周年を記念して祝賀の式が十月に挙行され、波らんに満ちた過去十年を反省し、今後の発展に期する時を得たことは感懐深いものであった。この年の十一月、朝日新聞主催の合唱コンクールに石神井高校と合同で参加した結果、全国第一位と

なり優勝の栄冠を獲得したり、大隈講堂における石神井高校との演劇部の合同出演（昭和二十二年）で見事ラブシーンの一コマを明朗にやってのけ、「サン紙」上に驚異の眼で取材されたのも、生徒の多彩なクラブ活動における自由な表現のあらわれでもあった。また少し前後するが昭和二十五年一月二十八日もって、今日の「東京都立井草高等学校」と改称し、いよいよ画期的な男女共学が四月から実施された。四月十一日の入学式に女子一四九名と共に、男子九四名が顔を揃えた時の光景は、誠に感慨深いものがあつた。高等女学校として設立された当初誰がこの六三制、男女共学の姿を予想したことであらうか。女学生むきの校歌もこの年の男子入学を機会に、作詩は、土岐先生に改訂していただし、作曲は改めて芥川也寸志氏に依頼して、「世界の前にわれらあり、井草高校」と荘大なスケールの格調にふさわしい曲に変更したのも昭和二十五年十月であつたことを附記しておかう。

昭和二十七年十月一日。創立以来の杉山校長は都立忍岡高校に栄転されたあと、都立城北高校から温厚な高柳一二先生を、第三代校長として迎えた。

生物学専の先攻生にもかかわらず、文学趣味豊かな先生の著任は、ユニークな存在でもあつた。朝礼時の話は、一口にいえば味のあつた話、その都度開陳されて、生徒の耳をそばたせたことが、しばしばであつた。しかしこの当時、本校職員生徒がその必要を最も痛感したのは講堂がほしいということであつた。体育館兼講堂でもよかつた。雨天の際の体育授業の処理はもとより、生徒のクラブ活動が高まれば高まるほど、音楽や演劇に、文化祭に、はては各学期学年末の挙式にその場所がないことは致命的な支障をもたらした。ちなみに本校の文化祭は二十三年の都立豊島高校の講堂借用以来、明治大学、早稲田大学、育英工業（ドン・ボスコ）と転々と他校の講堂を拝借しながら、成果をあげつつも不自由な思い、不経済とも思える経済的支出に悩まされ続けていた。このような痛切な要望に応じて体育館兼講堂建設の実現に努力されたのが、高柳校長の時代、三年間の井草の側面である。講堂建設に伴う御苦慮のほどは、特別寄稿を拝受した高柳先生の玉稿にその一端を伺い知ることができる。先生の御寄稿「断面」の御所感によつても分るとおり、昭和二十七年から三十年までの三ケ年は、強いて云

えば、井草高校受難の時期ともいえるようか。校長赴任早々に、上井草駅東側の踏切に於ける、三年女生徒上妻さんの事故死は学校全体を憂鬱な空気で覆いつくした。

雑誌平凡所載の一仮空小説の中に、井草高校の名が登場し、現任教師の名まで借用された上、好ましくらぬテーマの展開は、職員生徒の憤激を買い、新聞種にまで取沙汰された。

それにもまして昭和二十九年年度に学校全体が直面した問題は体育館兼講堂の建築を引請けた小崎組の背信行為にもとづく建築進行の停滞であつた。前二十八年十月に起工式が挙行され、やれやれこれで今迄の肩身の狭い思いもせずにすむ、文化祭も卒業式も他の学校なみに自校の校舎でできる等々、明るい希望とよろこびに一切を托して生徒も職員も心を一つにしたものであつた。しかし二十八年の暮あたりから小崎組は下請業者への支払不履行から工事の停滞が目立ちはじめ、遂に二十九年卒業式はあれほど待望の講堂における挙式が実現しなかつたことは残念であると共にと卒業生諸君には気の毒の至りであつた。従つて昭和二十九年年度の前半は、契約履行を迫る学校、何とかして学校から融資を契約以上を受けようとする小崎組、はては学校に小崎

組の債務一部負担を迫る砂利業者や材木業者等々外部との交渉に寧日なく、校長室からは、これが学校という教育の場における会話であるうかと思われるほどの高声、罵声がもれてくるのが再三あったのである。建設協力会主催の父兄職員との会合は何回となく度を重ね、帰途のバスがなくなるまで談合協議に時を費やさざるを得なかった。しかも八月には小崎組は留置権行使を強行して会社の若者三人が一隅に泊り込む。学校はこれが退去を迫るという小ぜりあいの醜態も演ぜられた。果して講堂は建つのだろうか。このまゝ立腐れになるのではなからうかとまでの不安さえ立ちはじめた。

昭和三十年三月十日、難行に難行を重ねた建築作業も、幾多の困難をきりぬけて遂に竣工。この月卒業式が高柳校長を中心に挙行されたことは不幸中の幸でもあった。さらにこの年、十月一日、幾多の思い出を残されつつ去られた高柳先生のおとに、多摩高校から、現校長真田幸男先生が赴任された。

昭和三十年度から男女同数共学に形式上でも踏みきったことは学校内部の問題としても、また対外的にも極めて重大な意義をはらんでいたのである。施設面の不備、職員構成

上の難点、男子応募数の欠如等の諸問題を内包しつつも、女子系学校の本校が同数共学こそ男生徒の、ともすればいさ勝ちな劣等感を払拭し、正常な高校教育の成長を期待し得るものと確信して、他校に率先して英断を下した所以である。

気鋭、意欲的な現校長真田先生着任以来の五ヶ年間は、成長期途上にある井草の感、極めて深い。戦後十年の実績をふまえて、この五ヶ年間の施設面の充実は誠に題者なものがある。学級増に伴う校舎の改増築は、まず、西校舎一六八坪が三十一年七月竣工、ついで昭和三十三年四月には南校舎二一六坪が竣工。

いよいよ現在の本館鉄筋コンクリート三階建ての校舎建設の着手は三十二年七月から開始された。PTA会長河西教平、校長真田幸男名儀のもとに請願書「本校の南校舎は昭和二十二年建築の仮校舎ですでに十年を経過して天井は腐り、床板は波うち内外の壁板は破損して危険かつ非衛生極まる状態にあります。――(中略)――一日もはやく老朽南校舎を取り壊して運動場面積を拡げるとともに、校門をくぐった正面見つきの位置に玄関、管理室、衛生室等を含む鉄筋校舎を新築して頂くことが、私ども子弟を託する者の一致した念願で

あります――(後略)――」の趣旨が都教育庁をはじめ、各方面にはたらきかけられた。この構想にPTA負担の図書館が三階にのせられた校舎が、ほゞ学校例の想定通り、或はそれ以上の豪華さを以て竣工したのは三十五年の五月二十二日であった。武蔵野の一角に、富士を仰ぎつつ、左に鉄筋校舎、右には塗装された木造校舎、昔日の様相を一変して整備されたグランド。今や井草高校の学校環境は本年を以て一応の宿願を達した。今後の井草は、二年生のある学級文集に『……君が現実の周囲を見回して自分の存在に悲観し、矛盾だらけの現実を身をさいなまれて、自分の将来に望みを失っている気持は僕にも判らないことはない。しかし君はそんな方面へ目を向けるよりもっと大切な方面へ目を向けるのを忘れてはいないか。……本来の自分に戻ってくれ、じっくりと考えてくれ！……悩んだあげく自己の全存在を疑はないで生き抜いた人、たとえ平凡であっても僕は尊敬する。……我々はゴミの中の光らない宝石でいいのだ』とあるような、友愛の精神にみなぎり、社会の矛盾の中にギリギリの線で生き抜かうとする生徒の創造力に井草今後の成長を期待して止まない。

定時制課程の沿革

堀部先生記

昭和23年3月31日

東京都立新制高等学校に定時制課程設置せらる。学校長杉山文雄

昭和23年3月31日

広木富之介定時制課程主事を命ぜらる。

昭和23年3月31日

脊戸川与作、中野たゑ子、平野一郎、専任教諭を命ぜられ赴任す。

直ちに開校準備にかゝり生徒募集に着手す。

昭和23年5月31日

開校式並に入學式挙行。

昭和23年6月1日

取毀された旧校舍にて授業を開始。

教室二教室。職員室は中央横廊下(二坪)を改造使用。兼任講師五名委嘱す。

当初生徒数二十名なり。

昭和24年8月31日

教諭脊戸川与作都立雪ヶ谷高等学校へ転任。後任として都立上野高等学校教諭堀部光夫赴任す。

昭和25年5月20日

教諭平野一郎退職、後任として薬科豊、赴任す。

昭和26年1月1日

教諭薬科豊退職、後任伊藤茂雄赴任す。

昭和26年3月18日

第一回卒業式挙行、卒業生八名。

昭和27年3月18日

第二回卒業式挙行、卒業生十一名。

昭和27年4月1日

鮎沢真澄教諭に任命赴任す。

昭和27年7月31日

主事広木富之介退職、本校教諭三橋礼郎定時制課程主事を命ぜらる。

昭和27年8月1日

学校長杉山文雄東京都立忍岡高等学校長に転補

昭和27年10月1日

東京都立城北高等学校校長高柳一二学校長に補せらる。

昭和28年2月28日

教諭中野たゑ子退職、後任として西本房子赴任、

昭和28年3月18日

第三回卒業式挙行、卒業生十九名

昭和92年3月81日

第四回卒業式挙行、卒業生十三名。

昭和29年5月1日

小山驥教諭を命ぜらる。

昭和29年5月15日

職員室竣工、専任教諭七名。教諭西本房子荻窪高等学校に転任、後任として西尾寿美赴任

昭和30年3月10日

体育館兼講堂竣工、建坪一七四坪、二階九坪、計一八三坪

昭和30年3月18日

第五回卒業式挙行、卒業生三十四名

昭和30年9月30日

学校長高柳一二退職

昭和35年10月1日

東京都立多摩高等学校校長真田幸男学校長に補せられる。

昭和31年6月16日

教諭小山驥都立武蔵高等学校へ転任、後任として深沢栄陸赴任す。

昭和31年3月25日

増築校舎(特別教室四教室)竣工

昭和32年3月7日

第七回卒業式挙行、卒業生四十七名

昭和32年4月1日

教諭鮎沢真澄都立九段高等学校へ転任、後任として教諭山本芳夫都立多摩高等学校より赴任す。

昭和32年5月9日

主事三橋秀郎都立板橋高等学校へ転任し都立武蔵丘高等学校教諭福田薫本校定時制課程主事を命ぜらる。

昭和33年3月18日

第八回卒業式挙行、卒業生五十名

昭和34年4月8日

第九回卒業式挙行、卒業生四十三名。

昭和34年4月8日

南校舎一部竣工、教室移転。

昭和35年3月18日

第十回卒業式挙行、卒業生四十九名。

昭和35年3月31日

教工深沢栄陸全日制へ後任として全日制教諭大浦先生赴任

昭和35年6月20日

鉄筋三階建新校舎竣工、職員室、教室等移転す。

定時制課程会PTA会長高橋祐準氏は本年八月二十九日高血圧で急逝行年五十七才。

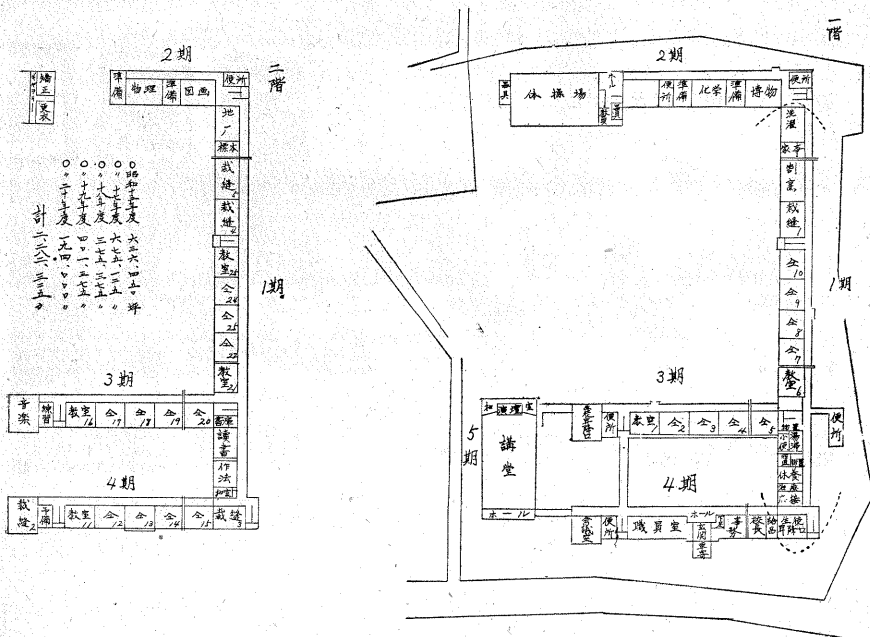
同氏は初代会長として活躍し、また本校協力会委員として施設設備の拡充のため尽力されまし

た。昨年昭和三十四年度より再度の御就任で、

その篤実な御風格は職員生徒の敬愛のまゝとでし

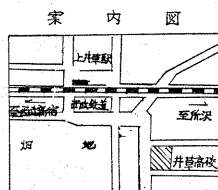
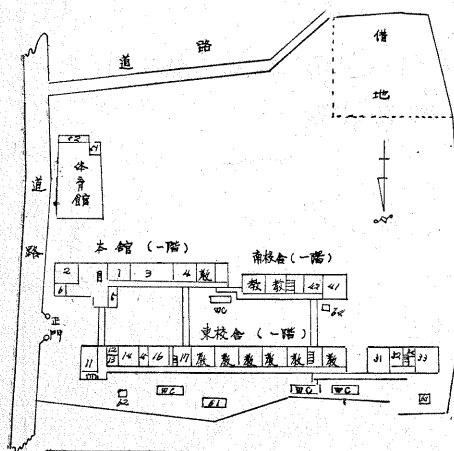
た。謹んで哀悼の意を表します。

東京府立第八高等学校女子校建築図



東京府立井草高等学校々舎配置図

1:600



本館 (三階)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

南校舎 (二階)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

本館 (二階)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

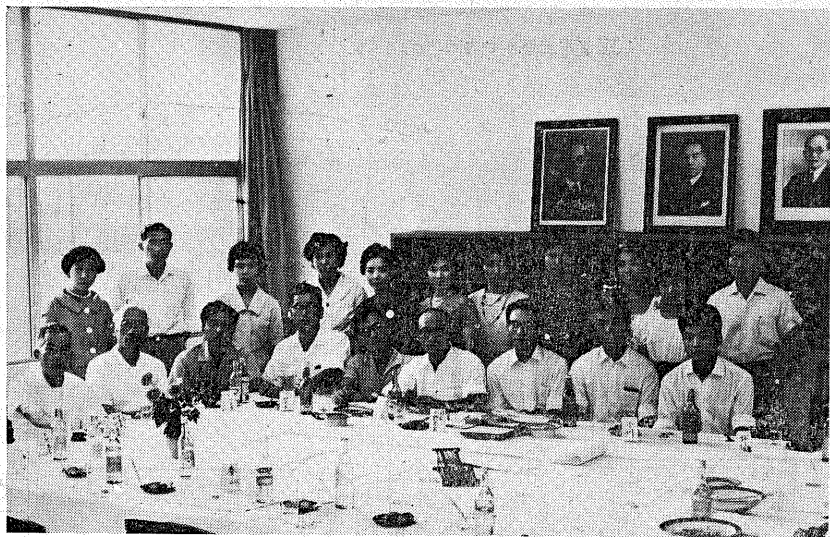
北校舎 (二階)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

東校舎 (二階)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

1 校長室	6 玄 関	12 生徒会室	17 昇降口	21 化学教室	26 生物準備室	44 美術準備室	68 薬品室
2 事務室	7 視聴覚室	13 虎 居	18 音楽教室	22 国語準備室	27 被服教室	51 体育準備室	64 定時制生徒会室
3 図書室(2階)	8 図書室	14 保健室	19 国語準備室	23 物理教室	31 物理教室	52 更衣室	
4 同上(1階)	9 管理室	15 音楽室	20 物理準備室	32 国語準備室	42 国語準備室	61 物 置	
5 物理教室	11 昇降口	16 湯 浴 室	21 社会科学準備室	33 生物教室	43 美術教室	62 大 講 堂	



写真は 前列左から杉山先生・真田先生・青山先生・生野先生・鈴木先生・大野先生・小川恒義君・坪田新太郎君
小山内依史君・後列左から 戸村先生・山本先生・藤沢美代子さん・田中(藤井)和子さん・杉浦(千葉)千重子さん
伊藤和枝さん・土手(辰野)千恵子さん・春山(酒井)容子さん・児玉和子さん・山口順子さん・毛利先生

特

集

懐旧座談会

—— 卒業生・旧職員の語る井草 20 年の歩み ——

司会 大野英雄先生

学校側

杉山文雄前校長

青山兵吉先生

真田幸男校長

鈴木貞三先生

生野真直先生

戸村静子先生

卒業生

田中(藤井)和子 (旧姓藤井・高女一回・石神井西中勤務)

藤沢美代子 (高女二回・家庭)

土手千恵子 (旧姓辰野・高女二回・主婦)

春山容子 (旧姓酒井・高女二回・主婦)

伊藤和枝 (高校二回・武州商事勤務)

杉浦千恵子 (旧姓千葉・高校四回・主婦)

児玉和子 (高校四回・産経新聞勤務)

坪田新太郎 (高校六回・江東区第四大島小勤務)

小川恒義 (高校八回・一橋大)

小山内依史 (高校十回・慶応大)

編集 毛利先生

速記 山口順子
(高校12回)

司会 今日はお暑いところ、またお忙しい、ところをお集り頂きましてありがとうございます。ご承知のように今年井草も漸く二十周年を迎えましたので、この座談会を催しまして過去をふりかえり更には井草発展のよすがにしたいと思っています。

では早速本題に入りまして、井草のペー

ジを開かれたのは初代広瀬校長でありますので、先生のおもかげを卒業生の諸君にうかがいたいと思いますが、——杉山先生からどうでしょうか、当時の広瀬先生の手記をみますと、〃生徒を余り叱ってはいけな

い〃というよう

なことが書いてあるんです

初代広瀬校長の面目

杉山 非常に自分の娘みたいに考えていらっしやって、皆いゝところに入ってきた、可愛がってやるぞという誠心が滲んでいるんですね。一口に言いますと実に真面目で勤勉な人であったと思いますね。

鈴木 朝なんか途中で会いますと、振り返っても時間が充分ないときは話もされないんですよ、何しろマラソンの選手でしたからね、後からついて行くのが大変ですね。(笑)

(声)

青山 こういう風に体を前に倒してね、サツ

サツと歩くんだ。(笑声)

司会 登校の折一諸になっても遅れるということが全然なかったな、生徒のためを思う気持が強く頭の中にあつたためだろうと思います。

青山 帰りの時にも私はよく一諸になったが帰りはそれ程でもなかったね。大野先生のお話にもありましたが、先生に対しては生徒のためを思うという立場から、かなりきつかったと思いますが、生徒にはそれほどでもなかったようだよ。

藤沢 私、ちっとも恐いとは思いませんでした。

杉山 ただ、先生のお話なさる内容が少し難しいような言葉を使われたから生徒諸君には少し解りかねるところがあつたように思われましたが。

春山 ええ、でもそれほどありませんでした。お授業はちよつと面白かつたですね。

杉山 授業はそこにはないからよく知らないが朝礼の時なんかには少し言葉が荒い時がありましたね。

春山 ええ、そうでした。

杉山 でも、随分面白い授業だったらしいね、廊下などを通ると生徒がよく笑って

ましたね、三人とも一諸だったかね。(卒業生に)

藤沢 いゝえ、私は二年から転校してき

た。

春山 私は杉山先生でした。

生野 何でしたか課目は。

春山 修身を教えていただきました。

杉山 ああそうでしたか。(杉山先生苦笑)

司会 杉山先生のお話で思い出したんでけれども、広瀬先生は重いカバンを下げて前こごみになって、とっとと歩いて来るんですよ。

鈴木 わき目もふらずにね、なにしろおつか

なかつたからね。

杉山 五十九で校長になられたんだからあなた方(藤沢、春山さんに)が入られた時には六十才でしたよ。(一同感嘆)

真田 もっとも、五十九才といっても昔の五十九ですから五十七才と何ヶ月ですよね。

藤沢 私たちが朝比奈に動員になりましたね、あの時の入所式で広瀬先生が素晴らしい御挨拶をなすつたのでよく覚えてるんですよ。先生が生徒の前で「あなた方は資本

家のために働く人でなく国家のために働くのですからと会社の幹部の前ではっきりそうおっしゃったんです。

司会 僕はよく朝、向う（道路をさして）を通るんですよ、すると前に広瀬先生が歩いていて、振り返ると「教師のくせに遅れるとは何ごとだ」と言っているとと驅けて行くんですよ（一同爆笑）

仮校舎驚の宮のころ

司会 最初、驚の宮の校舎に同居した時代が一年ちょっとあったと思いますが、（学校年表を見ながら）あの頃の事を顧みますと、校舎が二百七十九坪、（杉山先生に）あれは先生、教室は何教室でしたか。

杉山 六教室ではなかったですか、校長室兼職員室、もう一つ南側に室がありましたね。

青山 三教室、いや六教室だったんじゃないかな。

杉山 職員室も事務室も一諸にして七つくらいでした。学級は五十六クラスでしたな。

司会 職員は九名でいいんですか。

杉山 一番最初は青山君、九名だったね。

司会 青山先生、驚宮の校舎の頃をご存知だ

と思いますが一つ。

青山 あれは、入学式をしたのが二月でしたか、三月にはまだわつさわつさ建てていましたよ。

司会 三月二十二日に出来たんですね。校舎が二階で一切合財の式をあげると書いてあります。

鈴木 井草だけではないんでしょう。あれは高等学校の創設五ヶ年計画で、あそこに生徒がまあ何年か入るようになっておいて、次々に新しい学校を建てて移るという方針で一時的収容所になっていたらしいですね。

杉山 それがまあ計画通りに行かなかったんです。けれども二十中と二十一中と五商とわれわれの所とおりましたね。われわれの所が南側でその次が五商、北側に二十一中その西側に二十中（大泉）と二十一中（武蔵ヶ丘）この四つが一諸でした。ちょっと離れておりましたが同じ型のものが四つ建てていたわけです。グランドは全部一つのを使うのでなくてそれぞれが使えるようになっていました。

青山 建物があって運動場があって、また建物があって運動場があってという風にグラウンドもそれぞれ四ツありました。井草にす

ればささやかな学校だったんですね。あつという間に建ってしまったて二回生の入った時には生徒数が五十人位いたんですね。

鈴木 いつだったか、七十人位押し込んだことがあったね。

司会 藤井さん、驚宮時代のお話などありませんか。

藤井 あの頃、一年生しかおりませんでしたけれども、他の学校とバレーボールの試合をやりましたね、大奮戦をして皆の同情を集めたことがあります。人数が少なくてね。

杉山 青山君にも今ちょっと聞きましたけれども、銀杏の木は向うでも教室の所に植つていたね、あれはあのまま残して来たんだったかね

青山 ええ、こっちでもまた植えましたね。

教室の前に植えていた時に南北にあったですね。事務室、職員室の前、グラウンドに面して一本ありましたが、この前行ってみたらかんな（両手を広げて）太い木になっていましたよ。校舎の取り壊したあと、大部淋しくなっておりましたが、銀杏だけバカに太いので奇妙な感じがしましたよ。

司会 十六年の七月の通牒によりますと、夏季行事は一切できなかったとなつています

ね。(戦争の切迫による)

生野 でも、山に行きましたね、夏。

青山 あれは、八ヶ岳のの麓の牧場でしよう。

生野 それはもっと後だった。野辺山だったかな、しかし蓼科には行っただね。

鈴木 十八年には方々に行っただんじやないですか。

青山 十六・七年は記憶ないな。

ようやくのお引越

司会 昭和十六年は十二月八日、ああいう戦争になるわけですが、“今晚六時、英米兩國と交戦状態になりたる故——”(教務日誌)。これはやはり生徒を前に集めておいてなすったわけでしょうね。

杉山 十六年ですからね、相当激烈な訓辞をしたんでしょね。しかし、覚えていませんが。

藤井 なかなか広瀬先生は軍国主義の権化とまではいかないけれど相当でしたね。

杉山 ゲートルを巻いていらっしやったね。

藤井 朝礼の時なんか、立っていて貧血を起した生徒を集めて、緊張が足りないというようによくやられたことがありました。

幸い私は貧血は起きませんでした(笑い)

司会 昭和十八年にはいよいよこちらの校舎が出来ましたので、二月の二日にこの学校に移転したわけですが、この頃の記録をみますと、生徒が往復機を運んだとあります、これは一番大きな思い出でしょうね。仰々しいですが、まあ落着くところに落着ついたという気が大分漲っていたように思うんですが。

生野 あそこから歩いて持ってきたんだね。土手

トラックでも運びましたが、自転車のある人は自転車で運ぶし、でも、椅子は自分で持ちましたね。机は二人で持って行ったんですよ。

藤井 電車に乗って運んではいけないといわれたんですが隠れて乗ってしまった(笑い)

司会 道はどこを通ったんですか。

藤井 その道(横の通り)を真直ぐ歩きました。

杉山 二日位いかゝったんじゃないですか。

司会 ええ、四日の日によいよ授業したようです。その日が創立記念日ということになってるわけですね。創立記念日を二階の廊下でやりましたね。本日五日より授業

開始と書いてありますが。

杉山 社会科の研究室があったでしょう。あその所と作法室(旧職員室のあった所)の所とで、大きな声で挨拶をなさるんですね。

鈴木 広瀬先生も、何しろ三方に聞えるように話されるんですからね。

杉山 あなた方は背が高かったからいゝけど後の方の人は余り聞えなかっただろう。

藤井 でも、あの頃は緊張していましたから聞えましたよ(笑い)

鈴木 あの頃は青山さんがよく号令をかけていたのを覚えてるな。

じいにならなくてよかった

司会 十六年から戦争が広がって、外ではそういう事で、又井草でも日誌によりまして、「本日から裸足で歩くことに決定した」とあります。(笑い)

青山 体操の時なんかきれいだったね。

生野 廊下なんかもきれいでね、鏡のようだった。

杉山 糠をもってきて拭きましたね。

青山 クラスで競争になっていたんだ。司会 そして、十八年の二月にこの学校に移

ってきて、三年生も入ってくる。七月の一学期の終り頃都制の実施によって都立井草高等女学校になって、これまでの十八高女がなくなりました。これは杉山先生――。

杉山 これは役所では石神井にあるんだから石神井高女ではどうかということでした。が、広瀬先生が杉山さんだろうと相談されましたね。「先生、女子の学校にじい（神井）女学校ではちょっといけないですよ。井草の方がじいよりもいゝんじゃないですか」ということで、またあの頃、転学も多かったので石神井とは読めない人が多いのじゃないか、＼いしかみい＼と書くんですからね。そんなことで私が反対したんです。

真田 石神井中学（現高校）は名乗りを挙げていなかったんですか。

杉山 いたんですが、あちらは中学校、こちらは女学校ですからね。練馬の区役所に行くと、区内にある女学校がどうして井草（杉並区）なんて言うのかと大分皮肉を言われまして、別に理由はないんで、ただ女の子に神井はおかしいということで……。

司会 十八高女の校章は花びらが十八あるあれですね。

杉山 あれはまだ青山君が赴任される前に高野洋服屋に頼んだんですよ。われわれには図案が出来ないし、商売人に頼んでみようということでも高野に頼んだわけで、高野がどこかの図案屋で頼んであの校章が出来たんですね。

司会 ついでに、高等学校になってから現在の校章になったわけですが、あの発案者の青山先生に、あの図案は深遠な世界観の上に立っているんですけど、それを一つ。

春山 皆も知らないんだね（初期の卒業生に）

これは単純な形で何か強い感じにしたい、弱過ぎて困ると……いろいろ考えてみたんですが、何も深い因縁もないし……。しかし、井草の「い」は泉という意味もあって、これがいいということで「井」という字を真直ぐ延して行って八方に拡がるように、世界を前に……と校歌にもあとから出てくるんですが、世界の中に井草がある、自分が宇宙の真中にあるんだということを出したい、これを一番簡単なあの図案に表現したわけです。あと、色は白は純白、それに金で清純で高貴な感じを出したい、それを主にして余りくどくしないで、中の井草の井を小さく引締めてバランスがとれ

ば非常に美しいというふうに考えていたんですよ。

司会 そういう遠大なアイデアが含まれているんですね。十八年には戸村先生が赴任してこられたんですね。

戸村 ええ、そうでした。

司会 鈴木先生もこの頃だが、鈴木先生は大分恐わがられてたようだが、あなた方はどういう印象を受けています。

春山 そんなに恐いとは思いませんでした。恐いというより点数が辛かったように思っています。

司会 最高七点くらいなもの。

鈴木 非常に皆びちびちして面白かったよ。初めて来た時はこれはまた随分少さい学校に來ちやったと思っただけ（笑聲）青山さん、隈先生も皆若かったね、とに角元気がいいんだ。毎日放課後女の子と一諸になってバレーやるとか運動ばかりやっていたな。楽しいというほか余り印象はないね。今は大分苦しいからね。（笑聲）

生野 よくしかし毎日遊んだねえ。

青山 隈さんが、毎日先頭になって出てきてね、手拭をぶらさげてさ。

鈴木 あの頃の写真が随分残っているな。

無事やり抜いた学徒動員

司会 この頃、中島飛行機、朝比奈に勤労働

員になったわけですが、あの頃はだんだん戦争も凄まじくなって世相も乱れ、学校も教育の形態が失われてきました。なんといつても大変だったのは女の子が工場で夜遅くまで働かされたことですが、まず藤井さんから一つ。

藤井 私は中島の工場だったんですが、

司会 職工さんと女学生の間にはトラブルはなかったの。

藤井 ええ、別にありませんでしたね。

藤沢 私たちの所は何だかわけのわからない字をもって来て、これ読めるかなんていわれたこともありました。

司会 作業はどうでしたか、深夜作業もあったんでしょう。

藤井 大体十二時頃までやりましたが、夜中はやらないようでした。

藤沢 朝比奈ではやりました。八時間づつ三部制でやりました。

春山 私は朝比奈の旋盤です。全然学生だから何にも知らなかったんです。

司会 どうにか出来るようになったのはどの

くらいだったの。

春山 三ヶ月の養成期間があって全部教わったんですよ、旋盤から何から……。

藤沢 適性性検査もやりました。

司会 全然怪我はなかったの。

春山 怪我はしませんでした。でも旋盤屑なんかが機械に入ると大変ね。

土手 誰か袖をはさまれた人がありました。

戸村 作業服の袖が捲きつきましてね。

司会 最初のうちは大事にしてくれてたでしょう。

藤沢 ええ。

司会 戸村先生も行かれたんですか。

戸村 ええ、面くらいましたね、食事は実にお粗末ですしね、やすみますのに左官の部屋が空いてましたのでその部屋に入りますといちどに蚤がとびついて参りましたね、結局その部屋に来る人がなくなつて(笑聲)

春山 私の所はぼろを使いますでしよ、そのぼろにシラミがついていたり、私シラミなんて見たことがなかったから……。寮にいたうちは解らなかつたんですが一週間に一度家に帰れますので母に見てもらいましたらシラミだというので(笑い)

司会 爆弾なんか落ちなかつたんですか。

戸村 ガスタンクに命中すると一里四方が全滅するそうでしたが、とうとうしませんでしたけれどもね。

藤沢 食堂から落ちるのが見えるんですよ。

戸村 挺身隊とか工員さんが死にましてね、うちの生徒は運がよくて怪我もしませんでしたし本当に有難いことでした。

司会 小山内君や小川君は知らないわけだが、学徒動員なんていう事に疑問や抵抗を感じませんか

小川 僕は殆ど戦争中に生れたので想像もつきませんね。

青山 今の中学の二年生まで行つたね。最後に行つたのが女学校の二年、三年生だったわけだ。

戸村 二年生が最後に出されまして、その年に終戦になりました。

杉山 中島にはじめて行くという事だったが、防空設備が悪いという事で、人の大切な子供を預つていて設備の悪い所にはやれなと大分頑張つたんですが、だから他の学校よりも出るのは大分遅かった。

司会 学校でそういう選択権があつたわけですか

杉山 いや、ないんですけれどもそれを広瀬

先生が大分頑張られて、先生は前に役所におられたから。

司会 十八年の十一月に女の子の体力特殊検定がありましたね。

戸村 ええ、三年生で失格したのが三人で、二年生は誰もいませんでした。

藤井 短棒投げ、千米、マラソン、校庭二周などでした。

終戦・校舎造り・いも作り

司会 この頃になると食糧事情もきびしくなりまして、当時の教務日誌によりますと、おいも五百匁配る、一貫目のおいもを貰って帰るとあります。(笑声)

十九年あたりで戦争がいよいよ厳しくなつて、二十年の八月に「終る」と、こういうわけですね。学校も大きなショックだったし、日本自体が大きな壁から脱した時で、うちでも杉山先生が校長になられたんですね。

この混乱期に杉山先生は長い経験から、校長になられてどういう抱負経倫でこの学校を建てなおして行こうと思っておられましたか。

杉山 あの頃は第一容れ物がない、容れ物がなくてはこれは中味を培養できませんから

広瀬先生も建物に関しては考慮されていろいろ計画されたこともありましたが、北校舎しかないんですからどうにもならない。広瀬先生が辞められる前でしたが、二教室分造れというので寄附を募ったことがありましたが金が集りませんでした。それからPTAの了解をえまして貯金をしておきまして、今取り壊された平屋建ての校舎を建てたわけです。とに角、容れ物を作つて、生徒が落着いて、五十人位で勉強できなければならぬということで、抱負経倫ということより、容れ物の努力はしたつもりだったんですが、充分には出来なかったんです。

司会 杉山先生がこの七教室を作つて下さったんですが、口の悪い人が豚小屋なんて言っていました、その当時にしてみればなかなかのデラックスだったんですね。

杉山 先生が芋の苗まで採しに行かれていた事がありますね。

杉山 随分広く植えましたね。

藤沢 え、この辺は竹やぶでしたが、その辺に作りました。

杉山 ちょうど清瀬の役所に友人がいまして、その苗がよかつたんでね、そこへよ

く頭をさげて行ったもんですよ。

司会 このあたり、大分学校の内容も変りまして、昔の保護者会がPTAになったり。教員のレポリューションではありませんが我々教員の校長に対する要求署名運動、五日制の実施等、この頃かな、生徒も新旧入り交つてごたごたになったのは、伊藤さんなんかどうだった——。

伊藤 やはり過渡期という感じはありました。高女の時に入つていらした方や高校になつてから入られた方々で。卒業式も高女卒と高校卒業が一緒に行われました。

司会 児玉さんは何年ですか。

児玉 私は昭和二十一年に入りました。

生野 物資の乏しい時代だったね。

司会 馬鈴薯一貫目が配給になりましたね。

児玉 さんもう貰つた方かな。

児玉 ええ、頂きました。

司会 杉浦さん、その頃の思い出は——。

杉浦 五日制が実施された時に、私たちお休みが多くなるもんで賛成したんですよ。その頃生徒会は鈴木先生が活躍していらしたんですが、それで土曜日になると生徒協議会の名前で他の学校と連絡をとることになつたんですが、私自身のために生徒会の

ためにもとても役に立ったと思います。

各週毎にその当番校があつて、そこに集つて話し合いをするんですが、とても役に立つたと思います。

司会 初代の生徒会長は。

鈴木 大矢、その次は渡部、それからほら学習院（現助教教授）にいる元持。

生野 あの頃活躍した人は、今社会的にも随分活躍しているねえ。

杉山 とに角、一期二期には傑物がいたね。

ラブ・シーンで驚かす

青山 石神井と音楽や劇をやったこともあったね。よく合同してやったけど大体こつちの連中も粒揃いだから、石神井の男子もそれを楽くみにしてゐてね（笑声）、何しろ楽しそうだった。先生方も来たくて来たくて仕様がなんだな（笑声）

杉山 劇のコンクールで一等か何かとつたことがありましたな。

青山 音楽ですね。

杉山 その話で思い出したんですが、四国の松山から何とかさんという人がこの学校にわざわざ転校してきましたよ。何故かと聞いたら私は音楽学校に行きたいが井草が非

常にいいというので転校してたんですね。

驚宮の親類に下宿していたが何といったかな名前は……。石神井と一緒にやったのが入賞したのでそれを聞いてきたんですね。

鈴木 あの頃は音楽と演劇ですね。坂本、服部、千葉とか揃っていたなあ——。

藤沢 石神井との劇でラブシーンがあつたんですよ（笑声）（註、「檢察官」の一場面で当時の写真新聞「サン」にクロズ・アッブされ「こゝまできたか高校生」と批評された）学校ではあんな劇をされると随分お困りになったんでしょうね。

生野 いや、別に困りはしないよ。

青山 石神井の音楽の先生は今都の指導部にいらっしゃるが、あの先生は男女関係について厳格でした。

杉山 僕も何回かその人の指導を見たが実にきついですね。

青山 男女関係でもちょっと問題になると、部をやめろというので——。

鈴木 石神井の生徒にちょっとそれに近いところに行つたのがあつてひどく叱られた。杉山 やかましい人でしたからね。

生野 でも、卒業してからなら結構ですよ、在学中に格別問題がなかったんだから。

青山 それで勉強ができないなら困るけれども皆出来たからねえ。

春山 当時、石神井の演劇をやっていた人たちは演劇でならしているそうですね、何と云うところだったか——（註・現在の劇団「四季」）

生野 しまいには自作でやっていたねえ。酒井さん（春山さん）が卒業式のとき、謝恩会でやったの、あんた覚えてるだろう。服部と坂本といった連中が長々と一時間くらいやったね。あとで聞いたら会場で即興でやったというんであきれたね。

司会 あゝいう演劇の下読みは青山さんの家でやっていったんだってね。中村芝鶴なんてつれてきたな。

五日制は女学校系統の方が多かったようですが、何か意味があつたんですか。

鈴木 五日制はアメリカの方の制度を受け入れられたんじゃないですか。

杉山 ざっくりばらんに言うると、先生方の研究日を一齐にすると具合が悪いので、五日日制にした方がいゝというので、別に女子系だからということもなかったのでしょう。その時は真田さんは男子系の方に選ばれたんですね。

真用 私の学校も五日制でしたよ。

鈴木 食糧の問題とも結びついていましたんですよ（笑声）

青山 朝礼をするときしゃがんじゃってね。

鈴木 弁当の検査をしたことがあるけども皆芋か何なかでね（笑声）

十周年の講堂建設

大野 十年目あたりまできましたので先を急ぎまして、二十七年には杉山先生が忍岡に栄転され、高柳校長が来られました。その前に十周年を二十五年にやったことです。

真田 あれは十年でなく、十年目でしたね。

青山 ちょうどあの時は男子も入ってきたので、そのお祝にする意味もあって十年目に十周年をやったことだったと思いますけどね。

鈴木 中庭でやったんですね。広瀬先生に怒られました。「十年目を青空でやる」とは何事だ」と。（笑声）

杉山 そうだったな——。

司会 あの当時一番苦勞されたのは鈴木さんと限さんですが——。

鈴木 学校も非常に純粹だったし、又我々も

どこかぬけていますし（笑い）。

この頃講堂兼体育館を建て始めたんですが、建設会社がどうもおかしい。少し建て上ると金をくれというので最初の中はやっていたが、そのうち三分の一以上支払ってもちっとも出来上がる様子がないので、どうもおかしいという事でいろいろ調べてみたらもう会社はつぶれていた。そういう風で今ま関心もみな薄かったのが、先生も騒ぎ出してきかんとす。高柳校長先生の立場もなくなってくるので喧々ごうごうだったなあ。それでとても素人じゃだめですから生きのいゝ弁護士を頼んだんですが、結局、向うでは何百万円くれれば本当にやるからといって、とうとう四、五十万円くれてしまった。しかし一向に建つ様子もなかったので弁護士が入ったり、向うも暴力団みたいなものを引ばってきて、高柳先生はおとなしいので、こっちの若林君なんか生きのいい連中が行って立ちのかせるという立ち廻りなどあって、学校でああいうことは滅多にないと思うんですがねえ。

真田 そういう因縁のある講堂なんですか。あの当時高柳先生は生命が二・三年縮まったと言っておられましたよ。他の学校の校

長連中も井草みたいになっちゃいけないからというので——。（笑声）

鈴木 現実に慎重を期さしめた功績は大いにありますよ。あれは都の指定業者なんですからね。

藤沢 結局、最後まで同じ業者が仕上げたんですか。

鈴木 ええ、お金はやるぞやると言うだけ言うのとそれにつられてやるんですよ。それでいて最後には金をやらなかったんですから怒りましたね（笑い）。最後は第二会社が肩替りしてやるといったけど、最初の予算は四百五十万位だったのが六百万近くまで上ってしまった。しかし、そんなにやる必要はないというのでやらなかった。最後は困ったでしょうね。

司会 そういう状態ですから砂利屋は砂利屋、瓦屋は瓦屋で毎日のように校長室で大きな声でどなっている、下請が学校に来るわ来るわ……しかし何ですね結果論ですが今からふりかえると困難な時期でしたね。

真田 PTA関係では一番熱心な人たちが輩出した時期でしたね、佐藤さん多湖さん……会長さんだけでなく当時の先生方も実に熱心にやっていたね。

小山内君など慶応に入ったわけですが、井草スタイルに関して今更ながら考えるとどうですか

小山内 三十年に入学しましたが、最初の頃は校歌にもありますように校門の辺りに桜がいっぱいに咲いてとてもきれいだと思っただんですが、一度門へ足を踏み入れるとバラック校舎が目前に迫ってきましたね。その校舎がまたひどいものであって、廊下なんかは「このあたり危険」なんて書いてあるんです（笑い）床に穴があくんです。うつかり気をゆるして廊下も歩けないような状態でした。

司会 共学は二十五年からですね。青山先生、最初の男子の生徒のために一言。

青山 勉強はできなかったがなかなか相当なものだったよ。しかし、卒業後は社会的に出てきたね。（男子苦笑）

真田 井草の態勢が整っていなかったし、何せ男の数が少なかつたせいもあるでしょうが。

杉山 共学になっても、女学校時代のあいう連中から引続いているから、男の子より女の子の方が優秀で、そのためのコンプレックスもあったでしょう。

生野 先だって、黒木（男子初代会長）に会ったが、どうしてなかなかしっかりしているよ、立派になっちゃってね。

司会 生野先生がよく言うけど、井草の生徒は卒業すれば必ずよくなるんだそうですか——（一同爆笑）

杉山 私も、今考えてみるとちょっと細かいところまで言い過ぎたんじゃないかと思えますね。

杉浦 とに角、よく汚すんですね。でもそれを私たち余りヒステリックに取り上げ過ぎたような気がします、生徒会なんかでも。

生野 元気があってやっているんですからね。よその学校に行ってみても皆そうなんだ。ボックスなんか拳固で穴を開けるんだ。

おれたちにも云わせて

司会 小山内君なんか勉強の方はどうだった、例えば井草にいたために……というようなことは、率直にいつて。

小山内 勉強の方では、大体僕たちの頃は真面目な人が多かったですから平均してよく勉強しました。今もその当時のことは役立っていますよ。

坪田 僕の頃はやはり女の子の方が断然多いし、男の人も殆ど大学に行ったんですが、一人々々で勉強するような型でした。

杉山 何という人だったかね、その頃東大に入りましたね。

鈴木 大熊でしたか、坪田君と一諸かな。

小川 坪田君より一年上です、鹿児島から転校してきました。

司会 もう少し受験態勢を作ってくれという要望が頻繁に出てきたのはその頃からですね。しかしその点、うちの校長がわり切っていて、学校にたよるな自分をたのめとよくいわれた。

小川 遊ぶには大変いいところだったと思うんですが……、一人でガチガチ勉強するのは余り気持のいいもんじゃないですよ。

杉山 今の生徒さん達は中学では高校、高校に入れば大学で、われわれの時みたいに中学で五年もゆっくり遊ばしてもらうと大変ゆっくりできるんですが、その点今の生徒は気の毒だと思えます。青春の気を養う時があってもいいですね。

司会 君たちはそういう感じは……

小川 大いに行けますね。人間的には皆仲よくやりましたが勉強なんかは余りやらない

かったようです。けれども今考えてみると一番高校時代というものが人間形成という意味においても性格を作る上からも重要だと思ふんですよ。この点でこの学校にいて大いによかった事も多分にあります。

司会 学校時代にはのんびりした方が一生のプラスですよ、そういう点で、井草はいいいんじゃないですか(笑)。坪田君なんかどうですか。

坪田 杉山先生がおっしゃったように、男子は多少コンプレックスを感じて、何か反抗しようという事で、クラス内でも全体として男女の融合もうまくゆかなかったし、勉強でも交流がないし男子は男子で固ってしまいました。結局話し相手というのが、自分以外ないわけです。なにしろ教室の三分の二が女子ですからいっも後の方で固ってしまいましたね

杉山 私はよその学校にかわってから井草のように組で男女同数にしたんです。そこは女子系の学校で女子が多かったので女子だけの組を作って、あとを男女同数になるようにクラスを作ってみましたが結果的にはよかったですと思いますが、ただ女子だけの組の生徒に恨まれましたね(笑)。

藤沢 それで、そのクラスはずっとそのままなんです。

杉山 いいえ、途中で入替えをしたんです。

坪田 数の上では圧倒されましたが、結構男の方が文化祭やなんかで活躍してました。

司会 多数決は絶対にだめだったな(笑声)ところで、もう昔のおもかげはないでしょう。

土手 ええ、本当ですね。今日は向うの方から(表門をさして)参りましたからここ(新校舎)しかみえないものですから驚いてしまいました。でも門のあたりにはまだ昔のおもかげが残っています。それから後の校舎をみまして初めてああ井草だなと思いました。やはり懐しかったですね、あれをみてちょっとほっとした面もあります。

仏つくって魂を入れる

司会 では、これからの井草にどうなっているかと思ひますか。

藤井 この環境からしても、余り勉強々々ばかりに促れず、もう少しふっくらした学校の雰囲気かほしいと思います。

土手 図書館をみせていただいて羨しいと思ひましたね、私たちの頃からみれば、図書

室なんてなかったんですものね。

司会 まあここまで整ってきたのは一つには絶大な真田校長のご努力が実を結んだわけだ、形の上ではともかく、今後井草がどう、いう風でなければならぬか、又こういう点が井草に足りないものだと、痛感されているのは真田校長だと思ひますので、それを一つ聞かせていただきたいと思います。

真田 私は前任校にいた時から自分の考え方としては男女は同質同数でなくてはいいないという考え方をもっていたんですが、前の学校では残念ながら微力でそれが実施できなかつた。やはり女子二対男子一という割合の学校でなければ、このこと同じような問題を扱って悩んできたわけなんです。それが実行できないままにこの学校に移ってきたんですね。そして私の来た年の春からそれに踏み切ったわけなんです。私としてはいい時に来たという気がしました。それが第一の感じですよ。これをどんどん伸して行くよりほかはない。五年間というもののバカの一つ覚えみたいに男女同数と、小山内君なんか耳にタコができただろうけれども……一応男女同数が軌道にのってき

た。勿論それはごく一部であって、まだそこにはいろんな難問が同居しているわけですね。同数になっても男子の三分の二は第二志望校という形で他の男子高校のおこぼれをもらっているという事実があるんですが、これらは解決できるような形でありながら、やはり異った形でのコンプレックスがあるわけですね。以前、数も少なかったし、質も悪かったという当時、それをコンプレックスで表わさなければならぬという気持はよくわかるが、今では質も男子の方が上廻るといふ形が出て来ているのであります。なおそういう尾があとを引いていましてねえ。男子の行動が非常に旺盛になったといつてもその裏に何かやはり自暴自棄につながるような乱暴といったようなものが潜んでいるんです。こういうものをどうして排除して行くか、こういう所に今後の井草の問題があると思うのです。今は一応形だけができたのであって、内面的に定着させるのが井草の課題ではないか、それにはやはりいい環境を与えてやるという事が不可欠の条件なんです。今度こういう校舎ができて窓にも大きなガラスを入れましたが、あれを一枚割られると千五百

円かかるんです。早速朝礼の時におどかしましたが皆非常に気をつかいましたねえ、それから二ヶ月半になりますが一枚も割らないですよ。(もう一枚割りましたとの声あり——笑声)二ヶ月に一枚ならまだいい方じゃないですか、とにかくそういう所に井草の大きな問題が残っているんじゃないかと思ひますね。

司会 さっきお話に出た平屋建の校舎一棟も都としては当時非常にデラックスだったんだそうですね(笑声)。

真田 あの建物が私が赴任してきました当時は天井に穴があくし……ちょうど三十一年の梅雨の時でしたか、天井からイエダニが落ちてきて女の子の髪やスカートにたかるという事件がおこりまして確か授業を休みましたね(一同爆笑)。

鈴木 結局あの建物は土台はしっかりしていたが中が粗末だったんだな。

杉山 あれは北辰土建が請負って材は加賀の前田さんの山の良材をもってきたんだが、平板は栃木の鳥山からもってきたんだな。それがいけなかったんだらう。

真田 あの当時は特にむしむしするひどい年でしたからねえ。まあしかしあの事件が結

居都に陳情する好材料になったわけですからね(笑声)。

河西会長さんがそれを引きうけてくれましたが都の方に乗り込んでいろいろやってくれたんですけれども、まあ「災が転じて福になる」という事だったですね。

司会 今日は皆さんの御好意でお多忙のところをおいでいただきまして、又先生方もお忙しいところを出席していただきまして本当にありがとうございます。

漸くにして井草も二十年を経ったけれども内容・形態同時にまだこれからということを感じるところでございます。井草を育てて行くのはこれからということ、ひとつ単なる懐古趣味に溺れてしまわないで、これを一つの契機にいたしたいものだと思ひます。それには勿論、先輩や先生方やPTAの方々や都の方々の援助が必要なのですが、しかしその中には常に井草に対する愛着というものが支えていないとバラバラになる恐れがありますので、二十年たったからこれをやるんだということではなく、ひとつここで内面性を豊かにして井草をもりたてるよすがになれば幸いと思ひます。長時間どうもありがとうございます。

◆一九五〇年・井草十大ニュース◆

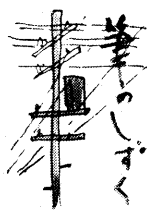
- ①ウエルカム、井草ボーイ（共学始る）
 ②井草新報オギャー ③飛んでも跳ねても大丈夫（中庭舗装） ④音痴猛練習（新校歌制定） ⑤三つの鐘関東に鳴りわたる（混声部優勝） ⑥狸紳士現る（十周年園遊会） ⑦けけ方満点（運動会仮装） ⑧結婚ラッシュ ⑨パン屋大繁昌 ⑩十でとうとう井草も十年（井草新報5号より）

◎新童謡集（井草の愛唱歌集）▼井草の

オサルはパンが好きパンパンパンパン大騒ぎ、購買の先生も笑うだろ▼ガラス何故わるの、ガラスは高いのに、あんまり無茶苦茶にあばれるからよ▼テンテンお転婆遅刻生、垣根をこえて柵越えてスカート破いてとんできたとんできた▼白イクトツハイテタ女ノ子、ソノママ教室ヘイッチャッタ（白靴ハ下履）▼下り目下り目グーツとさがって不合格▼ニラメッコシマシヨ笑ウトダメヨ、一二三（四月対面式）（同21号より）

☆朝礼録音断片集▼皆さんの心の健康ということは心のセイケツという……ほらまた隣の人と話している、君は何年何くみだ？（高柳校長）▼タビタビ申し上げては、

イルのですが、まだケンベンを出してイナイ方がアります。これは——ダシてもダさなくてもヨイというものではアリマセン（青山保健部長）▼エー申し上げます（この処早口に）また盗難がありました。犯人



かって井草新報紙上に「筆のしずく」なるコラムがあった。作者はユーマーな某のナニガシ先生。今ここに再録してツツシンで今は（本校に）ナキ卒業生シヨシに捧ぐ。（埋草生）

がとったということはメイリョウであります。解散後とった者はこの場に残る（生野指導部長）▼あるクラスでは箒も雑布も一つもないといった状態でお掃除をしているようですが、これではいつまでたってもキレイにならない▼アノウ、落し物がありまですの、落した方は、私の所までとりにイラシて下さい▼今呼ばれた人はこの場に残るように、アトはカイサン。（同24号より）

★井草名所案内 ▼ミナサマ、門の左手

にみえますのは「滞幾日む（体育館の意）」と歌に詠まれた古い建築物で、いまだに出来上らないのでゴザイマース（講堂建築難行）▼正面の動物飼育舎のヨウにみえます粗末な建物は約八百人の人間が住んでおりまして近く天然記念物として指定されるそうでゴザイマース▼アノ右手の入口の中には巧売部のパン売場がゴザイマース。この辺はお昼ごろになりますと押し合いへし合いの壮観な風景がみられマス▼まだ時間が早いのので出てマイリませんが、その狼のように吠え、兎のゴトク袋をかかえてハネ廻る様子はホホ笑ましい限りでゴザイマース（馬菅井戸）（同27号より）

◆希望ニュース特集①生徒数が段々増加するので現在のボロ校舎を取り壊し、七階建のエレベーター付鉄筋校舎を新築して、その偉容が武蔵野の一隅に聳え立つことになる……とイイ。②通学の便をはかるためスクールバスの定時運転を実施する。無料奉仕ですバス会社があれば、③授業料、PTA会費を一切免除にする！但し退学者に限る。（同33号より）

古いアルバム



卒業生回顧録



空襲警報下の卒業証書

高女
一回 細井もと

勤務先の建物の二階から、裏に続いている。都立高校の運動場で、フォークダンスを楽しむ男女高校生を眺めながら、私の思いはいつも井草高女の昔にさかのぼってゆきます。創立二十周年とのことを恩師よりうかがって、あの畠中に歎をかついで地ならしをした当時が昔のことになってしまったのを痛感させられました。懐しさをいう前に、何か灰色

の感傷がくつくつと湧いてくるのは、第二次世界大戦末期の戦時色にぬりつぶされた時代を背景にした様々の思い出が、のびのびしたくったくない現代の高校生にくらべて、いたましい感じをぬぐいきれないせいでしよう。

二十週年の記念号に一回生だというので、とりわけ深刻がってみせる気持はなかったのですが、当時の面影をしのぶ余地もないほど立派になった母校の発展を心から喜びながら、幸福な若々しい魂に昔語りのようになってしまったあの頃の事をもう一度よみがえらせてみたいと思いました。

// 回顧する青春は夢のように美しい//というヘッセの作品の中にある行を、私は自分自身の経験のように長いこと身近く愛しまし

た。けれど今、それは自分の手がとどかなかったものへの、理由ないあこがれであったことに気づいています。今の若い人々が何げなく読み過すはずのことを、空想の中にしか探り得なかったあの時代に井草は生れました。

当時の物質的な不自由や、時代の圧力にもかかわらず、様々な可能性をはらんでいる未完成の元気な魂はやはり自由で希望にあふれていました。二百人余りの生徒に、最初は先生も十数人、畠中の仮校舎で運動場などはだしでした。翌年は新人生を迎え、大分にぎやかにになり、鷲の宮から上井草までの長い道を、机や椅子をもって延々と運んだのを出します。大変なことであったのにながやが面白半分やったように思います。

運動場の地ならしや、さつまいもの収獲の喜びなど、どうも外まわりばかり思い出されて教室の中での記憶がうすれているのは、私のように存在不明の劣等生でなく、優等生の記憶をおかりするほかないでしょう。

「かような経歴で、きわめて優秀な先生であります」新任の先生が紹介されると、広瀬校長はいつもの黒い気むづかしいお顔をやわらげて必ずそういわれました。第二反抗期ぐらいに席をおく生徒達は、決してうのみにしていなかったようでありましたが、とりえない私如き者が、今社会に一人立出来る最初の肉づけが、あの教室でそれぞれの特色ある懐しい授業でなされたことを感謝しています。

けれどそれら前半の楽しい記憶におおいかぶさって後半に続く学徒動員、雑炊をすゝりながら、田無の飛行機製作所に旋盤を操縦しに行ったことを書かなくてはなりません。家から離れて、真冬の女子寮のこごえるような防空壕に体をよせあってふるえながら、都心に投下されている爆弾に炎上して、夕焼のように明るい空を眺めながら、自分の家族を思つて、言葉もなく涙をこぼした夜のことを忘れることができません。このごろ、〃学生

は勉強するのが本分である。デモをやるなんでもってのほか〃などという言葉を、再々耳にすると、学徒の卵でありながら、勉強したくても否応なくかり出されて、命をおびやかされたあの頃が思い出され、忘却の作り出す罪のおそろしさを感じさせられます。私達一回生は空襲警報のあい間をねらって、卒業証書をいただいたのであります。

(昭和二十年三月卒業、現
在竹早教員養成所勤務)

井草への道

高女
二回 友光 尚子

はじめて井草への道を歩んだのは昭和十七年入学式の日でした。それからの学生生活を暗示する様な雲の垂れこめたるうすら寒い日でした。

その頃はもう大東亜戦争が始っていましたが、今の校舎が出来る前で、鷲の宮の仮校舎への道を大きな希望に胸をふくらませて一年近く通って後に、新校舎ができました。

麦の切株の残った畝の間に整理して上棟式を迎へ、やっと自分達の学校と云う実感がわいたものです。からっ風の中を汗を流して、椅子標本類そして実験用具、それに校庭の芝まで大事に抱え、仮校舎から本当の井草への道を幾度も往復しました。

二月四日 引越を済ませて迎えた開校記念日は雪の降る朝でしたが武蔵野の中の道を新校舎へと身も軽々と歩きました。

素足で廊下を歩ける様に糠雑布で拭き込み、ローラーを引いて校庭を作り、花を植へ樹を植へ、甘藷を植へ、南瓜を植えて、一棟のさゝやかな学校をそれはそれは可愛がりました。

そしてそれは私達のものでした。又校歌に歌われた桜の咲く堤の道も技をひろげた樺の道も私達のものでした。

夕日に浮ぶ富士を望む四季それぞれの井草の道は、私達に自然の美を摂理と、情感とを教えてくれる道でした。

でもその道は昭和十九年軍需工場への道に続いてしまったのです。

工場への行き帰りに電車の窓から黒々とたたずむ校舎を眺めるだけで、私の手で磨き清める日は、次第に遠くなり、お友達は次々と

疎開し、工場と防空壕を往復する日の繰返しでした。学徒動員は一年以上も続きました。

やがて終戦の日を迎えました。学窓生活を投げうって働いた甲斐もなかった悲しさと同時に、井草へ帰れることの喜びも大きかったものです。

早速大事に仕舞って置いた紺の制服を引張り出して着てみました。

その時の、女学生に戻ったと云う安心感と誇りかさは、その後の私達が未経験の社会環境を切り抜けて行く大きな支えになった様な気がします。

それからの半年余りは、とぼしい食糧事情乍ら、水へ帰った魚の様にびちびちとした張りのある生活でした。

今迄に失った総てを取り戻すかの様な意気込みで、試験の合間をみては、運動とか演劇とか、受験準備とかに夢中で過しました。

卒業の日、私達の井草への道は、それぞれの人のそれぞれの人生の道へと切り替えられ、一本の幹から抜けられる枝の様に、別れて行きました。が、私達をはぐくんでくれた井草への道は、私達の胸深く刻みつけられていて、この道の続きが今歩んでいる道であることを折にふれてしみじみと感じます。

新しい道を進むにせわしくて井草を訪れることのできない人々も、きつと心の中に印された一筋の井草への道をいつまでも愛し続けることでしょう。

(昭和二十一年三月卒業、旧姓児玉)

演劇部 揺籃期

のこと

高女^{オザサ} 四回 小篠ひさ子

昭和十九年から二十三年にかけて、つまり終戦を中心とした私たちの井草高女時代は、日本という国家の大転換の渦中であり、政治、経済文化すべての破壊と混乱と建設の荒々しい一時期であった。だから私たちも子供から青年への一番感じ易い時にこうした環境のめまぐるしい変化を刻々と身を感じ、その中で育って行った。「青春」というにはまだ稚すぎるがそれなりの苦悩や喜びを充分内包していた時代——それが井草高女で演劇グループを作って暴れ廻った、私たちのあの頃であった。

戦争が烈しさを加え、B29が井草の上空を

毎日横切って行った頃、校庭には防空壕が沢山掘られ、私たちは日に何度もそこへ飛び込んだ。秋晴れの空にB29がくっきりと飛行雲を引いて飛んで行くのを眩しいとも美しいとも思いながら見上げた。授業は落ち落ちて受けられるどころではない。二年二組青山兵吉先生の担任クラスだったが、私たちはいつの間にか仲よしが集って一つの強力なグループを作っていた。関美奈子さん坂本睦枝さん、千葉玲子さん、村岡ユリ子さん、伊藤文恵さん、鈴木恵美子さん、大鹿瑛子さん、川名昭子さん、橋村さん、湯舟さん、長尾さん、etc (みなさん今も元気にそれぞれ御活躍のようですが) いずれがアヤメカキツバタ、というにはお粗末なモンペスタイルだったが、みんな大変な文学少女で演劇好きそしてよく勉強した。「演劇部」というのはきりしたクラブ活動をするようになったのは戦後二、三年してからだったと憶えている。

二年生の夏頃から、親しくお世話になっていた先生方が次々と召集された。私たちはその送別の会のために、二階の作法室に作法机を並べ強制疎開地から貰った古畳を敷きしめた即席ステージの上で「ドラマ」をやった。翻訳劇や現代劇などに接する以前の私たちは

専ら国策に割って「忠君愛國」もの、即ち

「嗚呼楠公」とか「忠臣菊池一族物語西辺の錦旗」などを自ら脚色、出演したものである。私の楠正成、ムーちゃんのその子正行、川名さんの正季など、いずれも男装の麗人たちであった。英語の大西先生が、ほめて下さったり、今は亡き生物の清水先生を送ったのもこの頃。その年の冬から二十年の五月にかけて、空襲は日増しに烈しくなってきた。教室は齒の抜けるように疎開者でがら／＼になつて行つた。当時おひとりだった青山兵吉先生が都立家政に四畳半三間という風変わりなお家を借りていらしたので私たちは放課後そこへ立てこもって「安寿姫と厨子王丸」など読み合つて戦争を忘れていた。出征を明日にひかえられた国語の石川先生をこゝにお呼びして芸術について語って頂いたりしたこともあった「哲学」的なものへの開眼もこの頃、白

土わか先生に仏教のことを伺つて人生の深遠を感じた。『生者必滅』を眼前にしながらも十六才の私たちは、どんな欲に学んだ。冬が来て、生物の辻先生も応召された。私たちは渋谷の師団まで先生をお見送りし、その帰りに今の東大教養学部、当時の一高の校門前の枯葉にしゃがんでおいもを食べた。泣きながら

だったので妙にしゃべった。

二十年の春には殆どが疎開し、東京に残る者は極く僅かになった。私たちは疎開地同志で文集を作つては文通し合つたが、脚本を書いて来る人、恋の歌をしたゝめてくる人もあった。私は疎開先のトンネルで大声で親しい友人の名を呼んだ。その頃、東京の家は焼けた。広島に原爆が落ちた。

——終戦。私は真つ先に井草に戻つた。荒廃の中に、自然だけは元通りではないか——校門の前の白い埃りばい道。ケヤキ、桜、畑の枯葉、土の匂い！足が地につかぬ嬉しさで校庭を走つた。一人二人、友人や先生が戻つて来る度に、モヤの立ちこめた校庭で抱き合つて再会を喜んだ。歴史の鈴木貞三先生が青山先生と宿直室にお住いになられたのもその頃。乾燥芋にお二人が埋つていらした。

焼け跡のバラックから通学していたが、私は毎日嬉しくて／＼仕方なかった。当時は圧倒されていた文化人、特に芸術や学問の活動を禁止されていた人が一挙に解放され、その興奮した空気が街に溢れて来た。帝劇に灯りがともった。お堀に灯がうつる、それだけで東京の人は喜んだ。滝沢修や竹久千恵子らで「真夏の夜の夢」の合同公演が行われた時、

大西先生に連れられてそれを見た私たちが、

びっくり仰天、世の中にこんな素晴らしいものか、と感心した。新協劇団の旗上げ、文学座の復活公演、小牧正英、谷桃子らのパレエ、お能、等々数える間もないほど私たちは見て廻つた。物資は乏しく食糧もない時、赤い色足袋に紺のモンペ、青豆入りの弁当持参で、喜多六平太の「羽衣」を染井能楽堂で見た時。『芸術』という言葉の意味を身で感じた。そらだ、これなんだと私は興奮して帰つて来た。

何かしよう。私たちのグループは、やっぱり演劇の方向へ進んで行つた。そろ／＼外国のものも読み始めたのでシングのものやメーテルリンクの「ペレアスとメリザンド」などを試演してみた。

高女、四年の春。そろ／＼男女共学の是否が論じられ始めて来た頃、お隣の石神井中学から、合同公演の申し込みを受けた。私たちは、ゴーゴリの「検察官」を大隈講堂で上演し、独協中学、第二高女など、演劇合戦をやつた。女ばかりの井草高女の先生方には大変御心配をかけたものだが、私たちは誇り高く真面目に稽古を積んだし、公演も行った。だが、男女共学に前のこととてこれは大変珍

らしいとジャーナリズムを喜ばせ、当時のサン新聞が、取り上げてラブシーンもどきのワシカートを撮影して「もうじき不思議でなくなる場面」とやったのでこれは校長先生方の間で問題になったらしい。杉山先生には大変ごめいわくおかけしてしまって、ここでお詫び致します。どうもすみませんでした。

さて、この合同公演をきっかけに漸く井草も「演劇部」を組織し、世の中の安定と歩を合せて、教育面にもクラブ活動などが盛んになって来た。チエホフの「桜の園」「熊」岸田国士の「葉桜」等々当る所、片端からテキストにして上演して行つた。下級生にも熱心な人が出て、「にんじん」をやつたのもその後のこと。国語の藤田先生（戸村先生）のお宅へ押しかけて話しこんだり、国藤先生（近藤先生）にレコードをきかせて頂いたりした。この次は当時の新館の一番奥の教室をステージにしていた。

高女五年を迎えれば、それ／＼進学や卒業後のこともあり、目茶苦茶に劇ばかり、でもなくなつて来たが、やはり「下手な横好き」で、私たちは井草卒業後、大学時代、先に「検察官」をやつた石神井の男の子たちと、研究グループ「方舟」^{（ハコブネ）}を結成したのである。

ここは、現在、新劇のヌーベルバーグなどといわれて大活躍をしている劇団「四季」の前身となり、井草で芽ばえた演劇の虫が、今、「四季」で開花している、と私は思っている。「方舟」での研究や活動は大変面白かつたが、これは井草の演劇部のことから外れるので省略する。

素朴だが透明な井草の頃のことは、現在の私を大きく方向づけている。あの頃、私は、二・五階と称するベランダで遠く空を見ながら「この破壊された日本をほんとうに動かしてゆくのは、十年先の私たちだ」と感じたことがある。卒業して十二年、日本を動かす、など、そんな大きなことは何一つできていないけれど、今、マスコミの仕事のはしくれにあつて、物事の判断を迫られる時など、自分を井草の頃にをきかえて考えることがある。あの時の私なら、「ウイ」といったか「ノン」といったか——、曇らぬ心を、あの美しい自然の中で育てられた私たちは幸福だった。あの頃の仲間が、今、それぞれ社会の中堅として活躍しているのに会うと嬉しく頼もしい。それにしても、十代^{（十代）}の後期の時の苦しい試練や切々たる憧憬が、こんなにいつまでも私の中で私を鍛え、支えていることを思う。

うにつけ、ゆめゆめ、あだやおろそかに日を送り給うな、と若い人たちに申し上げたい。

（昭和二十三年三月卒業、現在、文化放送企画局編成部勤務、旧姓、服部）

思い出すまゝ

高校 三回 清水 麗

併設中学を経て井草高校を卒業して早や十年近い年月が流れてしまつたが井草といえはすぐに自転車連想する程、よくも暑い日寒い日をものともせず——今でこそ舗装された立派なバス道路になってゐるが——穴ぼこだらけの道をペダルを踏んで通つたものと感心する。

私が井草に入つたのは終戦の年の秋、疎開先から続々と生徒が帰つて来て日に日にクラス^{（クラス）}の人員が増えた頃だった。田舎の女学校で殆んど勉強らしいこともせず、ひたすらに勤労奉仕と称して鋏をかついで開コンしたり、田植をしたり毎日、いきなりチンプンカンプンの難かしい英語や国文法には本当に困つた。アルファベットもろくに知らないの

に Robin, Robin, can you fly? を皆スラ
スラ読んでゐる授業に追いつくには苦勞し
たものだ。当時の英語教師大西先生は美
眉秀麗でいらしたが、駒場高校へ移られてか
ら如何お暮しだらうか。

英語といへば、隈先生がお氣の毒に亡くな
られたように人づてにお聞きしている。一度
ヒヤリングの練習に御自分の家庭のことなど
英語でお話し下さった。その中で I have a
son. He is very naughty. とおっしゃって
私達に「いたづらな」との意の単語を教へて
下さったが、その息子さんも今ではずい分大
きく御成長のことと思ふ。

お裁縫の山口先生は一番こわく、今だに授
業中の厳しい態度、お言葉など頭にこびりつ
いてゐる。御陰で当時教っていたいたづか
た縫いなど今もって重宝して、夫の丹前は曲
りなりにも毎年縫い直して着せている。又毛
糸の靴下編みに至っては、先生の「かかと作
り」はどんな編み方よりも恰好よくでき上る
と今でも私は信じて同じ目数で同じように編
んでいる。

國語の水野先生の授業は一風変わっており、
教科書の他にずい今手まめにプリントをして
はいろいろの美文名句、狂歌せん柳などに私

達を馴染ませて下さった。今でこそ漢字制限
でお目にかかれない字や、読み方、当字に親
しんだのもその頃だった。「悪阻」と黒板に
書いて「君達に何れ関係のある言葉だ」など
と氣恥づかしうにニヤニヤと仰言ったが、
その先生も今はきっと二人か三人の御父様に
なつてをられるだらう。

何はともあれ、日々の経過と共に漠然とし
てゆく記憶の中に今でも鮮明な一時期を頭に
残してゐる井草での六年間を私は大変貴重な
ものと考へている。

(昭和二十六年三月卒業、旧姓、原谷)

高校生生活を顧みて

高校
四回 仲田節子

その頃アプレゲールという言葉が流行って
おりました、今日子供のおむつ、洗いに追われ
ているこの私共が、「戦後の若い者は——」
と大人の眉をしかめさせた頃のことです。

ます。まして私は、新校舎を旧校舎につなぐ
あの渡廊下のすのこを踏む足音が数学の先生
のそれだと気づくと、もう氣が減入つて来る

くらいの情ない生徒でしたから、あれもこれ
も思い出すことはすべて、今まだ頬のほてる
ようなことばかりなのでございます。いわず
にすめばすませたいようなものながら、それ
でもやはり心の中でじっとしていることので
きないものが、事ある毎に懐かしさに驅られ
て上井草の駅からあの八重桜の咲く川沿いの
道を学校の門の方へ走り出してしまふので
す。そしてそれが校庭の青い芝生に仰向きに
寝ころんでいる白い体操服の少女を見つける
と、「ああ、あの頃の私って何て幸福だだっ
たのかしら」と溜息ついて立ちどまるのです。

そうでした。その頃の私共は何も隠し合う
ことをしませんでした。自分の能力も性格も
丸出しにしてお友達と交際することができまし
た。泣いたと笑ったりしたままの顔を、化粧
せずに先生に向けることができました。長々
と手足をのばして母校の土の上に寝そべるこ
とも自由でした。——社会に出て、上司の中
にも同僚の間にもそうした快い交渉を私はつ
いぞ見なかったのでございます。

意地張りの私は、良い成績がとりにくて試
験勉強はいやいやながらも一生懸命にしまし
た。合間には予習復習もそこ／＼にクラブ活
動に専念しました。選ばれば生徒会の仕事

に夢中にもなりました。そうしたその頃の単純な生活は何の形も残しはしませんでしたが、その素朴さの故にかけがえのない尊さがあつたような気がしてならないのです。時には少々羽目をはずしていたにせよ、又何の利益もなかったにせよ、毎日を力いっぱい生きたというその生活が、今の私共にはねたましいほどに懐かしまれるのです。

一時考古学に凝つた私が、部員と共と堀の内貝塚を発掘に出かけたのは、二年生の秋の頃でしたか——スコップをかつぎ、鍬を引き下さつた私共おしゃべりの雀の群を引率して下さつた先生はずい分と大変だつたことでしょうが、ともかくも私共は縄文式文化期の小さな土器の破片や石器の磨滅してしまつたのや動物の骨などを、まるで鬼ヶ島で得た宝物のように持ち帰つたものでした。粘土で堅穴住居の模型を作つたのもその頃のことでございます。その後いつの間にか考古学に対する興味も失ひ、大切にしていた石斧も引越にまぎれて失くしてしまいました。私は今ふと、そんなものよりもっと大切なものを失くしてしまひはしなかつたかと不安になつて来るのです。母校が私の中に植えてつくれたもの、たしかに中で育つべきだつたもの

の、それを失くしてはいはしなかつたらと。

(昭和二十七年三月卒業、旧姓、難波田)

試

合

高校 六回 森岡 和子

テレビの画面にくっきりと白いラインが、うつつている。高校野球の入場式、緊張と興奮と、そして壮厳さ。ぶる／＼と寒気がして、思わず身心共にしまつてくる。

今からもう八年前になろうか。福島で行われた国民体育大会に初めて、参加したのは——。そう、まだ、あの頃は、ハンドボールも余り知られていなかった頃である。

「出ると負け」とよくいわれたが、やはり東京代表には相違ない。代表である事の誇りを強く意識しながら、満場の拍手に迎えられる入場、炎々と燃える聖火を深く胸の奥にしまひこんで——。試合には、代表の名に恥じぬように頑張ろうと心に誓つた。

そして、ハンドボールの試合場は、これからの対富山県代表戦の為に、きれいに整備されて私達を待つていた。張り切つてグラウンド

に入ると、場内アナウンスで、この球技のルールを簡単に説明している。一般には、まだ普及していないからだろう。

試合には、参加できたものの、スパイクを持つてゐるのはチームの中でも殆どいない。男子の代表チームから比較的足に合うような、ラグビーのスパイクを借りて出場、ただでさえ重い靴と、はきなれないのと、大きな試合にはなれていないのと、そしてシュートのたびに一タマイクで説明しているのをふと耳にして、余計あがつてしまつて、先生が、サイドで大声で指示して下さつていたなどとは、全然気がつかなかった。

いくら呼んでも知らん顔をしていたそうである。

試合は、八対六で負けてしまった。

終了と同時に母の顔と学校の教室が、目に浮かび、「負けちゃつた」と飛びついて行きたかつた。

自分では、一心にやつたのにやはりくやしくて、参加したからには勝ちたかつた。でも、もう終つてしまつた——。

自分がベストをつくして闘つたグラウンドが、白いラインに囲まれて、次の試合を待つていた。

スポーツといえ、ふと思ひ出す 学校時代の思ひ出のほんの一駒である。

(昭和二十九年三月卒業、
現在勸業銀行本店勤務)

井草高校の思ひ出

高校 七回 喜多村 尙

井草高校へも卒業以来すっかり御無沙汰致しておりますが、聞くところによりますと、今年創立二十周年を迎えるとのこと、誠にうれしく思っております。生徒も変わり、校舎も変わり、そして先生方もたくさんお変わりになったことと思いますが、その間井草は、名実共に大きな発展をしたことと想像しております。

井草での楽しかった三年間の高校生活は、私にとっていつまでも忘れることのできない思ひ出として、心に残っております。

私は人一倍あばれた方で、色々なことをやりました。まず新聞放送委員会では、何もわからないうせに、ただもう無我夢中でした。原稿書きや校正など、楽しいことや苦しいこ

と色々ありました。あの当時、私と行動を共にした方々、時に先輩の太友、沢田、池田、柴田さん等にずい分お世話になったことは、いつまでも忘れることが出来ません。それに多くのよき同輩、後輩諸君と活動できたことは、ほんとうに幸せだ一たと思っております。あの当時の方々は、現在それぞれ立派な社会人として活躍しておられることでしょう。

次に私は野球部にも籍を置いておりました。そして「迷」選手として、大いにあばれたものですが、当時はまだ軟式でやっていた。野球部は、私の二年先輩である勝又豊氏はじめ、第五回卒業生の皆さんが、非常に苦勞して結成されたものです。以後阿部喜靖氏(第六回卒業生)、木村次男氏(第七回卒業生)等が野球部発展のために、大いに活躍されました。以上の方々は想像もつかないような、涙ぐましい努力で苦難の道を歩まれ、今日の野球部の基礎を作ったのです。一昨年よりかねてからの念願がかない、硬式野球部に発展したそうで、ほんとうに嬉しく思います。

今年の高校野球大会都予選での井草の活躍ぶりは、私も神宮球場へ観戦に参りました。そして感じたことは、現在の野球部諸君には

全然ファイトがないということでした。もっとファイトを燃やしてがんばって下さい。高校野球にはまずファイトが必要だと常に思っております。私も現在はもう全く枯草のような人間になってしまいましたが、当時は猛烈にファイトを燃やしてやったものでした。どうか、ファイトのあるチームになって下さい。野球部諸君の活躍を心から期待しております。

最後に井草高校の御発展を祈りつつ、ペン置きます。

(九月九日記)

〔昭和三十年三月卒業、現在法政大学院在学、松溪中講師。〕

「螢光体」四九ページの記事よりつくづく

Na₂・CaS・Cu は CaS が悪かった為か失敗した。昨年の文化祭の時、はつきりしなかった螢光体の論理も臆げながらわかってきた。昨年、早稲田祭で、螢光体を利用して、金属の内部欠損の発見法や次ぎの時代の照明として螢光体を金属と良導体のガラスで包み、千ボルト前後の高電圧をかけるとポツと光る。近い将来電力が太陽電池や原子力発電によって豊かになったらこんな照明も可能になるであろう。(終)

文芸部

気まぐれ

北川典子

(二年)

○月○日

幾何の一間を解くのに一時間かかるとは！それでもまだ解けない。この鈍い頭は一体何を考えているのだろう。何を考えているかですって。ほら、ずっと前読んだ「数学」という詩。

教室の中の四十人の生徒。

黒板とその三角形。

ためらっている鈍い大きな円は、

その中心点を太鼓のようにたたたく。

痛ましい期待の中の、

言葉もなく祖国もまたぬ文字たち。

不等四辺形の固い胸壁。

声がし、やがて静まる。

激怒し、やがて静まる。

のたうちまわり、自分の尻に噛みつく。

一つの角が歯をあける。

あれは犬だろうか。それとも牝の狼だろうか。

そして、少年たちの動かない視線の下
の、あれら地面の数字。

蟻塚をこわし、

またつくりなおす、あれらすべての昆虫たち。

よくよく考えてみれば数学なんて全く魔物同然。奇跡的に問題が解ける時もあるれば一生かかっても解けないものもあるから。

○月○日 夢を見て

何もかもがハッキリしたわ。私が生れる前、母は余りにも私のためにと思う願いを山ほど神様にお願ひしたんだわ、それで神様は母の願ひが多すぎるのでお怒りになっ
てしまい、罰として私をこんな人間に
しまったのだわ。今では私にはいいが
手にとるようにハッキリ見えるの。実際、
若い母の姿が見えたのですもの。同時に神
様がローマ・オリンピックの千五百メート
ル競争で山中選手は負けるとおっしゃった
わ。翌朝、ラジオを聞くとやはりその通り。
私は妹に、昨夜のことを話した。ところが妹
ときたら、頭からそんなことを信じない。
そこで「山中」のことも話した。全然耳を
かそうとしない。「そんなのまぐれあたり
よ」だって。何にしても相手は愚昧のやか
らだから、とあきらめたのだけど。

○月○日 倉庫で

今日はずい分変わったことがあった。日曜
なので倉庫に古本を探しに行った。そこで

一冊の古ノートを見つけた。名前が書いていないので読む。

「……この上ないお兄さん。人間の心なんて一体なにかしら。こんなに好きで別れなくなかった人と離れて……」

私はそんなにもおかしくないのに私達をたびたび笑わした。お兄さんの天性の全く真実な発露を私自身楽しんでたのかしら自分で自分に苦情をいうとは！お兄さんへ私は約束します。私は自分を改め、運命に課せられた僅かばかりの不幸をいつもやっていたようにくよくよ思い煩わないように努めます。私は目の前のものを楽しんでいきます。過ぎ去ったことは過ぎ去ったままにしておきます」なかなかこの文章しっかりと書けている。と思ったら、これは確かに翻訳されたある文章から引用してきたところもあるような気がしないでもない。そんなことはどうでもよい。一体お兄さんとは誰だろう。誰が書いたのだろう。こんな古ぼけた、蜘蛛の巣でいっぱい倉庫にロマンスが埋もれているとは！母さんに聞いてみようかな。いや、よそう、よそう、黙っていいよう。過ぎ去ったことは過ぎ去った

ままにしておこう。

○月○日

数学という魔物の正体を教えてもらうため友人の家へ行った。縁側に彼女の姿が見えたが、わざと気がつかないふりをして玄関の呼鈴を押す。彼女は魔法使いのようにすらすらと解いてしまった。よほどかしこいにちがいない。といっても今改めて思うのでない。部屋中「物理の講義」や「数学史」などで我々ふぜいには、とてもよりつけそうもない。——どれもこれも物理や数学に関するものばかりだ。私が好きでもない学科を彼女が好むとは何と皮肉なことだろう。彼女をちょっと見ただけでも、その目にちゃんと威厳がそなわっている——ついぞ中学時代から彼女が無駄口をたたいたのを耳にしたことがない。帰り道、教えてもらった解答の方法を思い出そうとしたがすっかり忘れてしまった。それほど私は忘っぽいのかしら。又教えてもらわなければ……。数学って何て時間のかかる学科だろう。誰かが言っていたっけ「数学とは金のかからぬ学問だ。紙と鉛筆だけあればよいのだから」しかし彼は言い忘れたことが

一つある。「時間がかかる」ということを。

「静かなるドン」読み終えたナターリヤって何て馬鹿なんでしょう。パンテレイ・プロコーフィエヴィッチはグリゴリーのほったたをいやというほどぶったら目がさめるでしょうに。

○月○日

全く、ひどい！いつも予習をしてくる時は指されなくて、運悪く友人と遊びすぎて予習をしないで登校したその日指されるなんて。もともと私は運が良いことなど今まで一度だってなかったのにこんな小さなことにまで運が悪いとは！恐ろしく長い英作文を黒板に書かねばならない。あせればあせるほど文章はうまくまとまらず、わからない単語が三つ位もある。おまけに前置詞を一つぬかしてしまうし。作文は滅茶苦茶。今日ばかりは先生が憎らしくてしょうがない。四年後に東京でオリンピックがあるというのに英会話をそっこのけでやれ文法だ作文だなんて……。

一体何てくだらないことを。くだらない！何かもっと気のきいたことが書けそうなのに。

螢 光 体

新 井 明 友 (二 年)

千年ぐらゐ前、日本の画家が貝を焼いて螢光物質を造り、これを絵の具に混ぜて不思議な絵を書いたことを中国の記録に載せてあったとのことである。では、この話に出てくる螢光物質とは何か？

今日、我々の生活の中には螢光灯とか、眼ざまし時計の針に塗ってある夜光塗料、ほたるの光のかうに、熱によって光を出さない物質を螢光体とか螢光物質という。詳しく言うと、一般に物質は 500°C 以上に熱すると目に見たる熱放射によって光を発する。ところが螢光体は目に見える熱放射を出さないようなもっと低い温度で光っているのである。この現象を螢光、またはルミネッセンスと呼んでいる。

螢光体が光を発するためには刺激が必要である。紫外線、X線、 γ 線、電磁波、陰

極線、 α 線のように粒子線によっても発光する。では一体なぜ発光するのか。大低の物質は紫外線や可視光線に照らされると、その光を吸収するが、螢光は発しない。これは吸収された光のエネルギーが、普通の物質では熱に変わってしまうからである。

しかし、螢光物質は光を吸収して励起された分子とその周囲の分子との間でエネルギーの交換が行われにくいような状態にある時、吸収された光のエネルギーは周囲の分子に熱として与えることがなく、再び光として外へ放出される。これがすなわち螢光である。つまりエネルギーを受けた分子自身が動きまわり、エネルギーが低くなる時、螢光を発するのである。この時、吸収した光より放出した光の方が波長が長い。すこしエネルギーが低下したわけです。螢光体

には、気体でも、液体でも、固体でも、いろいろのものがある。簡単な構造のものである、アルカリ金属やアルカリ土属、イオウ、ヨードなどの蒸気は温度がひくく、圧力が低いとき、螢光を発する。これは前述したような状態が実現されているからです。

(固体や液体でもこのような状態にあると螢光を発する。螢光には純粋型と不純型の二つの型がある。前者は名前のとおり、結晶が純粋な状態で発光するもので、結晶を精製すればするほど、発光は強くなる。ところが後者はこれと違って、純粋な状態では発光しないが、微量の不純物か加えると発光するようになる。この不純物を付活剤と呼び、添加量は $10^{-4}\%$ から数%である。

☒(1)は硫化亜鉛、銅燐光体 ($\text{ZnS} \cdot \text{Cu}$) の紫外線の吸収スペクトルを示めている。

(電気と光の化学より) 付活剤を含まない ZnS では a_1 で示められるように、 $3450\text{\AA}$ 以下の紫外線を吸収するが、(可視光線は $4000 \sim 8000$ まで) これに付活剤として、銅を約 10% 加えると、 a_2 のような吸収が新に生じて示めすようなスペクトルで黄緑色に発光する。これでは付 a_2 活剤の吸収があ

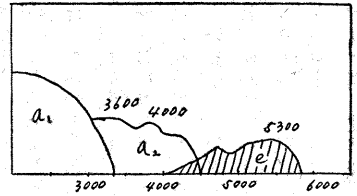
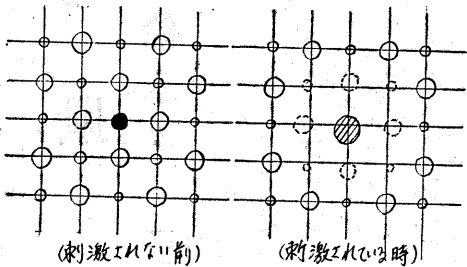


図 1

ることがわかる。
a₁の波長の光で刺激した場合、発光の能率が高くなり、a₂も良いので、a₂を励起体といい、これに対し、eを発輝帝という。この不純粋型螢光体では、付活剤が発光の原因であること

は、前述したとおりです。付活剤は母体の中では、原子、またはイオンになって分散しており、付活剤だけについて考えると、ちょうど希薄な気体のような、ばらばらに分離した状態にある。付活剤は母体中で多く場合、母体結晶の陽イオンと置き換って存在していると考えられている。付活剤が光を吸収して励起されると、その電子雲が広がるので、周囲の分子は変位を起こして、新しい平衡位置へ移る。このように付活剤を中心として、光の吸収の過程によって変位を起こすイオンの集団を発光中心という。(図(2)参照) (電気と光の化学より)



- … 付活剤
- ◐ … 励起された付活剤
- … イオン
- … +イオン
- ◌ … イオン変位した状態
- ◌ … イオン変位した状態

この不純型は不純物の種類によって、色々変えることができるので種類が八百種以上にもなり色も紫・青・赤・緑・黄緑・桃・青白色などと様である。

(図 2)

では、比較的つくりやすい硫化亜鉛、銅燐光体について話そう。
(燐光体とは螢光体より残光時間が長い。しかし、両者を合せて螢光体という) 硫化亜鉛を母体とし、銅を付活剤とする。まず、母体の精製から始まり、硫化亜鉛を水で洗滌したり、H₂O₂などで十分に

精製した純度の高い硫化亜鉛をつやる。数回再結晶させた銅塩の水溶液を加え、これまた数回再結晶させた塩化カリウムの水溶液を融剤として必要量加えてよく混合し900°C~1200°Cの温度で焼成する。この焼成によって母体の結晶は発達し、付活剤は高い温度によって、活発に動きまわって、母体の結晶の中に侵入し、発光性を与える。ここに出てくる融剤というのは塩化カリウムのように母体に比べて融点の低い塩類で、焼成のとき溶解して、結晶発達を助ける。このようにして時間ほど加熱した後急冷する。不純物の中で、鉄族元素(Fe, Co, Ni)は特に有害で硫化物元素に対しては10%ぐらい含有していても、強く発光の抑制剤になるので、精製は念入に行ってかならず除去しなければならない。このZnS:Cuは黄緑色であるが、硝酸カドミウムなどを加え、少しずつだんだん量を多くして行くとZnSとCuSを作ってゆく。その量の多くなるにしたがい、発光の色が紫―青―黄―橙―赤と変る。以上の実験は昨年の文化祭にやったことである。ZnS:Cu, ZnS:pbは成功したが、(以下四五ページにつづく)

部物生

天竺鼠

鈴木タイ子

(二年)



私達のクラブでは、俗に「モルモット」と呼ばれている「天竺ネズミ」を、飼っています。今春、石神井高校対親善大会の時、石神井高校生物部より、私達のクラブにおくられたものです。その時は、生れてまもなく、(一ヶ月位)でしたから、十五センチ位のリスの様な、かわいい動物でしたが今は、約二十五センチ位の体になり、体色は、つやのある茶色、耳は短円型、黒褐色の、丸い愛らしい目をした成獣となりました。このモルモットは、医学上―動物実験に利用されたり、愛玩用として、「黒牡丹」「狂獅子」「狸々」などと、美しく呼ばれ、飼われています。この種類には、「イングリッシュ系」「短毛」「アングラ系」(長垂下毛)「ジャパニーズ系」(大形硬長毛)等、色々な種があります。私達は

飼い始めて、長くありませんので、細かい事は言えませんが、次の様な項目にしたがい記してみました。

一 飼育について

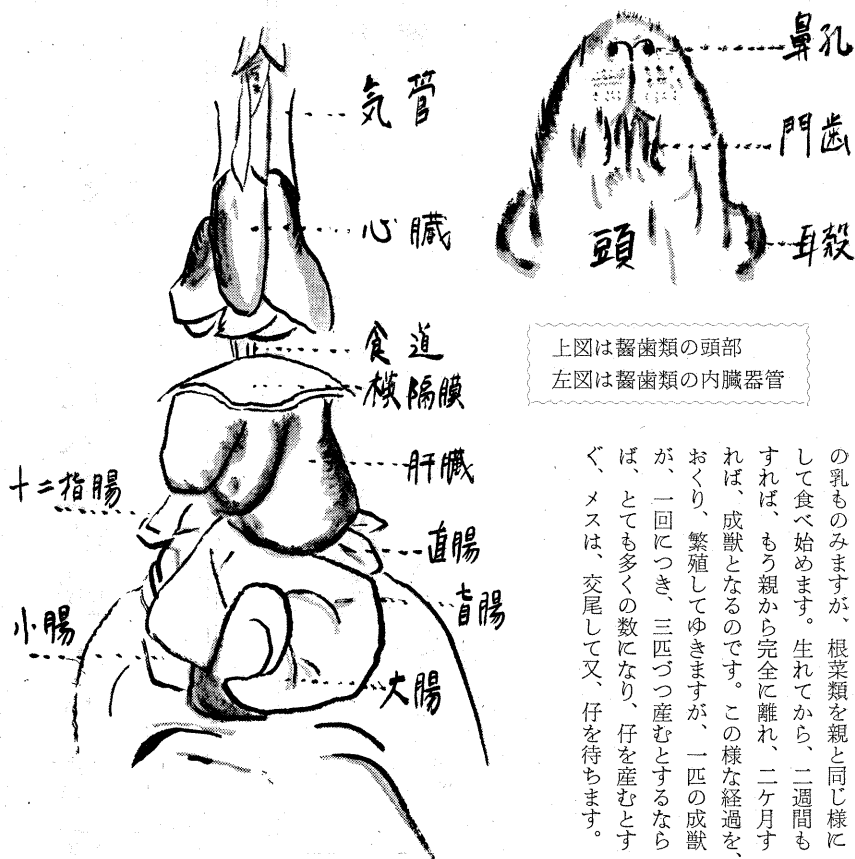
飼料―ネズミ、ウサギと同じ齧歯類です。ので、豆腐粕、野草、(豆科・禾本科植物等)穀類、等、その様なものなら、何でも、食べます。

飼育箱―タテ、ヨコ、五十センチ、高さ三十センチ程の、木の箱で、一面を金網にすれば住み良く、湿気を嫌うので、わらをひいてやります。学校の場合、教室で飼っているの、わらの持ち運びが不便であり、又、夏でしたので、そんなに保温に重視しなくとも思い、紙をひいてやっています。しかし、この動物は、寒さに弱い、箱をもっと完全性のあるものに、し

なければ、と思っています。

二、繁殖について

モルモットは、成長の速い動物で、生れて二カ月で、成獣となり、メスが発情すると、動作が、活発になり、鳴き声が、キューキューから、ギューギューに変わります。この時にメスを、オスの箱の中に、入れて交尾させます。しかし、この場合、オスをメスの箱の中に入れると、なかなか交尾しないそうです。二、三日、他のものが入らぬ様に、オス・メス、一緒にしておきます。二、三日経ったなら、交尾したものと、オスは、別にして、メスを巣箱に入れておきます。交尾してから、六十日間、で仔を産みます。仔の数は、約三―四匹、大きさは約五センチ位全体の体には毛が生えています。(ウサギ、ハツカネズミは、毛が生えておらず、赤い皮だけです)。そして目が見えるようになっていきます。生まれて、約一時間して、足が立ち、歩き始めます。その時歩けないものは、まもなく死んでしまいます。又、四匹位生まれた場合、親の乳首の数がたりなく、死んでしまうものも、あるそうです。一日経って、親



上図は齧歯類の頭部

左図は齧歯類の内臓器管

の乳ものみですが、根菜類を親と同じ様にして食べ始めます。生れてから、二週間もすれば、もう親から完全に離れ、二ヶ月すれば、成獣となるのです。この様な経過をおくり、繁殖してゆきますが、一匹の成獣が、一回につき、三匹づつ産むとするならば、とても多くの数になり、仔を産むとすぐ、メスは、交尾して又、仔を待ちます。

以上が、モルモットの、おおよその、生態です。なぜ、モルモットが、医学上、動物実験に利用されるか、体の構造面から、考えてみましたが、上図の如く、モルモットは、哺乳類ですので、人類の、内臓器管に似ています。(図ろは、齧歯類の特徴です)又、先にお話した如く、繁殖率が、高いので—という事も、理由の一つではないでしょうか。実験内容としては、「モルモット解剖」「哺乳類における血液検査」「ビタミン—栄養の、実験」「ノメンデルの、遺伝法則—体の毛なみ、色の変化により、—」等と、沢山の実験に、利用されています。私達は、メンデルの法則を。見ようと、又別に、白と黒のぶちを、手に入れましたが……。

この様な目的ではなしに、おとなしくて、かわい、この動物を、飼って見ませんか、現在、私達のクラブでは飼いはじめて、一年と経っていませんので、以上の様な、大まかな事のみしか、わかりませんが、この先も続けて、行きたいと思っています。

(一九六〇年九月)



生徒会活動・ハイライト

生徒会・クラブの変遷

稿 寄

井草生徒会創立前後

鈴木 貞三

(初代生徒部長)

生徒会の会則は昭和二十四年四月一日から発効し、その後何回かの改正を経て現在に至っている。PTAとか生徒会は何れも戦後の誕生である。大体学制そのものが敗戦後大きく変っていったのだから、父兄会や校友会も脱皮するのが当然であった。

井草が発足した年の十二月には太平洋戦争が始まり、その翌年四月に東京初空襲の米機が校舎の屋上をかすめていった。お下げや

おかつぱの可愛い高女一・二年生は真剣な態度で授業を受けていたが、放課後は喜々としてスポーツを楽しみ、先生たちも一緒にこれに加わっていた。これが校友会というものだったかも知れぬが、十九年二月ぼくが北支へ出発する時には、すでに学校報国団といういかめしい存在になっていた。戦争末期、上級生たちが工場動員に駆り立てられたことは、過ぎ去った今日ある意味では得がたい人生経

験として生徒たちに受けとられていよう。復員して二十一年二月から再び教壇に立った時、二回生が四年で最上級だった。ずい分苦勞を味わったろうに彼女らは元気に満ちており、先生方も民主化促進の新教育に張切っていた。

四月から訓育係(要するに生徒係)になり、永島、辻などの先生方と指導と自治の育成に当ることになり、生徒との接触が多くなった。此の頃は学級自治会と学校自治会が、学期の始め。終りに、また必要に応じては随時開かれ、みんな仲々活潑に討論を展開していた。司会は選挙による級長が当り、こんな事も戦前では考えられないことであった。

「学習の態度」「クラス会のあり方」「私たちの見た今の社会」「これからの女性はどうあるべきか」「男女共学」(当時関西では共学

が行われており、来るべき共学を予想してこの問題がとりあげられた」等々が一年から五年まで討論されていた。報国団は解体して校友会が復活し、概して運動部より学芸部が盛んであった。特に演劇、音楽、歴史などにはすぐれた連中が揃っていた。石神井中学と合同でゴーストの「検察官」を大隈講堂で上演し、新聞に送鑑がれたのも二十二年ごろである。二十一、二年はまだまだ食糧事情が悪くて、校庭にいもを植え、職員、生徒に配給していた位だったのに、若いエネルギーはたくましかった。

こうした生徒の自治活動は、占領軍の民主化促進とは直接関係はなく、人間性の自然な発展として、教室の内外で育っていた。

高女から高校に切替えられる二十四年四月を目途に二十三年頃から生徒会創立のため規約づくりが始まった。委員たちは放課後何十回も集まって文案を練り次第にまとまっていたが、列席している顧問の方が些か参る程の熱心さであった。草案はやがて各級自治会で検討され、全校自治会の表決を経て成案となり、校長を会長としていた校友会は高三の大矢美知子を初代会長とする生徒会に発展した。二十四・五年の会長、副会長には、渡部

元持、千葉、原谷、井上、二木等々まことに才女が群をなしていた。彼女たちは各委員会と緊密な連絡をとって活動し、生徒会の基礎をつくり上げた。またクラブも次第に増えて、英語、演劇、音楽、映画、山岳、社会、手芸、書道、生物、読書、文芸、美術、弁論、理科、歴史、独逸語、送球、卓球、ダンス、庭球、排球、野球、陸上、籠球、ソフトと多彩なものになった。

二十五年年度から男女共学の高校一年生の入学を迎えるに当り、「井草の校内事情はどうなっているのでしょうか」という新入生便覧を中央委員会が苦心して作製したのも忘れ難い思い出の一つである。当時、ホームルーム、生徒委員会、中央委員会、週番委員会、図書委員会、保健委員会等が学校全体の有機体としての発展のために何れも熱心に討論しまた実践活動を行ったことは高く評価されて良いと思う。

この年はまた十周年記念に当り、展覧会、芸術祭、体育祭、研究発表などが生徒各自の計画、総合を主体としてくりひろげられ、今日の井草祭の原型をつくりあげた。当時まだ講堂がなかったため、早大で行う予定の芸術祭だけがレッド・パーシ反対の激化のため延

期されたのも、その頃を知る人々には感無量であろう。

文芸部創刊の「めぐさ」が有数な学校新聞に発展したこと、度重なる音楽部のコンクール入賞、ハンドボールの遠征など生徒会活動の思い出は尽きない。

さてこの辺で初期の活動を要約すると、先ず規約作製とその実施による生徒会の自主的精神の養成——自発学習の向上と環境の美化、他校生徒会との連絡、全員クラブ加入制度の確立によりクラブ活動の成果を文化祭、体育祭に集中的に発揚しようとしたことなどになろう。

男女共学により男子会長が生れ、さらに同数共学の実施によって、生徒会は伝統を受けつぎながらも多くの変容を来している。顧問も岡垣、生野、大野、大隅、青山の諸先生へとバトン・タッチされた。

今日の生徒会活動は隆盛のうちにも多くの問題を内蔵していると思うが、そのうちの多くは実は創設当時から存在していたのである。それだけに生徒諸君は困難に屈せず、生徒会の改善と発展にそれ／＼努力を傾けて、名実ともに「世界の前に井草あり」を具現して欲しいものである。

敢えて自己批判を

全日制
生徒会長

五島真人

オギャー!と世界の前に名乗りを上げて、早や二十年。二十年という、まだ我々が、至極静かであった頃から活動していたわけだ。この井草の赤ん坊時代の写真を見た事があるが、二十年経った今は随分変わっている。校庭の中に大威張りで畑が横たわっている写真思い出す。全く大きくなったものだ。

この井草は、十周年、そして二十周年と二回目の記念すべき時を迎えた。この記念すべき時に会う事ができたのは、本当に嬉しい。しかし、あまり喜んでばかりいてはならないと思う。というのは、十年目、二十年目という年は、永い間活動をして行く者にとって、一つの段階から、もう一つの新しい段階へと、歩を進める、重要な転換期であると思う。

それでは、二十周年に当る今年、この井草にとって、転換しなければならぬ問題があるだろうか。それは、我々のすぐそばにあ

る。非常に幼稚な、そして非常に難解な、そして生徒会でも、その解決方法をスローガンとした事のある問題。"井草の諸問題"と総称されるものだ。この事については、言うまでもないが、代返、エスケープ、早めし、たばこ、服装……と、学校生活に関するものだ。これらはすべて学校生活を乱すのは勿論の事。私生活までも、だらしのないものとし、しいては、自分自身をもだめにしてしまふと思う。行為そのものは、大した事ではないかも知れないが、非常に危険な物を引き起す誘因となるのではないだろうか。

では、何故この様な事をするのであろう。

その理由は、次の二つに大別する事ができるだろう。(その他に、重要な理由が有るかも知れないが、思いつかない)その一つは、非常に幼稚なもので、その行為をする事によって伴って来る、スリルを味おうとするもの。もう一つは、必要性に迫られて行ふもの(行

為そのものの、善悪は別として)である。これらについては、種々な見方があるだろう。前者の場合、やる事自体悪いのだと、解っていないながら、そのスリルに魅せられて行ふ。とても可愛らしい動機だ。しかし、これは非常に危険だと思う。この様な考えは、スリルを味わう為なら、人殺しでも……という事までも発展しないとも限らない。又、後者の場合、どうしてもやらなければならない、という境遇(?)そのものに非常に大きな問題がある様に思える。

それでは、これらを解決するには、どうしたらよいだろうか。一番手取り早い方法は、学校の方で非常に大きな力で抑えつけることだ。しかし、これでは、真の教育の道から外れてしまふだろうし、根本的に解決された事にはならないだろう。では、どうすればよいのか。それは生徒一人一人の自覚を待つことだ。先生、父兄、生徒、この三者が話し合いを重ね重ねして行って、しだいに事の重大さが解り、自分達の行動を反省し、改める事ができ、そこで初めてこの問題が、根本から解決されたと言えるのではないだろうか。この様な方法は消極的である、生ぬるい、と言えられもしれない。しかし、この方法は考え様

によつては、一番消極的でありながら、一番積極的な方法ではないだろうか。物事を解決するに当つては、現在にポイントを置くよりは、現在より先を、つまり将来を重点として考えるべきではないだろうか。

井草は、この二十年間、非常に大きな発展をして来たことだろう。しかし、まだまだ、“世界の前に我等あり”と、声を高くして言える程ではないと思う。確かに、新校舎も建ち、図書館もでき、玄関等も整美され、グラウンドも整備された。しかし、それ等は、全て外面的なものではないだろうか。それに比較して見ると、内面はまだだだと思ふ。内外

面がピッタリと、一致してこそ、初めて“世界の前に我等あり”と、声高らかに、誇る事ができるのではないだろうか。

この記念すべき、生徒会誌創刊号への言葉として、私の文は不適當かもしれない。しかし、人生において、自分を甘やかしたものは、必ず落第してしまふだろう。そして自分を厳しく批判する者程、自己を発展の道へと近づける事が、できるのではないだろうか。その為にも、この二十周年に際して、敢えて自己批判をするべきであらう。この記念すべき年を単なるお祭りとして忘れ去らないためにも……。

稿 寄

生徒会活動の印象

定時制
生徒会長

江 崎 公 雄

私がこの学校がこの学校入学以来行なってきた生徒会活動やそこから受けた印象等の主な点を書いてみます。昭和三十三年に入学したその三月後の七月に我々の役員選挙が行なわれました。定時制の場合は任期一年で八月から翌年の七月になっております。その頃

の私はそのような活動やまた他のいろいろな目的をもったサークルに入つて思ひきりその方面の事を学んでみたいと思つていたのでさっそく協議会委員に立候補してわけもわからず生徒会活動にとびこんだしいでした、協議会とは第三学区定時制協議会をさしこの会

議の発足した理由は、もともと学校間の生徒同志で行なつてきた小さな行事ががだんだんと盛んになりついに主事会にも反響を及ぼし去る三十三年四月に正式に第三学区定時制協議会として同学区内の不参加者をださずその実をむすんだのでした。主な活動としては春に体育祭、秋に文化祭を行なう事が慣例として上げられます、体育祭は球技大会と陸上競技大会があり陸上等は武蔵野競技場を借りきつて行ないます。

文化祭は三区区内の学校の講堂を借りて行なう事になっております。演劇等は関東地区の大会で一位二位ぐらいに入選する作品もとびだすくらいでなかなか見応えがあります。今年もそろそろシーズンですが全日制のみなさんにも是非観劇してもらいたいと思つております。定時制ならではの作品もあり、我々の精神的苦しみまたそのよこび等が良くそこから読みとれるのです。このような行事をもてるのも我々の努力のたまものとして少なからず誇りとしております。さてその頃の校内生徒会の活動はどうであつたかと申しますと不活発でもなく又その逆でもなくいたつて平凡にその一年を過ぎ去つたような感じでした、ここで我々の年間行事を書いてみた

いと思います、まず六月に三学区の体育祭に参加し七月に校内体育祭を十日間にわたって開き九月十月十一月にかけて文化祭弁論大会観月会を開き一二三月に予算会議を行ない来年度の予算編成を行ない三月の卒業式に歓送芸能祭を開催して、そしてその一年が終るわけです。このような形式が完成したのもだいぶ前なので我々はそれを引継げば良いわけです。我々のその他の活動としては政治研究とか思想研究等が上げられますがしかし政治問題等はホームルームの時などを利用して議論されますが具体化される問題ではなかったようです。その理由は我々は会社においてそのような闘争をしその意志を表明しているからそれほどまでに熱意を出す必要性を感じないのだと思います。

翌年の三四年度になり私は副会長になりました。この時は前年度の情性のような気持ちもします。その時の生徒会のプロセスをざっと書いて見たいと思います、この時の生徒会運営上にとくに定時制にはけっしてあってはならないような事態が発生したのです。生徒会の中でも最初の地位をしめる機関の中央委員会の事に二つの対立する派閥ができてきたのです。これも熱心さの余りに成立したので

はなく、互いに社会性が欠けてハーモニーがなくそしてその現実を深く考えてみなかったこれが大きな問題であったように思われます。具体的にその例を上げてみる事にします。中央委員会は校内あらゆる問題を解決するための議論に終始ししかもそこには人間性の問題が多分に含まれたいたので結局は結論が出なかったのです。又出たとしてもそれが実行に移す人が出なくて机上の論に終ってしまつたのでした。この様な状態で何かの行事をしても結果は我々の考え通りには進まず参加者が校内の半分だとかで盛り上らずますます我々も意気消沈してしまつたです。この問題はただ単に中央委員会の中だけではなささうでした。一般の役員でない人達はその頃は生徒会活動についてどんな考え方をしていたかは私はあまり詳しくは解りません。しかし以前よりは関心が薄くなつていたのは事実でした。私も前に話した問題を解決するために努力はしましたがそこまではまだ成長が足りなく私の力は及びませんでした、就任後三カ月目に早くも総辞職の案が出されそしてすぐに生徒総会が開かれました。我々の辞任理由は書面の都合で長くなるので省きます。結局は辞職は成らず新規まきなおしとなりまし

た。しかしこの総会はむだではなかったのです。役員以外の人も中央委員会の状態を認識してこれに対して考え方を新たにし、又視野の狭かつた議論の中で終始していた役員も自分を反省する良い機会でありました、議題を事務的に並べそしてそれを機械的に処理して行くこれであつたらどんな有能な人が運営しても決してうまく行くものではないと思います、強い人間的結合として強く巾の広い人間性社会性がかつとも重要なポイントになるのではないのでしょうか。これはあらゆる問題を解決して行く上にも必要なものではないでしょうか。

私はすぐこの後に体の具合が悪くなつてしまつたので直接に中央委員会の事には関係しませんでした。がその後の様子はだんだんと以前とは変り役員に関係しなくとも感ずるくらい活発になつてきたようでした。

最後まで書く事が出来ないのは残念ですが紙面の都合上ここで終りにします。

お願い 本誌を御希望なさる方は、お手数でも全日制大野先生まで申し込んで下さい。実費で領布致します。

(係)



クラブ活動の回顧と展望

〔運動部〕回顧と展望

井草の運動部の歴史は、やはり昭和二十六年の共学実施が、大きな転回点であった。

わが校が女子校であった戦後まもなく、教育大から赴任された加藤先生がいちちはやくハンドボール部を創設、精力的なご指導によってたちまち団体に出場する実力をたくわえ、ハンドボール部の伝統は現在まで女子の運動部活動のバックボーンをなしている。

二十六年、共学制の実施以来、男子の運動部を急速に育てあげることが、学校全体の大きな課題となった。六カ年計画ということで出発した男子運動部育成案は、六年後、サッカー部の団体出場で見事に実をむすんだ、サッカー部の堂々たる発展とともに、野球部の硬式へのきりかえ、バレー部の創立などは、画期的な事件であった。

井草の運動部の当面の問題としては、伝統的なものをのびし、合理的な練習によるスタ

ミナの育成、ハードトレーニングの気風の食成にあるといわれる。井草の欠点は、体力のたりないこと、トレーニングによわいこと、ファイトがないこと、が各部に共通しているという。

このほか、選手中心のこれらの部活動のほか、もっとひろい、レクリエーション的なスポーツ活動も、もっと考えられてよいだろう。バドミントン、卓球のようなものももっと広範囲にたのしんでやられるべきだろう。

東京オリンピックを目前にひかえたわが運動部は、新しい活気にみちて発展している。ローマオリンピックに刺げきされた体操部の活動など、その好例である。

◇野球部

野球部の前身は、昭和二十五年、男女共学がはじまると同時に発足した軟式野球部である。当初部員は約二十名、勝又投手をはじめ、かなり素質のある選手をあつめ、発足早

々としては実力があり、昭和二十七年には都のベスト・エイトにのこったこともあるという。

現在の野球部、つまり硬式の野球部がはじまったのは、わずか三年前、昭和三十三年三月のことで、以来三年六カ月のみじかい歴史の中にも、わが野球部はまことに苦しい創造の努力を味わねばならなかった。

当時、軟式を硬式にきりかえることに対しては、校内でも、「危険だ」、「金がかかる」、「練習場がない」などという反対意見がつよく、とくに問題になったのは、きりかえ期間中、対外試合に出場できず、事実上、対外活動は当分中止せざるをえないということであった。このため野球部員は対外活動の中止を覚悟で硬式野球部にふみきったのである。この硬式発足以来の成績は皆さんの知っているとおりの成績である。誠に残念であるが甲子園出場、東京予選に於いてただの一回戦も勝てないのが現状であるが、今はみんな一回戦

必勝を期してもう練習をおこなっている。まだ硬式にふみきって三年、現在のままでは東京予選の勝利はおぼつかない。練習場のこと、練習時間のこと予算のこと、人数のこと色々私達にはなげかわしい事がそこいらにちらかっているのである。がしかし我々は、この苦しい現状を突破して前進しこれまた前進と前進のみをつづけなければならない。実に苦しい事であろうこの苦難に勝つことこそ我々野球部にひらける勝利の道なのである。せつかく硬式にふみきり、以来努力をつづけて下さった上級生の方々にも我々は恩返しをせねばならない。

我々はこの夏合宿をおこなった。名門土浦一高との合同合宿である、ずいぶんきつかった。しかし土浦一高の選手は弱音をはかなかつた。それだけ強いんだ。それだけに耐える体力と精神力をもっているのである、我々もががんばったしずいぶん勉強にもなったし、体力もできる見通しがついた。同じ人間でありながら何故あのように違うか、いやいや同じなのである。最後の精神力が違うのだ。この合宿で精神力も出来たし、これからはずいぶん期待している。近代ベースボールのもっとも重要な要素であるチームワークをも完成

しつつある。まだまだこれからの野球部であり、伝統のない野球部ではあるが、自分達はその伝統を作り発展させる責任をもっている我々はその事をほこりにもちいっそうの発展を心がけている。長い目でみてほしい、野球部がみなさんをお願いするのはこの事だ。あの今年の神宮球場での対中央商業のむざんな敗北を心にきざみこれを飛躍のふみだいとしてこれからの発展を期し練習をつづけているのである。

◆山岳部

わが山岳部、四年前の昭和三十一年、当時の地理部から写真部とわかれて創立されました。当時の井草には、本山、中野、岩坂、森、西村、杉山、片山、斉藤、築山、松本、北沢などの先輩、また女子でも林、仁平両先輩など、「山につかれた」一年生が集団的に入ってきたことが機縁となり、林先生と相談して、独立の部をつくらう、ということになったものです。

はじめは

「奥多摩、奥秩父のマスター」

という目標をつくり、春夏秋冬、山行にはげみました。

昨年より部員の充実をはかり、今年も心身ともに優秀な一年生の入部があり、これからの活躍が期待されます。

世間では高校、大学、一般を問わず山岳部のあり方についてよく議論され、わが校の先生方の間でも、煙たがっていらっしゃる方がなきにしもあらずという状態です。しかし私たちは、部の方針というものをつくり、それによって行動しております。けれども、歴史があさく、いろいろの面で、学校はじめ生徒の方々にめいわくと心配をおかけしたことについては深くおわび申し上げます。

さて私たち山岳部の方針というのは、高校生活において、うるおいと、いこいと、楽しい思い出をつくってもらうということを前提条件とし、

一、忍耐力の養成

一、心身のたんれん

一、東京近郊の山を踏査し、それに精通すること

一、自然美にたしむ

一、団体登山で一、二、三年の親睦とガイドシップを養う。

一、他人との協調をはかる

一、計画ある行動をする

一、縦走を主体とし、体力の増強につとめる。

以上、八つの目標をかがけています。ですから、いくら個人技術がすぐれていても、協調精神のないやつは、入部資格はありません。

それでは、部の発足以来の実績をあげてみましょう。

白根三山。昭和年夏と秋二回。

ほうおう三山。昭和34年九月。

赤石岳。荒川岳。昭和35年。

などの南アルプス諸峰のほか奥秩父の全山縦走などの夏山のほか、参加人数は少なかったが、昨年から冬山をはじめてみました。

これらの登山は、専門的、技術的にとくべつの人でなければできないようなものでなく、だれでも、たのしくのぼれるというやり方でやっています。そのため、回を追うことに参加者がふえ、井草にも「山岳ファン」は激増の状態にあります。

こういう状態を反映して、山岳部ではさいさん、部外にひろくよびかける「募集登山」というのをはじめて、たいへんな好評をよんでいます。今年は九月中旬、扇山へまいりました。部外からも二十名ちかくの参加者がきました。

おわりにのぞみ、ここまで山岳部をつくり、そだてて下さった顧問、先ばいの方々に深く感謝し、これからの発展に努力することを持ちます。

◇蹴球部

二十七年五月、当時二Aの諸君が中心となりチームを結成したが、グラウンドは自由に使える各方面からは暴れん坊一家のエネルギーはけ口と注目され、ボール、ユニホーム迄自費で揃える等の悪条件であった。

二八年度を迎え三年生の室原、藤田、新井、水沼、杉浦、福地、田中、遠矢、木村、国府田、本橋の諸君がチームの中心で正式に高体連に加盟し、初めて公式に出場したが、京京大会は準決勝、国体予選は準々決勝にまで進出各校に井草高校強しの声が起り輝ける伝統の第一歩が踏み出された。

以下各年度の成績は

二九年度三年生は大矢君一人二年生大森、佐藤、松本、山内、清本、中上、富田、小林本橋の諸君

新人戦

準々決勝

国体予選

三回戦

全国大会予戦

三回戦

三十年代、三年生は、大森、佐藤、松本、清本、山内、中上、富田、小林、本橋、二年生は登、藤田の諸君

新人戦

準決勝

国体予選

準決勝

全国大会予選

準決勝

三年の清本君が東京都選抜選手となる。

三十一年度部長松島先生の御指導の下に、徐々に力を貯わえつつあったサッカー部は初めて決勝進出の常連となり、新人戦に優勝した。

三年生は藤田、登、二年生は早坂、相沢、横沢、斉田、沢地、片山、加藤、山崎、田村の諸君

新人戦

優勝

国体予選

二位

全国大会予選

準々決勝

三十二年度三年生、加藤、片山、沢地、早坂、山崎、田村、横沢、斉田、二年生、吉田、山口、笠島、竹本、の諸君に一年生の白崎君を加え、チーム結成以来最強のメンバーを揃えた。

新人戦は決勝で私立城北高校に破れたが、地区リーグ戦は優勝して、東京大会に進出、無敗の成績で国体予選を迎えた。

先づ北豊島、武蔵両校を軽く抑へ、宿敵私立城北高校を延長戦で2-0、教大附属高校を1-0で破り優勝への道を開いたわけである。この数年城北、教大附属には苦杯を喫してゐただけに全試合無失点で勝抜いて来た事とあわせて喜びも又一しほであつた。準決勝、江戸川を決勝工大附属高を破って宿願の都代表となる。それにつけても真田校長先生が日参して応援して下さつたことも嬉しい思い出の一つである。九月に入り千葉市で行なわれた関東予選は苦戦の連続であつたが辛うじて代表と選ばれることができた。

待望の本大会は十月に藤枝市で行われ、第一戦に勝てば次は天皇試合との事であり、京都代表山城高校との対戦は両軍共譲らず、延長に入り一時間半の死闘をくりひろげ、最後には一寸走つては足がつり、一蹴りしては倒れるという珍プレーが出たが、余り熱戦に観衆は拍手してこれをたたえたと云う国体ならではの風景がそこに見られた。試合は0-10の儘で遂に引分け抽籤敗に涙を飲んだけれど力一杯戦つて悔はなかつた。国体初参加の思ひ出は多々あるけれども町ぐるみの歓迎に松島先生さへも挨拶をされるのに固くなつておられた事も書落すことはできない。

十一月からの全国大会予選を連続優勝をねらつたが準決勝で破れ全公式戦を終了した。

三十三年度顧問小倉先生三年生、吉田、山口、笠島、竹本の四君前年に比べやや駒不足であつたがシーズン後半は立直り

国体予選 準決勝

全国大会予選 準決勝に進出した

三十四年度三年生は白崎、吉田、村上、山本、青木、山下、岡田、二年生は、丸山、片山、宮坂、関根、崑、篠原、の諸君とメンバーも揃ひ期待されたが、最高の成績は

国体予選 準決勝進出であつた。

三十五年度新たに若くてハンサムな小島先生を顧問に加へ三年生、丸山、片山、宮坂、関根、崑、二年生は島崎(信)、藤原、大岩、久田、笛木、野崎、佐藤、島崎(昂)、岡安の諸君で、新人戦を戦ひ、私立城北、帝京両校を破つて優勝し、続くリーグ戦は一年生の上原、石塚、藤井、小暮、杉本ら有望新人を加へて戦ひ完全優勝をとげ上々の滑り出しであつた。国体予選、関東大会予選とも夢よう一度と期待されたものの共に準々決勝で破れ望みは絶たれた。チームには悲痛な空気がみなぎつたが、新学期を迎へ島崎(信)新主将以下、全国大会の予選を目指し、猛練習を行つ

てゐる事を御報告しておきたい。

◇柔道部

我が柔道部の歴史は非常に浅い。簡単に述べてしまつと二、三行で終るので、考えながら書いてみた。

そもそも柔道部の前身は、レスリング部だそうである。今はなつかしい、旧南校舎の東端に、道場とも部屋とも見分けのつかぬ三十三数量の部屋があつた。以前はレッキとしたレスリング道場である。そこで先輩達とくくみ合つていたわけである。苦勞したそうだ。先生にうかがうと、その時ユニホーム姿のいかめしい面々の写真が残っているそうだ。何せ歴史が浅いので先輩達の活躍はわからない。それが極く最近(といつても二、三年前であるが)柔道レスリング部になり、實質的にはレスリングはやらなくなった。そして現在の柔道部に至つたわけである。

一年に必ず一回はやる石神井親善戦を始めとし、一年に十回程度「公式戦」「対校試合」を行なう。二、三年前に腕の立つ人がいた話を聞いているが、現在勝率は五-六割といったところであろうか。部歴が浅い(?)せいであろうか残念ながら余り強くはない。

部歴はこんなころだろうか。

現在の状態は、余りかんばしくないが、部員総数二十一名。他校に比べて、その貧弱さがめだつ。黒帯が五名。他校に比べると質は良い方だと思ふ。(対戦成績から)

現在の一年生は御承知の通り体格が良い。近々黒帯が生まれるだろう。今年にはいり、試合数が減ったのが一つの欠点と言えるだろう。若い青春のエネルギーを発散させ、肉体の向上を計るため努力している。

抱負は数えきれない程ある。その中の幾つかをとりあげてみよう。

まず最初に語ることは、クラブの近代化を進めることである。器具を使った練習をやってみよう。現在のハードトレーニング主義の欠点を補なえるだろう。

第二には衛生的に練習できるようにしたい。部室がないので(近々もらえらうしいが)柔道着等の保管がゆきとどかない。自然あつちへ散らかし、こつちへ散らかし、という状態になり、不潔きわまりない。

第三には、部員を多くすること。PRをして部員をふやしたい。現在の状態では試合もやれないのでこれからはなるべく沢山はいつてもらう。つまり生徒への理解を求める。

第四に、強くならずに弱くなれということ。つまり、なまはんにかに覚えるよりは、弱いままでいいということ。むやみやたらに他人にいばるなということである。まとまりのない甚だ粗末な文章であるが記念誌に載せていただく。

◆ 排 球 部

現在は男子チームと女子チームがあるが、昔は女子チームだけであつた。男子チームができたのは、昭和三十二年四月であつた。その項は男子用の用具等勿論無く、すべて女子の用具を借りて練習をした。

こうして迎えた初の対外試合、相手チームは石神井高校。なにぶんにも初めての試合見事井草0-2石神井、で完敗した。しかし我々もこのままでいたわけではなく、昭和三十三年に入つて、六月に行われた全日本選手権東京都予選では一回戦不戦勝、二回戦井草2-0上野、三回戦井草2-0海城、四回戦井草0-2墨田川と四回戦まで駒を進め、仲々良い成績をおさめた。その頃の女子チームは大変強く、十二月には一般女子北海道代表との合同練習を行い、同じ月に行われた新人戦、リーグ内で井草校は千歳カ丘、田園調

府、化学工業、共立、墨田川をいづれも破り、見事優勝を成しとげた。

さて、それから三十四年前はなんまでの男子チームはあまりパツとしないままに、三年生が引退してしまふ。新しく二年と一年でチームを結成再出発した。女子チームも三十四年度春季大会において三回戦まで進んだが、その後の春季リーグ戦、全日本選手権都予選はあまりかんばしくない成績に終つた。新しくなった男子チームは夏休みに入つて七月二十二日から二十八日まで、男子部発足以来初めて学校を出て下諏訪で合宿を行った。女子はその後すぐ学校で行い、ともに技術の向上を計つた。男子チームは、猛練習の結果、日毎に強くなつて行き。夏休み中の練習試合は八戦八勝した。九月の国体都予選では三回戦で敗退したが、その後チーム内のポジション変えを行い、気分を一新して、十一月に行なわれた新人戦にのぞんだ。新人戦では一回戦対国立2-0二回戦対大森2-0三回戦対東京2-0で順調に勝ち進んだが、四回戦で惜しくも駒大附属に敗れた。しかし新チーム結成以来初めて四回戦へ進出、気を良くしたナインは、練習試合ではあるが都立校随一の強豪五商を接戦の末破つた。女子チームも合宿以

来猛練習を重ね、十一月に行なわれた新入戦リーグ内で対立川2-1、対江北2-1、対墨葉2-0、対順応2-0と四勝を上げ前年に続き仲々良い成績をおさめた。さて昭和十五年に入って、関東大会出場を目標にした男子チームは冬の間苦しい練習を続けた。

そして五月、待望の関東大会都予選が始まった。一回戦不戦勝二回戦三回戦と順調に勝ち進み四回戦に駒を進めた。四回戦で都立一商と当り一セット目軽くとったが二セット目疲れが出たのか取れるセットを失い、三セット目はそのままずるすると二十一点取られ負けてしまい目標を達成することはできなかった。ここで三年生はいちおう引退し、新しくチームを作り再出発した。がここまで四回戦まで出場することここに書かなかった分までいれて四回、どうしても五回戦に進むことが出来なかった。

さて女子チームは春のリーグ戦あまり調子が良くなかったが、区民大会において宿敵富士見商を準決勝で敗り、続く決勝も四商を破って見事優勝、男子チームに負けずおとらずの成績をあげた。女子チームも又三年生の引退によって新しくチームを作りなお次の大会めがけて再出発した。

◇ ハンドボール部

私達井草ハンドボール部の歴史は非常に古くこの学校が第十八高女といわれていた時代の昭和二十三年頃からある。その頃の体育の授業はハンドボールが主な教材で、他の運動の道具は殆んどなくともハンドのボールは山ほどあった。体育の時間中に上手な人は通称「カトラ」こと加藤先生(保体育科)に目をつけられ、強制的にクラブに入れられた人もいたそうだ。

昭和二十四年から二十七年頃の井草は黒いユニフォームを着て別府まで遠征に行き勝星をあげていったので「東京のカラス」と知れ渡っていた。加藤先生が他校に移り現在お世話になっている天野先生が移ってこられた。昭和二十五年から二十九年頃までは井草にも男子のハンドボール部があり東京でも強かったが、サッカー・野球などが次々とできてコートや他の色々な関係もあり、解散してしまっ

た。顧問が天野先生に代った当時は男子先輩や教育大ハンドボール部の人がコーチとして来ていたが長続きしなかった。そのような時に現在のコーチの時田氏が先輩の知り合いで練

習を見にくるようになった。今までのコートと違い、気がやさしく、タフで、ハンドの経験を充分ありコーチとして申し分のない良い人である。

昭和三十一年に、今までの十一人制から七人制に変わり、コートもサッカーとの共用から現在の様になった。部員、特にキーパーは、今までのゴールと勝手が違い、どんな練習を行ったら良いか大変まごついたそうだ。先輩の話によると、成田で開かれた国体予戦の際井草は出場し、時田氏所属の東京クラブも丁度東京代表として参加していた。男子と女子のコートが離れていた上、試合時間も重っていたので、試合には来ていただけぬと思い、ファイトを出し切れず、得点差大きく離されていた、ところが、氏の試合が終りユニフォームのまま、試合終了十分前頃にかけて下さったので、とたんにファイトが出て、盛り返して来たが、時間切れで一点差で負けてしまった。色々な思い出があったが、約六年間も引き続き時田氏にコーチとして練習を見ていただき、天野先生にもひとかたならぬお世話になっている。

現在のハンドでは、精神的にも物質的にも先輩と現役とのつながりが非常に強い。これ

がハンドボール部の特徴である家庭的な雰囲気を作り出しているとも言える。

現在ハンドボール部では部員を増強し、再度、国体、インターハイに参加する事を念願し、練習にはげんでいる。

次に井草がこれまで参加した主な試合を述べてみよう。

- | | | |
|-----|-----------|-----|
| 第五回 | 国体（一九五〇） | 別府 |
| 第七回 | 国体（一九五二） | 福島 |
| 第八回 | 国体（一九五三） | 愛媛 |
| 第一回 | 全日本（一九五〇） | 藤井寺 |
| 第四回 | 全日本（一九五三） | 駒沢 |
| 第五回 | 全日本（一九五四） | 藤井寺 |
| 第六回 | 全日本（一九五五） | 駒沢 |

関東大会（連続出場）

- | | | |
|-----|--------|----|
| 第一回 | （一九五五） | 土浦 |
| 第二回 | （一九五六） | 塩山 |
| 第三回 | （一九五七） | 足利 |
| 第四回 | （一九五八） | 前橋 |
| 第五回 | （一九五九） | 藤沢 |
| 第六回 | （一九六〇） | 大宮 |

器械体操部

わが器械体操部の歴史は、昭和二十九年の体操同好会の発足をもって始まる。当時は器具は、跳箱とマット一枚という旧式然としたもので、鉄棒も規定の高さにたらず溶接したにすぎなかった。又会員も女生徒の数が多かったが、この時より本校の体育祭において、華々しい活躍の端を発した。そして、翌三十年代より、新たに正式の部となり、男子部員を中心に、次第に本来の器械体操部としての性格を帯びてきたが、マット中心の基礎的な徒手体操であった。しかし一方では、肉体的に健全なる身体を作ると同時に精神的に、練習を通じて部員相互の一致協同という団体精神がつかわれる事を目標としたが、器械体操としての性格上技術的な事が要求されるので部員数は決して多いものではなかった。

三十一年になって、コーチを迎え入れ、又平行棒を購入し、部員数も十六名となり、夏季休暇には、部史始まって以来の校外合宿が山中湖畔のキャンプ場に於てもたれた。この校外合宿に於て一週間にわたる協同生活を通じて、いわゆる同じ釜の飯を食べるという体験によってますますわがクラブは発展した。この様に器械体操部は先輩達の並々ならぬ、激しい訓練と努力によって土台が築かれ

たのであった。

翌三十二年には、立派に、部活動としての目標を器具中心に移し始めるに到り、マット数も四枚を数えるほどになった。そして三十二年、部活動苦節四年目に始めて高体連新入大会に四名の初陣を送った。しかし、技術的に他校と差がありすぎた。成績は跳馬に八点台を出し徒手、鉄棒に七点台を出したにすぎなかった。翌三十四年一月、吊環購入に関し、学校との多少の接触もあったが、無事購入し、器具もあと、鞍馬、跳馬を残すのみとなった。そして三十四年度、部予算も部始まって以来の最高額に達し、部員の技術も向上し、運動会に於て活躍した。

そして現在わが部は先輩の築いた土台をもとに活動を行っている。われわれ器械体操を、やる者は、ちょっとした小さな技に対しても限らない愛着と尊さを感じるものである。その技の背後には幾多の先輩の技が重り息づいているのを感じずにはいられない。現在われわれが気軽にやっているような技でも、初めてこの技にいとむ人達にとっては、前人未踏の岩壁にハーケンを打ちこむアルピニストに似た勇氣と熱情と研究心、努力がおりしみなく払われているのに違いない。そして

春の新人大会に跳馬に九点台をはじめ、全員七点以上をマークしたことは、歴史の浅い器械体操部を今日まで高めてくれた先輩達の日頃の努力を感謝している。そしてより向上するように日頃の練習にはげんでいる。

最後に体操部は器具購入には、学校と非常に接触が多かったが部活動発展のために既成のものを充実させる事はもちろんであるが、それと同時に器具の整備が十分でなければならぬ。現在の段階では新人大会のみに参加できず発展を妨げている。部史において器械体操部の目標は単に言葉によって受けつけられているのではなく、先輩と在校生との交流に大きな精神的な絆として受け継がれていると確信している。それは良いにせよ悪いにせよ、器械体操部だけがもつ特性ともいえる。それをいかに下級生が吸収するかは、今後の部史の方向を決定するものだ。

◇ 庭球部

庭球部がコートらしいコートを持ったのは二十八年頃であった。それまでは小石がゴロゴロしていた空地を見つけた他のクラブの邪魔にならぬように、と言っても当時はハンドボール・陸上、ソフト、バレー位が僅かなが

ら活躍していた時代であった。

それでも当時の部員は練習前後の準備整理体操を整然とやりイレギュラに悩まされながら、そして後方数十米も球を追いかけるが熱心に練習したものであった。全く隔世の感が深い。塩田(竹田)知子、土橋杜規は当時の名主将として部誌に残る名選手である。殊に土橋は漸く対外試合に出られる程になり、四商、富士などに出かけ無敗の記録を残している。

杉山校長の時代に運動場の西南隅に二面のコートが設けられた。このコートで活躍したテニスマンは多い。男女共学にもなり、中学校もテニスが盛んになり、そのためレベルは大分上った。二十八年卒の沖村、新谷組、朝倉、清水組(女)、二十九年卒の北沢、見喜、金田、藤田、榎本(小池)木原、三十年卒の東、千脇、北橋、大池、佐藤、高橋、三十一年卒の小池、渡辺組、杉山、関、滝沢、間島、西田、丸山、三十二年卒の大谷、小山、本橋(三七子)、本橋(英子)飯樋、増田組、三十三年卒の小杉、三枝、西塚、前田、水島、宇佐美、泉、の各プレイヤーが印象に残る名選手と言えよう。殊に三十三年卒組はレベ

も事欠かず、楽しいチームであった。

三十四年卒の清水、長田組は現在までの所本校庭球部最高のプレイヤーであろう。都大会で千組に余の中からベスト8に残った戦績がそれを物語っている。清水の確実なストローク、長田のフアイトと機敏な動作、見事なバックショットとスマッシュ、忘れられない好選手である。

三十五年卒では女子組が目立った。鈴樹(Pちゃん)浜田、佐藤、小檜山の四名がそれだ。この組は特に練習熱心で、試合成績も五回戦まで進出して、振わない女子部にあって最高の成績を残した。

現役では三年の田淵、戸辺、古橋、豊田が受験勉強に追われながらも相変らずラケットを握っている。二年一年も多数の部員を擁して新コートで快音を響かせている。中でも岡村、安井組は都大会でシードプレイヤーとしてランクされている。選手層の厚さは三十二年頃に劣らず、男子は特に期待されるが女子は最低であろう。女子選手を六名採すのに苦勞する程で奮起が望まれる。一口に言って根性が足りない。

職員チームも第三学区内の大会が始まって連続三年出場しているが未だ優勝の経験はな

い。常に三位か四位という所で余り進歩は見られない。レギュラは例によって岡垣、谷、大隅、天野、小田島、小倉、昨年から佐渡、本年から新に旧人生野先生が加わっている。女性軍も戸村、斎藤、玉置、古屋と暇を見つけてはテニスを楽しんでおられる。

三年前はOB・OGが白朋会という同好会を作った。忘れ得ぬ井草の庭球のコートで卒業生が第一、第三日曜の午後集って現役以上の賑やかさで白球を追っている。社会人になった人、大学で選手をしている人、浪人をしている人、サラリーガールになった女性たちも時にはハダシでラケットを振っている。西田会長の献身的な努力の成果である。

井草庭球部史の特色、1部員の学業成績が優秀であること。2大きな大会で優勝したことがないこと。3練習に統一が不足していること。4コートの手入れが悪いこと。

◇ 剣道部

剣道部は正式には昭和三十一年に発足したが、事実上は二十八年から同好会活動を行なっていた。当時十名前後の会員が熱心に部への昇格につとめ、坂本、盧両先輩などの努力で実績がみとめられ、三十一年剣道部に昇格

した。

以来、松島先生のご指導によって順調な歩みをつづけ、だいたい常時十五名内外の部員を擁し、都内でもいちおうのレベルに達した部になった。

(松島先生の評価では都内でC級だという)

対外的には毎年定期的に行なわれる対石神井戦(毎年だいたい勝っているが、今年は負けた)のほか、高体連の公式戦にも出場しているが、二、三回戦で敗退している。

すでに相当な実力者を出しているが、とくに現在拡大のレギュラーとなっている安藤(三十二年卒)、津江(三十三年卒)両先輩などが傑出していたといわれる。現在では現役で七名の有段者があり、大きな発展が期待されている。

松島先生の指導方針は「自主的な練習」ということであり、個人指導に重点をおかれるという。ともあれ、堅実な歩みをつづける剣道部は、前途洋々とした希望にみちている。

◇ 籠球部

井草に体育館ができて五、六年になります。私が籠球部におりましたのは、その前後の三年間であります。グラウンドの隅にあった

アウトコートで練習していた部員にとって、体育館建設は非常な喜びでした。

アウトコート時代「デルトマケ」の異名を持っていた籠球部が、コーチ吉川先生を中心に、強いチームワークとはげしい練習で、チーム力を上昇させたのもその頃でした。練習好きの部員であるため、下校時間が過ぎようが、他の部が練習している間は練習をやめず、警備員の方に注意される事度々でした。そのためか、翌春の新人戦には四回戦、次の関東大会予選では三回戦と進みましたが、強豪都立北野高、都立三商等とあたり、どうしても上位に進出できず、くやしがつたものでした。北野とは練習試合含めて四度もやりましたが、いずれも黒星となり残念がる一方では、更にファイトを燃した事でした。

当時、バスケット部の人気はものすごく、これは部員の自慢の種でもありました。試合の時は体育館二階まで満員となり、特に女子から多くの声援がありました。中には部員の背番号から作戦まで知っている人があり、試合の時はあまり周囲でさわぎたてたので、ついに相手がフリースローをできなくなった事さえありました。

十数名の部員でしたが気のすむまで練習

し、多くの支持者のあった籠球部は全く幸せな部であったと思います。

当時の部を部員の一人は、次のように言っていました。

「学校に行くのが楽しかったのも、バスケットの練習があったからであり、試合の時のファイトはあらゆる面に役立ったし、高校時代を楽しく過すことができた。又良友を得ることができた」と。

私は今でも体育館に入ると、高校時代の思い出がそっくり生きているのを感じます。楽しく高校時代を送れた事に関して、常に井草高校、籠球部に感謝しております。

◆陸上競技部

陸上競技は、すべての競技の基本である。走、投、跳、が中心になっている。

わが井草陸上競技部は昭和二十五年、男子一回入学と同時に成立して、当時、五校対抗に、参加した頃は、部員数も多く、多くの種目に優勝したことがある。特に昭和二十七年の大会の時は、男女合せて三十余人参加して女子は優勝、男子も良い成績をおさめ、総合優勝した。その他思い出の多い試合は、数多くあるが、憲法大会、都選手権、新人戦はも

ちろん、インターハイ予選、国体予選などに出場して、良い成績をおさめた。そして現在行っている五校対抗は、井草の提案によって、西武沿線の高校で行われ、益々盛んになってきている。又長距離トリオで有名だった先輩のN・Kさん達、槍、砲丸、短距離で有名な、K・Hさんなどによって築かれた、井草陸上競技部の黄金時代は、ずっと続き、他校からは、「井草の陸上」と恐れられていた。

現在は、女子はあまり活動していず、男子が主に活動している。そして石神井との交換会などで熱戦をくり広げたり、その他多くの試合に出場してまあまあ成績をおさめている。

そして今、全盛期のような活動は、してない。そのため、現井草陸上競技部員は、先輩によって築かれた、黄金時代に帰ろうと、部員一同は、張切っている。そして部員のひたむきな努力が実って、昨年の新人戦においては、一年生で、陸上部のホープであった、H君などは、予選を一位で通過して、国立競技場での決勝まで、進出したが、惜しくも四位で落選した。しかしタイムは、11秒7と、立派な記録であった。まだまだのびるはずであ

るが、体の故障で、去ってしまった。又今年の一年生にも十分な素質を持った、選手が、多数入部しており、再び盛り上り始めている。

そして先輩の時代に恥かしくない第二の黄金時代を作ろうと張切っている。先輩十五・六人の我々に対するあたゝかい気持と、現在の部員の熱心な気持とが、よく合い、立派なOB会ができています。そして夏休みはもちろんのこと、普段でもたびたびコーチとして、N・Kさんなどが、我々を指導してくれている。このような意気込があれば、四年後の東京クリンピックにも大いに希望がもてる。

〔学芸部〕回顧と展望

数年前まで、クラブ活動は週の金曜日放課後と一定されており、その上全員加入制であったので、当日は校舎内外目をみはるほどの活気がみなぎった。まさに百花りよう乱の観があった。文化祭においても各々が研究発表を競い、講堂なり発表教室に聴衆をあふれさせた事もあった。

部にしても、前記された各部以外に多くの部が存在した。英語部、歴史部、独語部、数

研、社研等々……。それぞれ当時は名声と業績を誇る存在であり、単に部内にこもってのささやかな活動に満足できずに、校外にも活潑な活動を試みていた。

現在、名実共に共学校となつて生徒総数の増加、それに伴う男子の急増をみたにも拘らず、学芸部活動が些か低調なことはいなめない。部活動を条件づける設備や諸条件は一層好転している現在、このあたりで面目をあらため、頽勢を一挙に挽回したいと切に願わずにはおれない。

最近の益々に切実化する進学、就職の問題を目前にして部活動を敬遠する傾向は一応別にして、問題は校長先生がしばしば強調される学校全体の知的雰囲気の上を底辺に、生徒各自の意欲的な活動にまつ以外にないのではないか。更には各部を指導される顧問教師のより積極的な参加指導も一層望ましいと思われる。とに角、教場では得がたい個性的な学芸の面白さと深さを生徒、教師一体となつて推進する学芸部クラブ活動は一層強化されねばならない。

最近の安保問題を契機にしてとみに盛り上つた社会科研究会が、その後、マルクス主義研究部・時事研究部・歴史研究部など更に新

分野に意欲的多角的活動を試みようとして、動きなど今後の学芸部の再生の一方向を暗示するものとして期待したい。

◆音楽部

井草高校二十年の音楽部の歴史はまず終戦後に始められた。二十年八月世の中が明るくなって最初に、井頭公園の野外ステージで数校の高女の合同音楽会が持たれ、井草高女でも大野先生の指揮で歌つた。それが皮切りである。二十二年の新校舎落成の際始めて音楽会が持たれた。当時の音楽部メンバー百名余りが大活躍をした。その年の冬、今の芸大寮にいた外語大の生徒の申出により「ハレルヤ」の練習を合同で行つた。前の東響の指揮者の上田仁氏の息子さんが外語大のメンバーの中にいて熱心に指導され、井草の生徒も大分勉強させられた。(それはやがてそのままになってしまった)。二十三年新制高校になって、この年から隣の都立石神井高校の音楽部と一諸に混声合唱を始めた。井草の代表の女子と向うの代表の男子と小使室で先生立合いの下に交渉をした。一方職員会議でも大分もめた結果石神井が井草の方に來て練習をする事、出入口は表玄関は使用しない事、音楽

室近辺以外は歩き廻らない事、等学校側の細い条件の下に許可になり、毎週石神井の男生徒は山田浅蔵先生を先頭に上井草の駅から二列縦隊、毎週井草の音楽室に通つた。こうして井草高校の音楽部の活動は殆ど混声合唱に集中された。メンバーはテストの結果厳選され、男子校の男の先生による練習の厳しさに初めは度胆を抜かれた井草の女子も、本当の音楽というものをその中から勉強していくようになり混声だけで十分であつたし、又その他の事をやる余裕もなかった。二十三年の夏から始めた猛練習の結果、この十月毎日新聞のコンクールに石神井井草混声合唱団として出場、予選通過したが本選で落ちた。又この年から毎年石神井でも井草でもそれ／＼の文化祭を持つようになり、お互いに音楽部は合同で出演しようという形がとられた。二十四年東京都高等学校音楽連盟を結成し石神井も井草も委員校となり活躍した。大隈講堂での第一回演奏会には石神井の高橋君が指揮、井草の牧野さんが伴奏をして始めて生徒だけの手で行われた。この活動は地区別発表会と全都合同演奏会とに分かれ今日もずっと続いている。翌、二十五年は井草創立十周年、十一月五日朝日新聞全国合唱コンクールに出場。

夏休み四十日の間殆ど休みなしの練習が報いられて見事第一位の栄冠をかち得た。高校の部、綜合共に第一位に輝く優勝カップは、大隈講堂で行われた十周年記念文化祭で華々しく披露された。この文化祭にはハイドンの聖譚曲「四季」の中から「春の部」を全曲。合唱は石神井井草合唱団、指揮山田浅蔵先生。独唱ソプラノ近藤か子先生、テナー、佐々金治氏、バス畑中愿氏（二人とも東唱のメンバー）伴奏牧野洋子さん、のメンバーで行い大曲を見事にこなして成果をあげた。この年の暮、N・H・Kに放送を頼まれ出演した。翌二十六年迄両校の混声合唱団は続けられて、三月に解散となったわけであるが、この年もう一度朝日新聞のコンクールに出場、やはり高校の部第一位綜合第二位となり入賞した。この年の練習は苛烈を極め、石神井高の生徒で三年生のものは、コンクール直前に行われた修学旅行に行かないで練習に出たような事もあった。又この冬、東京都高等学校音楽研究会の際「海道東征」を演奏して堀内敬三氏などから高校生の水準以上、芸術の域に達しているとの批評を頂いた。二十六年ともなれば両校とも男女共学となりそれ〴〵に混声合唱を行える態勢となったので、色々批判

の声も出て涙をのんで、石神井井草の合唱団はこゝに解散した。がこのグループの勉強は単に音楽許りでなく男女共学のテストケースとして、実にいゝ勉強であった。皆お互いに自重して行動をたし、本当にいゝ意味での男女交際をした。両校の先生方の細い処迄の配慮もあって、何事もなく他から後指をさされるような事も一つもなく美しい思い出を残して終りにした。そしてその人達の間で育まれた友情は尚その後も、外部で合唱団を続け山葉ホールで発表会を持った事もあるし、既に五組ものカップルがその中から生れて、円満な結婚生活をしている。翌二十七年、井草のみの音楽部になって男子が十二名の少数ではあったけれども、N・H・Kの全国ラジオ合唱コンクールに出場、第三位で入賞した。この年の文化祭はドン・ボスコの講堂で行ったが、少数乍ら男声コーラスも出来るようになって楽しかった。この頃から男子の発声指導面及指揮者として、芸大の方をお願いして音楽部の指導に当って頂いた。井草の男子の絶対数が少かった為に二名という時期があった。女声コーラスに切りかえられた。二十九年の文化祭は新築の体育館兼講堂で行われ、芸大の遠藤先生の指揮で女声コーラスその他

を行った。三十年音楽部は合唱班、ヴァイオリン班、鑑賞班に別れそれ〴〵活潑な活動を始めた。文化祭の他に研究発表会等も計画し、レコードコンサートも行ったりした。ヴァイオリン部は芸大の方に指導を頼み毎週数名が熱心な指導を受けた。この年の送別会に音楽部で始めて創作オペレッタを上演した。三年金子晋一君の作による「山寺の和尚さん」。（金子君は現在芸大作曲科四年で活躍している）。三十一年、男子は鑑賞班には沢山いたが合唱班には二名だったため、女子のみによるオペレッタ「牛若丸」を上演。（青少年オペラ協会の台本による）この時一年だった二名の男子柳原、公森君の切なる希望が実現されて翌三十二年、男子が多くなったので芸大の遠藤先生の指揮により同青年オペラ協会台本の「手古奈」を上演した。一時手古奈の旋律が学校中に流行した程好評だった。この頃方々の高校で、オペラの上演が行われるようになり近くの学校から衣装を借りて来たりテープを参考にききに來たりした。そして地区発表会等でお互同志親密になったので、各校音楽部の間で親善練習会を開く相談がまゝとなり、石神井高校、大泉高校と一諸に「ハレルヤ」の練習をする事になり十二月、講堂

でふるえ乍ら百五十人位の大合唱を行った。

各校とも進学の勉強にわざわざいされて細くなくて来ている合唱班では感ずる事の出来ない感激にひたつた。以後文化祭にはオペレッタをやる事が定石になってしまったようで、乏しい材料で苦心している。就職進学ノイローゼに落付いた活動の出来なくなっている今日、前のような華やかさは見られないが部員一同地味な研究を続けている。アンサンブル班は年を重ねるにしたがい、盛になってモッアルトの夜曲ト長調をヴィオラもセロも加えて四重奏で行ったり、フルートを加えたバッハなども演奏したが、今年はハーブとクラリネットのトリオを予定している。一方男女共学の最初から男子の間に希望の声の高かったプラスチック部がやっと機熟して二年前に生れ、全部とは云えないが大体楽器も左程困らない程度に揃った。男子だけの厳しい練習にもめげず、部員は楽しく歩調を揃えて合奏している。運動会等にも、今迄レコードでやっていた行進の伴奏を全部引受け、又、野球の試合には神宮迄応援に出向く等、活躍している。自主性の徹底している点も井草随一の部であろう。

ここ迄音楽部が発展して来る間にその中か

ら音楽の専門家、そして目下社会に学校に活やくをしている人々が沢山いる。ピアノニストでは武蔵野音大の講師、野口篤子さん、国立音大卒の杉本陽子さん、声楽家に国立音大の講師竹内春子さん、今年芸大卒の新進テナー大槻秀元君、国立卒横田節子(小林さん、小川潤子さん、共に関種子さんの門下で御活躍です。目下芸大在学中のソプラノ武石明美さん、作曲科在学中の金子晋一君とそれと、有望な将来を約束されている。井草の今年三月卒では武蔵野に四名国立に一名の進学があり、配役の中にも目下、ピアノニスト、ヴァイオリニストを目標して猛勉強中のものが数名居り先輩に続こうとしている。最後に井草の音楽部に最も長い事黙々と御奉公を続けて来たピアノもやっと新しいグラランドピアノが入り、練習用ピアノとしてその重い任務を解除された。二十年の歴史を最もよく知っている、この昔五百円のピアノも数万円かけて修理し新しく生れ変って、去年近代化された音楽室の片隅におかれている。

◇ プラスバンド部

まったく月日のたつのは早いもので、我部が創設されてから一年になった。三年前今年

卒業した先輩達が一年生に入学した時に、同好の四、五人の人々が色々の中学より一つ一つと楽器を持ちよって同好会が発足した。今年である我々が入学した時「プラスバンドはあるかな」とさがした所、あるにはあったが部の楽器はPTA補助によるとトロンボーン、ドラム、小バスの三つであった。その頃はまだ人氣もなく廊下にはってあった紙には確か「俺等はドラマーいぐさのドラマー」とか、「プラスに入れば必ずもてる」「青春を楽器でふっ飛ばそう」などその当時の流行の一端をもうかえるような迷文句で我々も笑わされたものだった。僕等が一年の時は楽器三つに部員十人位でほんとのささやかな会であった。三十三年の秋の文化祭では、皆さんおなじみの「海兵隊」を始めとして三曲を初演奏したが意外な反響を呼び翌年五月(すなわち去年)には、部昇格を全校千余名に問うた所反対わずか四、五十票という圧倒的多数の支持を得て部に昇格した。それでPTAから六万円の補助にて新しく四つの楽器がふえやっと音楽が出来る形となったのである。この間の先輩の努力は大変なもので、まさに東奔西走しその実績は部員一同皆感謝してゐる次第であり、また、今日のプラスを作りあげた

土台ともいふべきものです。部の人氣も上昇し続け、部員募集の時は二十人位いつでも集まり、楽器割り当てに、我々が嬉しい悲鳴をあげるさまであった。昨年は文化祭で「ラ・カンパルシータ」をはじめとしてもじどりがっさいを受け、またヴァイオリン同好会と結んでオーケストラにも進出しました。昨年はその他にもクラスコーラス祭、体育祭を始めとして杉並児童文化祭特出、三年生送別会、隈先生追悼会、卒業式その他色々の方面へ活躍を開始した。また本年度に入ってから、警視庁音楽隊員にコーチを頼み、全日本吹奏楽連盟にも加入して、秋のコンクール発表の初出場を目指してがんばり続けている。又昨年度コンクール優勝校の日大豊山高校を始め有名高校と連盟を結んで定期演奏会をこの夏催した。秋の定期演奏会是我校にて行う予定である。日頃の練習がものを云い都立では我学区一位の実力を養った、為に大泉高校新聞部の訪問を受け、石神井高校の先生から「一度我校へ演奏に来てくれ」とまでいわれるようになった。我部の特徴をあげると、まず第一に練習熱心である。恐らく校内随一であろう。学校のある時は、六時まで毎日練習し、この夏休みには毎日一―四時まで練習し

た。その為にこれについて行けない人は脱落してやる気のある人だけが残る。我部の方針は「やる気のない人はすぐやめてもらう。やる気のある人はたとえ下手でもかまわない」という主義である。第二に人の和である。練習の時は先輩などが来て良く指導してくれるし部の中ではいつも笑いがたえない。部員のほとんどの人々が、「組で遊ぶよりも部に来たほうが面白い」という。これも三年生等上級生が先輩意識を持たず、常に下級生と談笑し合える所にあると思う。大半の人が愛称で呼び合っているなんて他の部にはないでしょう。第三におとなしいこと。上品であること。これは本年富士五湖の一つ本栖湖へ二十数名で合宿に行った時に、先生が遅れて行った時に、先生が門に入るや否や支配人が「皆様おとなしくて、よい生徒さんばかりで、よい学校ですね」とほめたそうだ。ここでも井草の名をあげて来た。あのうるさい音がする練習を宿の人がすすんで二階を借してくれたり、普通の人より安い金でメシのおかわりはいくらでもと云ったのもこの辺にあると思う。音楽に気のある人は、ちゃっとわが部によってごらん。

◆美術部

二階の窓からの光は、一心に画を描いている人達に柔らかく注いでいる。物音はたゞ、画を描く筆の音と、時折校庭から聞こえる喚声だけ、あとはひっそり静まりかえっている。今日は、土曜日の昼下がり、日曜日を前にして皆楽しそうに、のびのびと画筆を動かしている。美術部はこんなに落ち着いた柔らかな雰囲気を持っている。美術部でなければこんな雰囲気には浸れないだろうと思う。そこに活動している部員達は、上品で何となくおっとりしていて、皆良い人達ばかりである。さて、美術部の構成を紹介すると、現在の部員数は二十八人で、そのうち一年生は十二人、二年生三年生をあわせて十六人である。今年の一年生は、出席率もよいし、部費支払い率も一番よいので我々は大いに期待しているわけである。又活動日は、初めの部会で火曜日と金曜日に決めたが、いつの間にかそんな制限はなくなってしまうようである。それは部員達が絵をとて描きたくなった時の気持を大切にしないからではないかと思う。故に美術部にはあまりきびしい規則がない。我々は、部員達個人／＼の判断に任せて、なる

べく黙っていることにしている。ある意味では非常に独立的な部だと言えよう。部員同志の親善を兼ねて、時々写生会と展覧会見学を行う。美術部とはいつもどんなことをやっているだろうと思っている人達は少なからずいると思う。そこで今度はその内容を、紹介しよう。

最初に石膏デッサン。これは絵をかくすべての基礎になる一番大切なもので美術部では、これを一学期の終りまで行なった。そしてデッサンの間に、水さい。油絵、クロッキ―等を書きあげた。その他ねんどなどもやっている。これからは美術の秋、そこでいそがしい、二十周年記念準備の間をぬってたくさん美術展に行きたいと思っている。このようにまとめてたくさんかくと美術部というものが大変忙がしく、又大いに活やくしているように見えるがそこは御安心下さい。放課後美術室をちょっとのぞいてみると、しごくのんびりとしている事がわかる。忘れていたが、部費は一月三十円也。今年の予算は去年よりへりましたが美術部というものを去年よりずっと、向上させていきたい。

昨年度日展最年少(当時三年)で入選した、わが部の最新鋭の先輩・鈴木宛子さんのあと

を追って一層の努力をしている。

◇華道部

我々華道部の、歴史といっても、部員の知っている事は、最大限三年間だけです。それ以前の事は、講師の野村先生に、お話を、うかがった事を参考に、致しました。井草高校に、華道部が誕生したのは、正式には、杉山校長先生時代の昭和27年からでした。(戦前もありましたが長続きしなかったそうです。)

講師は、現在ご指導下さっている草月流の大家野村先生、顧問は、今はご転任なさった小沢先生で出発したそうです。部員も、現在の半数以下の20名たらずでした。年々ます／＼人数も増し、井草の卒業生の中から、師範をとった方が10数名も、おられるそうです。その方々も今は、家元や、展覧会などで活躍なさっている様です。我々クラブも卒業生にご指導ねがっております。顧問の先生が、三十一年から、玉置先生に、おかわりになり、今までの／＼と、お世話下っています。

華道部クラブの雰囲気は、まずなごやかです。日ごろ血気あふれ運動をしている我々も、金曜日の活動日には、顔をそろえ、静かに、お花と、とり組んで、それぞれの個性

をだし、たのしく生けております。

お花をいける事により、生活にうるおいが出てたのしく毎日が、すごせるのではないかを思います。

又去年の文化祭には、野村先生、玉置先生をはじめとして多くの先生方のおかげと、部員全員の努力により見事二等賞になりました。このように、華道部は、ます／＼内容も充実してき、発展しつつあるクラブだと、信じます。又、欲をいえば、毎月の、花材の費用など(三百五十円)も生徒会の方からいただけると、個人負担が軽くなり、もっと入部しやすくなると思います。しかし今の状態では、そんな無理はいえないと思います。

井草高校も、二十周年をむかえすばらしい発展ぶりを見せております。我々華道部も学校と共により成長する事と思います。

◇手芸部

手芸部!これは女性にとって大変魅力あるクラブであると思います。そしてそうなくてはいけないのではないのでしょうか。

昔(?)は井草は女子高校で大変手芸クラブ活動が盛んであったと言う事を先生に伺って居ます。

これは先輩の方が現在より活発に部活動を行っていた事を意味するのでしょう。

しかし私個人としては三年近くの間大変楽しんで部活動に参加させて載っています。

外部から見てもどうこうと言うよりも内部がクラブらしい雰囲気であつたらそれで良いのではないかと考えます。

内部から見ても良い物は外部から見ても良い物、良いクラブであるのが普通の状態である事は言うまでもありません。しかし現在の状態ではその普通の状態であると言う事は言い切れないと思います。

そしてこの部は内向性である為にあまり目立たない：少なくとも井草高校においては：と、いう事が損な時がないでもありません。予算を載いたり、仕事をすることについても残念な事があります。

でも他のクラブに自分のクラブを理解してもらえないという悩みはこのクラブにおいても同様であると言う事はわかっています。が、ただ手芸部もその中の一つである事を井草高校の皆さんに理解して欲しかったわけですね。

現在の我部においては刺しゅう、人形づくり、染物、編物と種々多様な新しい物古い物

を活動の中に折り込んでいますが、その中でもう一つは毎年我部における年中行事の一つの様にして夏休みを利用して大変盛んに行っています。

部員数はおよそ二十名強、部員数の多少よりも中味の充実した、弾力のある部になる事を望んでいます。

そんなわけで今年の文化祭にも立派な作品が出品される事でしょう。

人数の関係で被服室を作品でいっぱいにするのは大変な事です。が、部員全員で又皆様の協力を得て全力を尽くし、御期待にそえる様張り切りつつあります。

とりとめもない事を書き下してきましたが、ここでクラブに対する私の希望を述べさせて載きます。

これから：今迄もそうであつたつもりですが、女性を女性らしくそしてもっともって広く人間らしくしていく。『楽しい場』であるクラブに発展する事を望んでやみません。

◆ 演劇部

演劇部、このクラブは実に楽しいクラブである。いつでも愉快な、和気あいあいとした雰囲気が漂っている。あたかも井草のオアシ

スであるかのごとく……これも十数年におよぶ長い演劇部の伝統のたまものである。

そして府立高女時代より現在にいたるまで常に学芸部の中心存在となつて活躍してきたのである。『学芸部の中では一番多くの予算を取つてゐるもんが』これは他のクラブのもらすせてものヤツカミ言葉であるが、とにかく井草に演劇部ありというところである。けれどもこのような伝統ある演劇部も決して一日にして出来たわけではない。

わが演劇部の創世紀——終戦前後はすべての悪条件の中で女子ばかりではあったが演劇を創造する猛烈なファイトをぶちまけてとにかく無我夢中で活動をした。石神井高校との合同公演など世評をも賑わした当時の模様は別稿（服部さんの寄稿）に詳しいので割愛しよう。

とにかく当時は、演劇にとつては絶体の舞台（講堂）をまだもたなかった。そこで、通称『うなぎの寝床』とよばれた旧平屋校舎（現在取壊してなし）の三教室ぶち抜き部屋を作つて、そのすみに教壇を積み上げた。歩くとギイギイと奇妙な音を立てゝいた。この舞台で『父帰る』を演じた時は、公演間際になつて主役が病気で倒れ、急拠代役として今

はなき隈先生が舞台に立たれた。セリフを覚えていなかったので舞台のソデにいた部員は終始肝を冷し通しであった。当時はまだ女子ばかりであったので男役は若い男の先生にやっていたりしてしたが、二十五年から男女共学となり、若干の男子部員をえた。また生徒数もふえたので「うなぎの寝床」では狭くなり且つは十周年を記念して文化祭を早稲田の大隈講堂で行う事になった。セッとは向うに行つて作るので帰りは遅くなり大変骨を折ったがそれにも増して困却したのはキャストである。なにしろ、モリエールの大作「女学者の群れ」をとり上げたが主要な男役が不足し結局若手の梅木、横田先生（お二人とも転任）に依頼したものの、極よみであったり、とてつもない大声をはり上げるなど：とにかく大作をこなした事は初めての大舞台をふんだ感激と共に心にきざまれている。

その後、本格的な共学時代に入ると共に男子部員も増えてほぼ同数になり、舞台も下井草の育英高校をかりるなどして活潑な活動期が始まった。校内放送で放送劇を送り、パントマイクの練習、演出論、照明等われわれの出来る限度での専門的分野に首をつっ込んで行った。文化祭が下井草の育英講堂であるから

セット、道具一切を大八車で運ぶ苦勞、文化祭前後は殆ど二週間徹夜で行う練習、仕込み等、なにしろメシより勉強よりも好きな連中が集つて苦樂を共にする演劇のクラブ活動の中に我々は教室の勉強以上に貴重な青春の感激と友情とを体得したと思つてゐる（當時の部員でその後演劇の専門方面に進んだ人も多い）。そのようにして多くの部員を擁して演劇部の黄金時代を形成していたが、中でもそのピークは二十八年秋、初出場の東京都高校演劇コンクールに見事入賞した事であろう。われわれの生活の中から自分たちで創作した演劇「子供たち」の入賞はこの二・三年來の部員たちの綜合研究と精進の結果と思う。

そして三十年、待望の講堂が完成した。我々は絶対の発表の場をえて、伝統の上に更に發展を期している。そして、その当時は文化祭乃至コンクールは、われわれの生活に則して現實を直視したりリアルなもの、送別会などはむしろロマンチックなものといった方針をとっていたが、とにかく過去から現在に伝えられてゐるなごやかで家庭的な零閑氣の中で一層充実と躍進に励んでいる。そして昨年は、サクラクラッ怒りの夜、二時間余の大作を上演、問題を投じたが、これも男子部員の充

実と思想性のある現實問題に真正面から迫つたという意味で今後の演劇部のあり方と氣迫を示すものと思う。

◆理化部

共学以前には各人が必ず一つのクラブに入ることになつていて、理化部では数人が集つて、氣象、分類などをやっていた。共学になつた二十五年頃から、男子の活動が活発となつた。文化祭が行われる様になり、我がクラブでは、青柳、大熊、増田、宮下、吉田貞夫、吉田茂、長沢、小山、高山、魚躬さん等が、バックルのメッキをしたり、ポマード、クリームを作り即売したり又、この頃まだ試験放送程度だったテレビの研究発表、氣象観測の発表、デモンストレーション等を行つた。この頃現在の理化部の基そがき上がった。又、日常のクラブ活動では、モノレール、ラジオ受信機の製作、エンジン機の研究等を行った。

この後一年位のスランプ時代があり、二十九年頃に、桑本、村田、長内、白井、瀬尾、松村、満岡、皆川さん等が、ラジオ、分析、合成せんい等の実験を行い、その名残が今でも準備室の器具、薬品等に見られ、なかなか

活発に活動したことがわかる。三十年になって、石井、小張、清水、野口、村瀬、木村さん等は、石井君が別記する様に、高度な研究発表をし、理化部の黄金時代を築いた。その後を受けて、大西、望月、鈴木、仁科、野田、村山さん等が、毎日の様に理化室に顔を見せ、合成樹脂、水の分析等を盛んに行っていた。それから今年卒業した、築山、松野、森、斎藤、五島、吉村、徳富君等有機化学、ラジオと取りくみ、楽しくやっていた。三十三年に石神井高校との交歓会を始め、毎年二回の発表会を開いている。又昨年一年の梅津君等五人が気象班を作り、昨年の台風の時大いに活やくした。この様な経過をたどって現在の理化部に至っている。残念な事に我がクラブは先ばいとつながりがうすく、今の三年でも、二年前の部員が分らないという状態でクラブ発展を進めるための大きなブレーキとなっている。

◆文芸部

昭和十六年、武蔵野の春は美しい。若葉がふつ、ふつと芽をふき、かわづが歓喜の声をふるわした。希望あふれるその季節に、井草高女は生れた。新設校への入学に、希望に胸

をふくらませ、オカッパの頬を紅潮させ入学式に臨んだ。「私達はもっと美しくならなければ」誰もがそう思っていた。そして、その手段として、彼女等は詩を作り、俳句を作る事を始めた。若あゆの息吹きが見られた。こうして、井草文芸部は、新鮮で美しい意欲の中に発足した。顧問の石川先生といわれる活発な先生を囲んで、三十名近くの部員が殆んど参加し、週一回部会を開く、題材は実に豊富であった。このような部会の下には、素晴らしい部誌も生れた。活版印刷の部厚い部誌、戸村先生はこう語られる。

「美しい活版の本でした。あれからずいぶん長い年月が過ぎましたが、まだあの様な本は現われませんねえ」。この場に及んで、私達の力のなさと、努力を疑う訳ではなかったが、少々恥かしくなり顔がほてった。

こうして、石川先生の顧問は、昭和二十二年で戸村先生に引きつがれた。

物静かな、女の先生の手にはバトンが渡された事は、部にとって、意義ある転換であった。部員の闘志は依然として消えてはいなかった。部員三十名。週に一回の部会を通して、部員同志が互に理解し合っていた。こうして詩集『麦笛』が発刊された。

昭和二十四年、文芸部は正式に生徒会文芸部として成立し、第三のバトンは水野先生に渡された。今までと変ったことは俳句が最も最高点に達した事であった。句会が始んど毎週開かれ実に楽しい部であった。又毎月『黎明』という文集が発刊された。二十名近くの部員の短文、詩、短歌が掲載されている。一つ一つの作品に、きれいなカットもかれ、何か女性らしさの漂う、十年前の『黎明』第六号が、違った感じを私達に与えて、今なお水野先生のお手もとにあった。

昭和二十五年、井草高女は、はえある都立井草高校、男女共学校として、新しく生まれ変った。部員は、相変らず女子が多数を示めたが、それでも、今までなかったある感覚が目覚めてきた。昭和三十年、現在の文集名『草の実』第一号がささやかではあったが発行された。その頃から、男子の部員もまじ今までとかく、女性の立場からのみの文章が多かったのに対して、そこには、前回の文集にみられた、やさしい、可憐さには欠けていたかもしれないが、何か一歩前進した充実さがあった。昭和三十五年三月『草の実』第五号は、百三十二頁にも達し、四十枚近くの長編創作が、発表されたり、戯曲、隨筆とそ

の文学的幅を増していった。又部員の親睦も含めて、文学散歩に出かけたり、文化祭には、「芥川賞、直木賞とはどういうものか」、「映画になった文芸作品」などについて展示したりもした。昭和三十四年顧問は小田島先生から毛利先生に引きつがれた。その年当時二年生だった私達が先頭にたって運営して行くべきだったが、就職試験日の突飛なぐり上げ等でうまく三年生との連絡もなく、手まどりがちだった。しかし、毛利先生の御親切な御指導のもとに曲りなりにも草の実八、九号を発行した。又三十五年二月にはアララギ派の上村占魚氏をお招きして、俳句会等を開いた。ところが、今年も二、三年生のバトンタッチがスムーズに行かず、予算は努力も空しく三の分一以下に引き下げられてしまった。悲しい事に草の実第十号は、一端中止しなければならなくなった。現在部員は八名程度しかいないが、新しく井草に入られた森田先生と力を合わせて十五頁たらずの「草の種」と称する小冊子を自らガリ版でする、輪転機をまわして三十五年七月第一号を発行した、未熟だらけだが、私達は苦勞と共に今までにないうれしさを感じている。

◇生物部

私達、生物部員は、井草二〇周年記念式典をむかえて、生物部、部内容について述べたと思います。

生物部は十年前、クラブ（部）として、発足しました。それ以前は、同好会として、三宝寺池及びその付近の植物の分布状態と、天然記念物である三宝寺池の植物群落について研究を行っておりました。クラブになってからは、植物迄であった範囲を動物までにひろげ、初期においては、主として「甲虫類」の東京付近における分布状態及びその生態観察等を行い、だんだんと、固定した研究課題へとすすめてきました。特に高尾山においては、十数回にわたって、採集会を開き、蝶の分布状態、蛾の採集、飼育等、を調べ、まともりあるものをしました。（高尾山は、東京に近いせいか、又、昆虫の宝庫と言われるだけに、沢山の昆虫が生活しており、高尾山と固定したわけです。しかし現在は、とても乱されており、盛夏でも、昆虫類を、追うのが困難になりましたが）。

昨年度は、昆虫に於て「蛾」を、植物に於ては「葉草植物」採集及び薬法等について、

等、又、アルコール発酵において、美味しそうな臭いを出す、甘くないお酒をつくったり、興味あるものを、やってきました。現在は、モルモットの諸実験、ハチ類についてその造巢状態、等を行っており、熱帯魚の繁殖について、その用意をしています。

以上の様な事柄が、生物部の研究題目になってきましたが、その他の事について。

私達の部室は、生物室及び、生物準備室を使用させてもらっています。今まで、（本館ができる迄は、生物部室が、普通教室及び先生方の部屋になっていたため、活動が不活発になりがちでしたが、気軽に出入り出来、とても便利になりました、現在のところ、部員は、三年生を除いて、実際に動いている者が、十二名程います。モルモットを飼育しているため、毎日出入りしています。

これからの、クラブ発展のために、私達は、研究、研究といわれる難かしいものでなく、もっと身近かな、日常生活において目につく研究を進めてゆきたいと思っています。

◇写真部

写真部について語るに、まずその歴史から話さねばなるまい。我々のクラブの創立は、

昭和二十一年四月、地理部の写真班として発足し、山岳班と、併行して活動を続けてきた。三十二年六月に、全日本学生写真連盟に加盟、翌年三十三年四月、地理部から別れて、写真部として正式に、独立し、活動を始めた。同年十一月、私立城北高等学校写真部より継いで、東京都高第学校写真連盟第十六支部、支部長校となる。そして現在にいたる。というのが我写真部の大ざっぱな、生い立ちである。以上の様に、写真部が独立してからの歴史は非常に浅く、我校の中では、新しい部の中には入る。つまりクラブとして独立してから、当年とって満三才というところだ。ここに陣どる部員は、総勢十数名、昼休み、放課後等、ここがよいたまり場となる。それに暗室としては、化学準備室のとなりを、先生の御好意によって、お借りしている。そこに、十数年来の先輩ゆずりの、引伸機一台と、ほか器具一式(?)がそろえてある。その広さ約四平方メートル、少しせまいが、楽しい写真部の活動の場の一つである。

写真部の活動を、一口に言えば、撮影、現像、引伸しをすることである。撮影は、学校の各種行事つまり文化祭とか、運動会、遠足等々時に応じて、部員全員で行っている。又

年に約二、三回撮影会も開いている。これらは、主にモノクローム(白黒写真)であるが、これらの他に、部員全員が協力しあって、カラースライドの製作も行っている。昨年十月に行われた視聴覚教育全国大会において、部製作のスライド『尾瀬』を上映し、現在の高校写真部のあり方について、新しい方向を示した。又学校の新聞放送委員会に協力して、新聞にのせる写真の撮影を行ったり、三年生部員による、卒業記念アルバムにのせる写真の提供も、行っている。一般の生徒からの、撮影の依頼もうけている。このように写真撮影するのも、大変楽しい活動であるが、暗室での写真部の活動も見がすことはできない。写真をやった者はだれでもわかるだろうが、引伸しをしたり、現像したりするのは大変楽しいものである。写真部の週二回の暗室使用日には、部員がこぞって使用し、暗室技術の習得にはげんでいる。

さて、我々写真部員の腕であるが、いくら写真部とはいえども、まだく、初歩の初歩に属すると思う。「ハイこちらをむいて、撮しますよパチリ」。などとやっている単なる記念写真時代からやっとこぬけだしたか、あるいはぬけ出しかけているひな鳥という所であ

る。だが、歴史的に考えると、過去二年間に、学生団体及び、各種民間団体のコンテストに入選した作品は二十点をこえている、まんざら、みすてたものでもないと思う。

さてこれからの写真部の方針であるが、まずは現在行っている物はもとより、今後は八ミリ映画なども十分に研究し、又特殊な写真(モンタージュ写真等)にも手を出して、広く部員の知識を深めて行きたいと思っている。又撮影会の回数もふやし、部員の腕の向上を計ると共に、コンテストなどにも多くの作品を入賞させたいと思う。そして将来においては、校内の展示会だけでなく都心でも行える様になりたいと思う。我々の歴史は非常に浅く、部長もわずかに三代目である、しかし、我々の意気こみはものすごく、部員一同団結し、先輩や先生の協力を得、益々写真部を発展させて行こうと思っている。

◇書道部

女子の手から女子の手に伝わり続けたクラブ、これが書道部の流れであろう。二十周年を祝うこの年に書道部は五人の男子を含み、学芸部をにぎわす花ざかりの音楽、英語部等の中に美しい我々の伝統の芸術「書」をこつ

こつと静かに綴る十数人の女子の手から、部の運営を托され、我々はしづみをおさえ、時をみ、黙って紙と筆を相手に書きつづける。

今回の展示会には力をしぼり立派な作品を作り上げよう。我々は臨時部会開くとスピーカーで流し、十数人の男女部員は一室に集った、目、目、目、初めて見る同志の目、なにかをひそめている目、これがじかにこつくと黙って書きつづる人達の目だ。

数日前、ふいに書道担当教師に展示会の件を頼まれ、初めて臨んだ初めての僕たち三人の三年を疑わぬ信じ切らせる人たち、ここで始めて書道部カラーの認識とクラブへの斗志を燃やした。一銭も使わず今日までやってきたらしい部の予算をこの二十周年にあて、週二回の練習日を設けることを全員一致で可決した。その日には、十数回の練習日を費し、精をこめた作品がこの二十周年を記念する井草に展示されていることだろう。

この書道部こそ、得と利を切望する意味での世俗から離れた真に愛するものを愛する人たちの部である。書道部が細く長くこの井草の伝統の一駒として築かれ続けんことをこの日に當て祈り願う。

◇ 社会科学研究会

「社研」という名称が戦後大手を振って大学、高校に復活した当時、まだ何となく学校にはこのコトバに飛びつけない雰囲気があった。今でも本校の社研は正式には「社会科学研究会」で「社会科学研究会」ではない。

それでも二十五、六年頃は鈴木、大野、毛利の各先生の指導で「社会科学会」が同好会として発足した。当初の「社研」は理論研究というより、社会事象の痛烈な批判に関心がむけられ、劇化にまで発展した。また、名大の古在由重教授を招いて研究会を行うなど相当活躍した。次いで三十年頃、谷先生を中心に、白井、瀬尾君などが輪読会形式で地味な研究を続けていた。

三十四年からは正式にクラブ昇格が認められ現在部員二十名余りで地道な討論会が行われるようになった。殊に一九六〇・六・一五事件前後は安保条約に対する校内の政治的関心が高まり社研主催で数回の討論会が熱烈に展開された。

社研は本質的に地味な研究を進める研究会であり、今後この灯が暗夜を照らす光源になってもいいものである。

学芸部での活動

—— 実のり多かった理化部 ——

石 井 坦

僕は家が近いのと歩くのが大好きなので、卒業後もたびたび学校をみます。物理と図工の校舎が建った時にはちょっと目をみはる気持でした。

僕がいたクラブは理化部でした。その頃は化学、生物のためのあの校舎が建つ前で、今はクリーム色になったが本校舎とそれに棟の馬小屋校舎しかありませんでした。一年の二期の終り頃、同級清水君（現東大理）に誘われて、銅・アンモニア・人絹のごとく原始的な実験を放課後にやったのが始りで、それから三学期の終りまで化学の実験に熱中しました。化学教室は本校舎の西に端にあり、薬品庫は一通りの実験設備をもってそれに附属しています。そこは冬は寒いが僕等の天国。騒々しい声と物音の中で実験は行われました。熱中する者の集りの常々として「パンカラ」の気風が僕等にもめばえました。実験する中には実験書やノートや実験着にしみがつきます。僕等はそれを「貫ろく」といって

自慢しました。これは自然にいたのでなければいけません。不自然だから。ある時、手に染料がついて中々とれなかった奴があり、皆うらやましがりました。

僕等のふんいきは反抗期の、落第性の、ニヒリスティックなものでした。だから学校のやり方に対する反感や嘲笑が実験の合間の話題になったのは当然です。若林先生はよく実験の指導をして下さいましたがその時でもあまり遠慮しませんでした。先生のまだ独身の頃で「話せ」て我々の不満の方向をよく理解して下さいました。「天国」では受験勉強以外の熱が爆発していたのです。

僕たちがやったのは染料の合成でした。アゾ色素からナフトール染料まで作ったのはそんなでもありませんが、その知識は大したものではありません。最後に高等技術を要するインダンスレン染料をやりましたが、授業をさぼっての熱戦のかいもなく敗れました。二年になってからは合成樹脂に進みますが実験よりも知識に重点が移つたようです。

さて実験するということは近代の科学の精神を最も身近かに体験することです。子供が土いじりをして実に多くのものを学ぶように高校生の僕等を幼児ぐらいの水準にしか置か

ない現代の科学に対しては、僕等が熱中した化学の実験は土いじりに相当するもので、それを通しては実に多くの近代の精神が身につくのです。それはじかの体験ですから何物にもまして近代人の基礎となるものです。しかし二種類の積木で遊んでも子供は同じものしか学びとりません。我々にしてもそうです。実験技術がうまくなることが大切なんじゃない。実験から何かを学びとることが大切だったのだ、実験ばかりやっていてもしょうがない。それは面白いがしっかりした理論の裏づけがない……。もう二年になろうとしていました。我々は理論と実験のよりよい調和を物理で得るつもりでしたが、理科のための新しい校舍を建てる工事のため実験はできず、そして熱はだんだん冷めてしまいました。それは今でも残念でしたがありません。

その後、二年の二学期にオパーリンの生命の起源という生化学の本を読み、文明の最も奥底にある「ものの考え方」について関心をもちました。唯物的とか観念的とかいう言葉をししばしば用いるようになり、その前には実験なぞ馬鹿らしいものにさえ思われました。それは、たとえば子供が恋愛のことを考えるのと同じで、今まで意識的にさえ避けて

きた問題に貧しい知識で真正面からぶつかったから考えがきわめて抽象的になってやけに頭がきしまりました。明らかに「背のび」です。

やはり、物理や数学などの「ものの理屈」についての体験をもつと豊富に準備しておくべきでした。しかし、背のびにせよ、大きな収穫があり、僕は以後の生き方に方向を与えられました。文化祭にはオパーリンの本の発表会と僕等の製品、あくまでもそれだけの陳列をやりました。これに反し翌年度の文化祭のときには借りものの展示が多かったのに、それが好評で、「充実」していると言われたので皮肉めいた面白さを感じました。二年の文化祭以後は三年の文化祭の時以外、理化部には熱中せず三年になってからは退部して「顧問格」になりました。三年の文化祭には気晴らしにと参加し熱中して物理の実験を担当しました。僕たちは多分にニヒリスティックだったからクラブ則でしばられるのがいやさに運動部を敬遠し、はじめは理化部にも入らないことにしていましたが、理化部自体が実は生存を危ぶまれていることを知っていれば部を再興して勝手にふるまったわけです。それは楽しく実のり多いものでした。

▼テニス族の氾濫

最近本校ではバク大な資金を投入し、運動場を整備し、新校舎職員室前にも近代的テニスコート二面を作ったが、第一番に喜んだのがふだん運動不足の先生方。ナレナイ手つきでラケットを振りまわし、タマヒロイに東奔西走する姿はイジラシイ限り。ランニングシャツにトレパンスタイルの生野先生。(ダレです、恰好ばかりというのは)更にまた、学校だけではモノ足りず、自宅付近の一時間五〇円のコートまで借りてハリキル齋藤先生等々。このところテニスコートは枯木も山のニギワイぶり。(註|| 諺の意は、つまらぬ物も数に加えておけば無いよりはましであるということのたとえ。)

▼部室は出来たか

このほど本校西北隅にスレート屋根にブロック建築の、一見馬小屋風の十一室つゞきの部室が出来た。学校当局はこの機会に学内各所の間蔵?に巣くうクラブ部室を一掃し、この収容所に追い込むハラ積り。だが、果してこの部室長屋が生徒諸君の憩いのオアシスとなり得るや、否や。(ヤハリ半分位は馬か牛でもいれておいたらいかゞ

でしようか——)

▼感銘深い話の話

先月二十九日開かれたPTA評議員会の劈頭、真田先生が挨拶の折、今夏行われた東北旅行中、十和田―後生掛間で濁流サカマク急流に、生徒たちが大木をはこんで架橋したというスリルに満ちたく、だりを熱演したところ、父兄一同感嘆しばし。つゞく二十周年等の予算関係の審議は皆ウワの空で、とうとう質問一つ出さずにめでた



話の屑籠

とか。校長談話の意図するところ一休奈辺にありしや——。

▼電話番号の覚え方

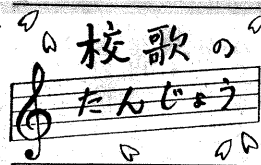
十月から新しく開通した本校の電話番号は(996)七八四五。サテ、これを何と覚えるか。ナヲヨイ。シチャヤガヨイ。ぐっと酒落れてナンバーフォーティファイブなどはいかゞ。但し、この番号は事務室にかゝりますから、先生にゴ用のムキは職員室用(996)〇三一九におかけ下さい。

▼定時制版月見の宴

十月五日の仲秋の名月の夜、定時制課程では例年の通り、観月祭と銘打って月見の宴を開いた。松本城のように国宝の建造物でもないで、ソノ辺の心配はなかったが多少のお供え関係の方が気になるので、主事の福田先生にオウカガイをたてると、「さア、だんごはどうカネ。あんぱんなら出ますガ」というゴ託宣。筆者は常々定時制の販売する夕食用菓子パンには食傷しているで、早々に失礼することにした。そのあと、ススキを沢山飾り、(これは土地柄文字通り無尽蔵に無料で生い茂っている)タダの満月を仰ぎ、スクエアダンスに興じ、安くて楽しい一ときを過したらしい。

▼秋の行事日程

十月十九日(水)井草祭開幕。弁論大会。
 〃 二十日(木)文化祭・展覧会 初日。
 〃 二十一日(金)文化祭・展覧会二日目。
 〃 二十三日(日)体育祭。井草祭終わる。
 〃 二十四日(火)国立博物館国宝展見学
 〃 二十六日(水)ピアノ披露、音楽祭。
 〃 二十七日(木)二十周年記念式典挙行
 ◎尚、文化祭・展覧会(両日共)・体育祭の日は、父兄卒業生の来場大歓迎!



堤の桜 花咲きにおい
野辺の空 澄みて清し
あゝ井草 井草の春秋
正しき道をふみしめて
はぐくまん我ら

乙女の力を
これは高女時代の井草の
校歌の一節である。私が

赴任して来た時井草には校歌がなかった。第一
一回卒業式に困るというので早速校歌を作る
事になり、二代目校

長杉山先生が教頭先
生だったが三田時代
の御関係の土岐善磨
先生に歌詞をお願い

明るい井草の象徴

近藤 ちか子

きれいな楽しい曲でとてもうれしかった。土
岐先生は、旋律と歌詞のアクセントの一致運
動に関心の深い作詞家で、二度ともその事を
くれぐれもおっしゃって居られた。山田先生
も芥川先生もそのようにお作り下さってい
る。その点は月並みの校歌とは一寸違ふ所で
ある。それから『いぐさ』という言葉はどう
しても6/8拍子の曲がよいのだそうである。
成程四拍子で『いぐさ』になつては一寸困
る。芥川さんは『ありふれた校歌はつまらな

いから変つたのにし
ましたよ。お通夜み
たいなのより明るく
ていゝでしよう。

但、伴奏が少しむづ

かし過ぎて一寸お気の毒です』とおっしゃっ
てにや／＼された。本当に明るくて、井草に
は最適のいゝ曲である。全くの処、伴奏も
半分なくむづかしくて卒業式の度毎、ミス
したら大変と、小さな心臓をトギ／＼させて
……。それでも、もう十回もおつとめを果し
て来た。二ツともそれ／＼にいゝ味をもつて
いて、井草にふさわしい、なつかしい歌であ
る。

(筆者は音楽科教諭)

編集後記

☑年経たる宇治の橋守こと問はむ
幾世になりぬ水のみなかも(藤原清輔)
創立以来、この露繁き井草の野道を分
けて、幾多の乙女 若人らがこの学舎に來り
集い、そして散り去っていった。茫々の武蔵
野の原に昇る月影に往時を偲べば、想い出は
既に二十年の星霜の彼方に没し去ろうとして
いる。昔の人はそののちを知らず、今の人は
そのかみの記憶がさだかでない。その日を惜
しみ、來たるべき時に思いを寄せて、そして
また、嘗て井草を愛した多くの人々のために、
この小冊子は草せられた。(山本記)

井草高校二十周年記念誌

昭和三十五年十月十日 印刷・発行

編集人 大野英雄・毛利和夫・西野清太

郎・山本哲夫・坂本光平・森川

勝代・町野朔・新井明友・大熊

弘江・宇内紘二・針生好則

発行者 都立井草高等学校

印刷所 相馬印刷株式会社

東京都練馬区上石神井一四〇
電話 (九九)〇三一九・九九七八四五
東京都千代田区神田猿樂町二ノ三

校 歌

作詩 土 岐 善 麿

作曲 芥 川 也 寸 志

Allegretto ♩=126

2 *mf*

は な ひ ら か け ふ か く や え さ く - ら
い あ う は と む じ て か せ き よ - く

さ き わ た り は る ま た - な つ - へ て り そ う - つ
ひ る ぐ ゑ り あ き ま た - ふ ゆ - へ と う - ふ じ あ

っ - じ - の い う あ ぶ ニ - や か き ば う ゆ た が -
や - ぐ も ゆ き か が - - や き せ ん と あ か ら -

は - - - つ ね に と も よ む ね を ひ ら け ば し ん あ い わ き
く - - - つ ね に と も よ ち か ひ か き ね て ふ み ゆ く じ け

あ - ふ - れ れ い け け け わ - れ - - り け の -
の - み - ち き り う ど け わ - れ - - り け の -

poco a poco cresc.

し - - - あ い い け さ わ れ ら こ こ に せ か い の ま へ に

ff

わ れ ら あ り - わ れ ら あ り へ ぐ さ こ り け

校 歌

はなびら影ふかくやえさくら咲きたり

春また夏へ

照りそうつつじの色あざやか

希望ゆたかに

つねに友よ 胸をひらけは

親愛和気あふれ 礼譲われら樂し

公孫樹は黄葉して風清く ひるがえり

秋また冬へ

凜凜士 彩雲 雪かぐやき

前途 あかるく

つねに友よ 誓いかさねて

暗みゆく自主の道 協同われら樂し

あゝ井草 われら ここに

世界の前に

われらあり われらあり 井草高校

